

おお まや たつ み が はら
市原市大厩辰巳ヶ原遺跡・
や わた ご しょ あと
八幡御所跡推定地

1 9 9 9

大厩辰巳ヶ原遺跡等調査会
財団法人 市原市文化財センター

序 文

房総半島東京湾岸のほぼ中央に位置する市原市は、気候温暖で自然環境に恵まれており、千葉県下でも有数の遺跡が残されております。特に稲荷台1号墳出土の鉄剣や国府、国分僧寺・尼寺の所在は、古代の上総国の中心地として重要な位置を占めていました。

一方、本市は首都圏に位置することから、地域開発が急速に進展してきており、これら地域開発と埋蔵文化財の保護との調和をはかりながら、貴重な文化財を末永く後世に伝えていくことが我々に与えられた大きな課題ともいえます。

今回ここに報告する遺跡は、宅地等開発事業に伴って実施した辰巳ヶ原遺跡と店舗用駐車場等造成に伴って実施した八幡御所跡推定地の2遺跡であります。辰巳ヶ原遺跡では、縄文時代早期の炉穴群や古墳時代後期の住居跡、八幡御所跡推定地では中世の方形に巡る土塁が検出されました。

本報告書が、学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く市民の皆様に活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに本書の刊行に際しご指導、ご協力いただきました株式会社日本石灰工業所および株式会社ジョイフルホンダ、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会をはじめとする関係の皆様や関係機関に対し、心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 小 茶 文 夫

例 言

1. 本書は、千葉県市原市大厩における宅地等開発事業に先行した大厩辰巳ヶ原遺跡と市原市五所における店舗用駐車場等造成に先行して実施した八幡所跡推定地の調査報告書である。
2. 大厩辰巳ヶ原は大厩辰巳ヶ原1797-1-2地先他、八幡御所跡推定地は五所字神明1,746他に所在する。
3. 発掘調査は、株式会社日本石灰工業所および株式会社ジョイフルホングの委託により、千葉県教育委員会の指導のもとに、市原市辰巳ヶ原遺跡調査会および市原市八幡所跡推定地調査会が実施した。

4. 調査対象面積は、以下のとおりである。

大厩辰巳ヶ原遺跡：確認調査3,130m²の10%、本調査672m²

八幡御所推定地：確認調査4,600m²の10%、本調査210m²

5. 発掘調査と整理作業および報告書作成は以下のとおり実施した。

大厩辰巳ヶ原遺跡

確認調査	昭和56年4月13日～4月28日	担当者	穴澤義功
------	------------------	-----	------

本調査	昭和56年5月6日～6月12日	担当者	穴澤義功
-----	-----------------	-----	------

整理作業	昭和56年6月13日～昭和57年3月31日	担当者	穴澤義功
------	-----------------------	-----	------

整理作業	平成10年9月25日～平成11年3月31日	担当者	田中清美
------	-----------------------	-----	------

八幡御所跡推定地

確認調査	昭和56年6月10日～6月20日	担当者	越川敏夫
------	------------------	-----	------

本調査	昭和56年8月26日～8月29日	担当者	越川敏夫
-----	------------------	-----	------

整理作業	昭和56年8月30日～昭和57年3月31日	担当者	越川敏夫
------	-----------------------	-----	------

整理作業	平成10年9月25日～平成11年3月31日	担当者	栗田則久
------	-----------------------	-----	------

本書の挿図・写真図版の作成は穴澤・越川および栗田・田中が、原稿執筆と編集は栗田・田中が実施した。なお、縄文土器については、世田谷区教育委員会品川裕昭氏、当センター蜂屋孝之氏に、中世陶器については市原教育委員会の櫻井敦史氏にご教示をいただいた。

6. 調査した記録類（図面・写真）と出土遺物は、市原埋蔵文化財調査センターで保管している。
7. 今回の調査コードは、辰巳ヶ原遺跡が「32DT」である。

凡 例

1. 方位は磁北を採用し、水準は海拔高度を使用した。
2. 本書に掲載した遺構図は、1/60縮尺、遺物実測図1/6を基本としている。（古銭は原寸）
3. 遺構図内の推定線は破線、断面はスクリーントーンNo.273、焼土はNo.320で表現した。遺物は左断面を採用し、中心線の1点鎖線は反転させたことを示し、破線は推定である。須恵器は断面を黒く塗りつぶして区別した。

調査組織（財団法人 市原市文化財センター）

平成9年度

役員

理事長 白鳥一夫（専任）
副理事長 鳥海清宏（市原市教育委員会生涯学習部長）
常務理事 山口節（専任）
理事 大野 皎（市原市教育委員会教育長）
理事 加藤晋平（國學院大学教授）
理事 寺村光晴（和洋女子大学名誉教授）
理事 木村千春（郷土史家）
理事 鵜澤綱夫（市原市企画部長）
理事 田中信雄（市原市総務部長）
理事 大町裕之（市原市都市計画部長）
監事 高山美則（市原市出納室長）
監事 鈴木利昭（市原市教育委員会教育総務部総務課長）

職員

庶務課

庶務課長 宮崎澄夫
主事 高浦貞子
主事 阿部茂之
事務員 常澄智子

調査一課

調査一課長 栗田則久
副主査 蜂屋孝之
主査 田中清美
係長 小出紳夫
副主査 近藤 敏
副主査 高橋康男
副主査 田所 真
調査研究員 小川浩一
調査研究員 北見一弘
調査研究員 鶴岡英一
調査研究員 牧野光隆
調査研究員 小橋健司
主事 大鐘光江
事務員 辻 葉子

調査二課

調査二課長 宮本敬一
副主査 大村 直
主任調査研究員 忍澤成視
調査研究員 半田堅三

平成10年度

理事長 小茶文夫（市原市教育委員会生涯学習部副参事）
副理事長 杉田 昭（市原市教育委員会生涯学習部長）
常務理事 山口節（専任）
理事 大野 皎（市原市教育委員会教育長）
理事 加藤晋平（國學院大学教授）
理事 寺村光晴（和洋女子大学名誉教授）
理事 木村千春（郷土史家）
理事 鵜澤綱夫（市原市企画部長）
理事 河野徳三（市原市総務部長）
理事 大町裕之（市原市都市計画部長）
監事 高山美則（市原市出納室長）
監事 武内邦夫（市原市教育委員会教育総務部総務課長）

職員

庶務課

庶務課長 宮崎澄夫
主事 高浦貞子
主事 阿部茂之
事務員 常澄智子

調査一課

調査一課長 栗田則久
主幹（課長補佐） 蜂屋孝之
主査 田中清美
係長 小出紳夫
副主査 近藤 敏
副主査 高橋康男
副主査 田所 真
調査研究員 小川浩一
調査研究員 北見一弘
調査研究員 鶴岡英一
調査研究員 牧野光隆
調査研究員 小橋健司
主事 大鐘光江
事務員 辻 葉子

調査二課

調査二課長 宮本敬一
副主査 浅利幸一
主任調査研究員 忍澤成視
調査研究員 半田堅三

目 次

本文目次

序 文

例言・凡例・調査組織

目 次

第一章 辰巳ヶ原遺跡

1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査方法と内容	6
4. 検出した遺構と遺物	9
(1) 1号炉穴群	9
(2) 2号 〃	10
(3) 3号 〃	11
(4) 1号土坑	11
(5) 2号 〃	11
(6) 3号 〃	11
(7) 4号 〃	11
(8) 5号 〃	11
(9) 1A・B住居跡	16
(10) 2号 〃	16
(11) 1号墓壇	19
(12) 溝状遺構	24
(13) その他の出土遺物	27
5. まとめ	30

第二章 八幡御所跡推定地

1. 調査に至る経緯	35
2. 遺跡の位置と歴史的環境	35
3. 調査の概要	39
4. 検出された遺構	39
5. まとめ	42

抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置図 1：50,000	4	第4図 主なトレンチ土層セクション図	7
第2図 地形図	5	第5図 調査全体図	8
第3図 トレンチ設定図	6	第6図 1号炉穴群実測図	9

第7図	2号	〃	……………	10	第20図	3号	〃	……………	23
第8図	1号・2号	炉穴群出土遺物実測図	……………	12	第21図	2・5・6号	溝状遺構実測図	……………	24
第9図	2号・3号	炉穴群、1号土坑出土遺物実測図	……………	13	第22図	5号土坑、グリッド等出土遺物実測図	……………	25	
第10図	3号	炉穴群、1～5号土坑実測図	……………	14	第23図	グリッド等出土遺物実測図(1)	……………	26	
第11図	1A・B号	住居跡実測図	……………	15	第24図	〃	(2)	……………	28
第12図	1A・B号	住居跡土層図（E－3、F－3、G－3の北側壁付近）	……………	17	第25図	〃	(3)	……………	29
第13図	2号	住居跡実測図	……………	17	第26図	種類別遺構配置図	……………	31	
第14図	2号	住居跡掘り方及びカマド実測図	……………	18	第27図	1982年の調査で検出した 竪穴住居跡出土土器	……………	32	
第15図	1号	墓墳実測図	……………	19	第28図	遺跡の位置図	……………	36	
第16図	1A・B号、2号	住居跡、1号墓墳出土遺物実測図	……………	20	第29図	周辺遺跡位置図	……………	37	
第17図	溝状	遺構配置図	……………	21	第30図	周辺地形図	……………	38	
第18図	1号	溝状遺構実測図	……………	22	第31図	土塁実測図・トレンチ配置図	……………	40	
第19図	4号	〃	……………	22	第32図	土塁部上層断面図	……………	41	
					第33図	現地略図	……………	43	

表組目次

第1表	市原市辰巳ヶ原遺跡発掘調査会組織	……………	1	第4表	溝状遺構一覧表	……………	21
第2表	遺跡の位置図番号表	……………	2	第5表	市原市八幡御所跡調査会組織	……………	35
第3表	新旧遺構名対照表	……………	8				

写真図版目次

図版1	遺跡遠景、調査前の状況		図版12	1号	〃	土層セクション
図版2	トレンチ設定状況、同一部拡張			3号	〃	〃
図版3	本調査区域近景		図版13	1号溝状遺構と4号溝状遺構の交差部分		(北側より)
図版4	1号炉穴群					〃
図版5	2号・3号炉穴群					(南側より)
図版6	1号土坑・同遺物出土状況		図版14	4号溝状遺構と遺物出土状況		
図版7	2号土坑、5号土坑			4号溝状遺構と1号溝状遺構の交差付近		
図版8	3号土坑、1号墓坑		図版15	2号溝状遺構西端部遺物出土状況		
図版9	1A・B号住居跡全景			2号溝状遺構(東側より)		
	1B号住居跡床面付近遺物出土状況		図版16	5号溝状遺構全景		
図版10	2号住居跡全景			5号	〃	(南側より)
	〃	カマド周辺の状況	図版17	調査北区南西側調査状況		
図版11	〃	カマド検出状況		F-6区付近包含層遺物出土状況		
	3号溝状遺構					

図版18	F-20トレンチ 6号溝状遺構検出状況 主な現地発掘調査参加者	図版23	グリッド等出土遺物(1)
図版19	1号、2号炉穴群出土遺物	図版24	グリッド等出土遺物(2)
図版20	2号、3号、1号土坑出土遺物	図版25	グリッド等出土遺物(3)
図版21	1A・B号住居跡出土遺物 2号住居跡実測図	図版26	グリッド等出土遺物(4)
図版22	3号炉穴群及び グリッド等出土遺物	図版27	土塁・トレンチ状況
		図版28	トレンチ状況
		図版29	トレンチ・グリッド状況
		図版30	トレンチ状況

大既辰巳ヶ原遺跡

第一章 辰巳ヶ原遺跡

1. 調査に至る経緯

昭和56年1月12日付けで株式会社日本石灰工業所取締役社長新田圭二は、千葉縣市原市大厩字辰巳ヶ原1,797-1及び2番地に会社の独身寮建設を計画し「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を千葉県教育委員会と市原市教育委員会に提出し

第1表

た。それを受けての現地踏査などにより昭和56年2月20日付けで千葉県教育委員会教育長より「土師器散布地1ヶ所」の回答がなされた。その後3者による度重なる協議がなされ、対象地全域について確認調査を実施する方針が決定した。発掘調査は、「市原市辰巳ヶ原遺跡発掘調査会」（第1表）を組織して、昭和56年4月13日から28日まで実施した。その結果、ほぼ全域にわたり遺構や遺物包含層が確認され、再び協議した結果、建物の工事及びその影響範囲について本調査を実施し(672㎡)、その他の範囲(2,458㎡)については土盛及び現状保存となった。本調査は確認調査と同じ組織によって同年5月6日から6月12日まで実施した。

市原市辰巳ヶ原遺跡発掘調査会組織	
会長	石井正泰 市原市教育委員会教育長
委員	藤野忠昭 (株)日本石灰工業所千葉工場総務課長 小出新一郎 市社会教育課長 穴沢義功 調査主任
調査主任	穴沢義功 日本考古学協会員(発掘担当者)
調査補助員	安井文衛 氏橋洋子 高浦貞子
事務局	安川文衛 秋葉定信 (株)日本石灰工業所千葉工場 田中清美 市社会教育課
作業員	15名
現地事務所	市原市大厩辰巳ヶ原1337番地

2. 遺跡の位置と環境

大厩辰巳ヶ原遺跡は、東京湾の旧汀線より約3km東側に入った地点で、村田川下流域左岸台地上のやや奥部に位置する。この村田川と養老川に挟まれた台地は標高が50m以下で台地上は比較的平坦であるが、小谷が幾枝にも入り込み複雑な地形を呈する。この台地は通称「市原台地」と呼ばれ更に地元では小谷によって区別され「菊間台地」「大厩台地」などと呼称される。当遺跡の存在する台地はその大厩台地上に位置し、標高は約25mで西側に菊間台地とを分ける幅100m前後の小谷が北側より入り込んでいる。その小谷との比高は約15mである。今回調査した地点は、台地の西縁部で西に小谷を望む地点である。村田川の沖積地に続く谷口からは約1km奥に入っている。小谷に下る斜面は比較的急傾斜である。「大厩辰巳ヶ原」という遺跡名は大厩の地区名と小字の辰巳ヶ原から名付けているが、「大厩」は古代駅路で大前駅に推定する説があり、^{註1}「辰巳」は国造本紀の菊麻国造の奥津城といわれる菊間古墳群の南東に位置する点から名づけられたといわれるが^{註2}いずれも確証はない。

当遺跡は、東京湾に近く村田川水系に面しているため周辺には数多くの遺跡が存在する。ここでは当遺跡検出の遺構と関連する遺跡を中心にその概観をみてゆきたい。

縄文時代早期末の炉穴群は、周辺の諏訪台遺跡^{註3}(522基)大厩遺跡(茅山上層、下層式、7群)^{註4}などが、また、村田川対岸の草刈六之台遺跡では(茅山下層式、33群)^{註5}などが調査されている。この他に縄文時代早前期の貝塚を伴う低湿地遺跡が村田川流域の浜野川神門遺跡^{註6}で認められている。中期から後期の貝塚では、村田川左岸下流域台地端部に存在する手永貝塚^{註7}、中流域右岸台地端部の草刈貝塚^{註8}、中流域左岸段丘上の鎌之助遺跡(貝塚)^{註9}などがある。弥生時代中期から後期までは、菊間遺跡^{註10}や大厩遺跡^{註11}及び草刈六之台遺跡^{註12}などが大集落として存在し、更に後期では若宮遺跡^{註13}、東官台遺跡^{註14}、祭り野

遺跡^{註15}が集落として認められている。小田部新地遺跡^{註16}や潤井戸中横峰遺跡^{註17}では中期の方形周溝墓が検出されている。古墳時代では、初期古墳として小田部古墳（墳丘墓）^{註18}があげられる。また、村田川左岸には、新皇塚古墳^{註19}、大厩浅間様古墳^{註20}、右岸には七廻塚古墳^{註21}、大覚寺山古墳と前期から中期の古墳が存在する。この他、左岸に菊間、下郷、大厩、天王台、久々津、杉山、山王後、小谷、寺谷、権現山、鹿ノ原など、右岸に椎名崎、富岡、生浜、高沢、草刈などの多くの古墳群が流域に存在する。特に、姫宮、東関山、杉山、高野前は前方後円墳で、規模から主墳的な存在観を与えている。集落は、左岸に下鈴野^{註23}、西山^{註24}、祭り野^{註25}、大厩^{註27}、菊間^{註28}、鎌之助^{註29}などの遺跡が調査され、低地を望む比較的広い台地や段丘上などを利用して集落が認められている。奈良・平安時代では上総国として律令体制に組み入れられ、中心地は官衙や国分寺の所在する国分寺台や市原地区に移る。しかし集落が文作遺跡^{註30}や喜多仲台遺跡^{註31}などの計画的集落として発見され

ている。また、川焼窯址は国分寺の官窯跡に推定されている。墳墓は、方形周溝状遺構^{註32}の形で下鈴野遺跡^{註33}などで検出されている。中世は城郭跡として、村田川右岸に小弓城^{註34}、草刈城^{註35}、市原台地上に、白船城^{註36}、市原城^{註37}、能満城^{註38}、さらに村田川の左岸低地上に大厩館^{註39}が存在し、千葉氏、武田氏、里見氏、北条氏などの勢力抗争の場となっている。また、幕末の一時期には菊間藩^{註40}が置かれている。辰巳ヶ原遺跡の立地する台地には、特に城郭は認められないが、対岸の草刈城、北側低地の大厩館跡などの存在から、利用価値の高い地域であったことは違いない。

辰巳ヶ原遺跡付近の調査では、菊間向原遺跡で炉穴群4群（鶴ヶ島台式）^{註41}、阿玉台式期の竪穴住居跡1軒、方形周溝状遺構1基、溝1条、辰巳ヶ原遺跡（1982、武部）^{註42}で炉穴群3群（茅山上層、下層式）、竪穴住居跡1軒（鬼高式）、辰巳ヶ原遺跡（1989、田中）^{註43}で溝1条、大厩細野遺跡^{註44}で竪穴住居跡1軒（久ヶ原式）、大厩弁天台遺跡で円墳1基、竪穴住居跡2軒（久ヶ原式末）^{註45}が調査されている。大厩辰巳ヶ原の台地は、今までの成果からみると縄文時代早期末の炉穴群、弥生時代の集落、大厩古墳群、古墳時代後期の集落、奈良・平安時代の墳墓、中世の溝などを主体とする遺構群が伺える。また、西側の小谷最奥部に基壇や布目瓦、墨書土器を検出し奈良時代の廃寺跡と考えられる南大広遺跡^{註46}やその隣接地には方形周溝状遺構1基が調査された定堀込遺跡^{註47}が存在する。

また、周辺の小字は（第2図）、辰巳ヶ原・辰巳ノ原・辰巳台（新しい小字）の他、向原、下野、台ノ下、弁天、文珠田、北斗、上北斗などがみられる。

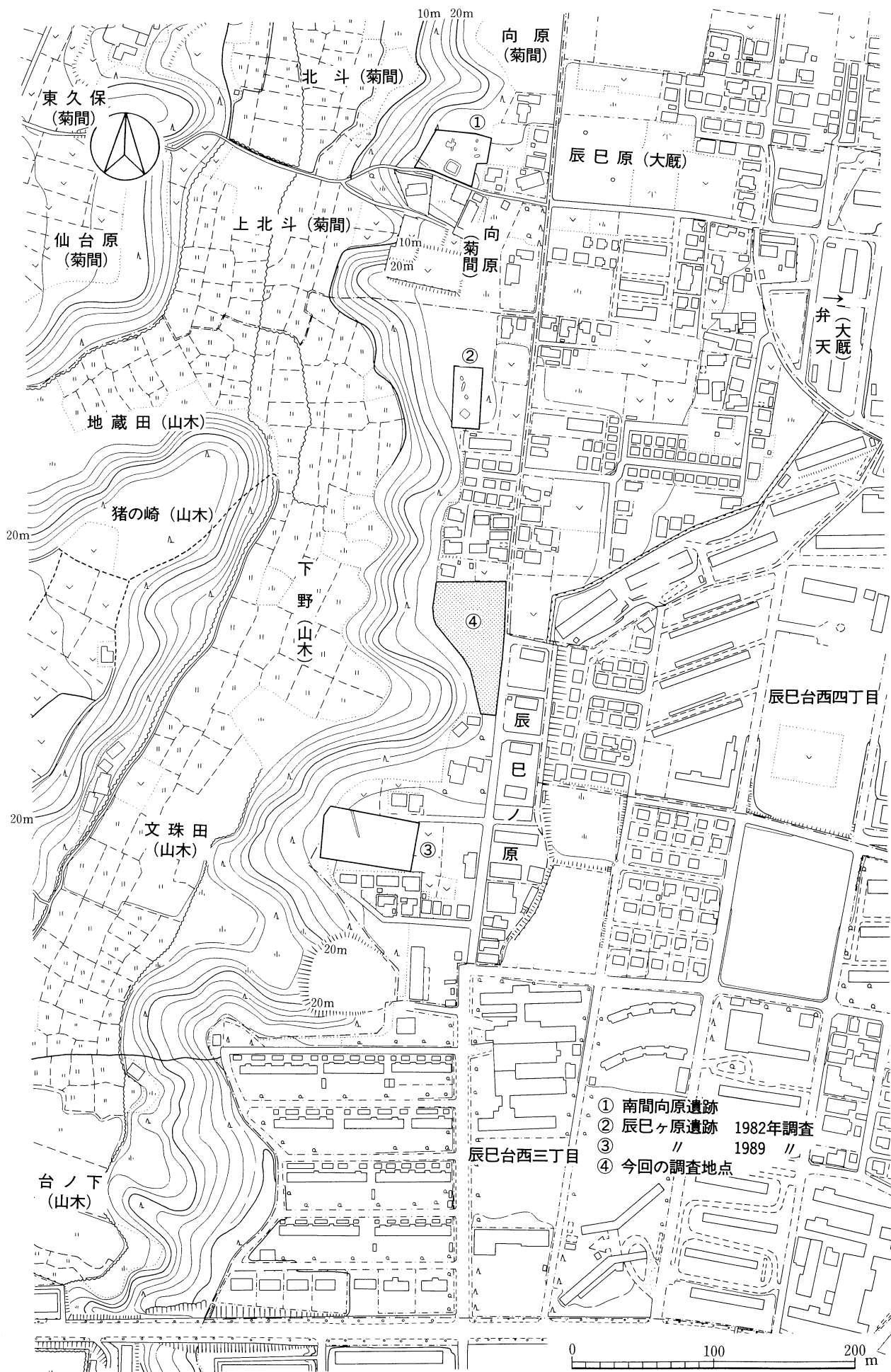
第2表 遺跡の位置図番号表

1. 辰巳ヶ原遺跡（今回の調査地点）	31. 杉山古墳 全長60m（前方後円墳）
2. 〃（昭和57年、山武考、武部氏調査）	32. 山王後1号墳 〃 33m（4号）
3. 弁天台遺跡（昭和63年調査）	33. 居鞍古墳群 3基
4. 下郷古墳群 5基	34. 天王台古墳群 26基
5. 大厩二子塚古墳（全長63.4m）	35. 下鈴野遺跡
6. 〃 浅間様古墳 全長45m	36. 剝野遺跡
7. 大厩遺跡	37. 東宮台遺跡
8. 仙台原古墳群	38. 南大広遺跡
9. 山木古墳群 3基	39. 〃 廃寺跡
10. 菊間遺跡	40. 定堀込古墳群
11. 姫宮古墳 全長51m（前方後円墳）	41. 五所・四反田遺跡
12. 東関山古墳 全長61m（〃）	42. 古甲遺跡
13. 菊間天神山古墳 全長44m（円筒埴輪有？）	43. 郡本遺跡群（市原郡家跡推定地）
14. 手永貝塚	44. 上総国分尼寺跡
15. 村田服部遺跡	45. 上総国分僧寺跡
16. 七廻塚古墳	46. 諏訪台遺跡（古墳群）
17. 大覚寺山古墳	47. 西広貝塚
18. 浜野川神門遺跡	48. 小田部新地遺跡
19. 高沢古墳群	49. 小田部古墳群
20. 生浜古墳群	50. 下ヶ谷台遺跡
21. 椎名崎古墳群	51. 文作遺跡
22. 富岡古墳群	52. 武土遺跡
23. 草刈1号墳（古墳群） 1号墳全長34m	53. 能満城郭跡
24. 草刈遺跡	54. 大厩遺跡
25. 草刈3号墳、草刈城郭跡	55. 白船城郭跡
26. 草刈32、33号墳	56. 市原城郭跡
27. 川焼台遺跡	57. 小弓城郭跡
28. 永吉権現山古墳群	58. 西山遺跡
29. 鎌之助遺跡	59. 久々津古墳群 6基
30. 高野前古墳 全長90m（前方後円墳）	

(註)

- 註1 雨宮龍太郎「房総古代駅路研究史」『千葉県文化財センター研究紀要16』P590、627、1995
- 註2 田中喜作氏ご教示
- 註3 浅利幸一「14. 諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報昭和63年度』P56. 一覧表 1994 (財)市原市文化財センター
- 註4 三森俊彦他「市原市大厩遺跡」1974 千葉県都市公社 (財)千葉県文化財センター
- 註5 西野雅人他「千原台ニュータウンⅥー草刈六之台遺跡一」1994 (財)千葉県文化財センター他
- 註6 金丸誠他「千葉市浜野川神門遺跡」1989 (財)千葉県文化財センター他
- 註7 寺門義範「千葉市神門遺跡」1991 (財)千葉市文化財調査協会
- 註8 近藤敏「1. 菊間手永貝塚」『市原市文化財センター年報昭和57、58年度』1985 (財)市原市文化財センター
- 註9 高橋康男「草刈遺跡」1985 (財)市原市文化財センター
- 小林清隆他「市原市草刈貝塚」1990 (財)千葉県文化財センター
- 註10 田所真「潤井戸鎌之助遺跡」『第14回市原市文化財センター遺跡発表会要旨平成10年度』P8・9、1999 (財)市原市文化財センター
- 註11 註3と同じ
- 註12 註4と同じ
- 註13 白井久美子他 註5と同じ
- 註14 滝山昌彦他「若宮遺跡(C地区)」市原市文化財調査報告書第3冊 市厚市周辺地域の調査P7～26、1967 市原市教育委員会
- 註15 高橋康男「第2章東宮台遺跡」『平成5年度市原市内遺跡発掘調査報告書』1994 市原市教育委員会
- 註16 田中清美他「千葉県市原市潤井戸地区祭り野遺跡・山王後1号墳」1978 祭り野遺跡・山王後古墳調査団
- 註17 山口直樹「千葉県市原市小田部新地遺跡」1984 (財)市原市文化財センター
- 註18 小川浩一「2. 潤井戸中横峰遺跡」『第12回市原市文化財センター遺跡発表会要旨平成8年度』P8・9、1997 (財)市原市文化財センター
- 註19 沼澤豊、田中新史他「小田部古墳の調査」1972 市原市教育委員会
- 大村直「小田部向原遺跡」『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・菊間雲ノ境遺跡』1991 (財)市原市文化財センター
- 註20 齊木勝他「第1部新皇塚古墳」『市原市菊間遺跡』1974 (財)千葉県都市公社他
- 註21 浅利幸一「2. 大厩浅間様古墳」『第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 平成2年度』P6 (財)市原市文化財センター
- 註22 武田宗久「千葉県千葉市七廻塚古墳」『日本考古学年報11』1958 日本考古学協会
- 註23 全長62mの前方後円墳
- 註24 第2表参照。高野前古墳は墳丘は残存していないと考えられる。
- 註25 大村直「下鈴野遺跡」1987 (財)市原市文化財センター
- 註26 鈴木英啓「潤井戸西山遺跡」1986 //
- 半田堅三「草刈尾梨遺跡」1992 //
- 註27 註16と同じ
- 註28 註4と同じ
- 註29 註3と同じ
- 註30 註10と同じ
- 註31 大村直「千葉県市原市文作遺跡」1989 (財)市原市文化財センター
- 註32 小出紳夫「2. 喜多仲台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成4年度』P10 (財)市原市文化財センター1996
- 〃 「3. 喜多仲台遺跡(2次)」〃 平成6年度 P13 〃 1997
- 註33 田形孝一「市原市川焼瓦窯跡発掘調査報告書」1994 (財)千葉県文化財センター
- 註34 註25と同じ
- 註35 小高春雄「小弓城跡」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ 旧下総国地域』P165 千葉県教育委員会1995
- 註36 小林信一他 註5と同じ
- 註37 高橋康男「白船城跡」1986 (財)市原市文化財センター
- 櫻井敦史「白船城跡Ⅱ」1997 (財)市原市文化財センター など
- 註38 田中清美「市原市市原城郭跡」1998 (財)市原市文化財センター
- 註39 鈴木英啓他「能満城」『日本城郭大系第6巻 千葉・神奈川』P190 1980 新人物往来社
- 註40 「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ一旧上総・安房国地域一」P103の表5 1996 千葉県教育委員会
- 註41 大室晃「第一章第三節菊間藩」『市原市史(下巻)』P49～88 1982 市原市
- 註42 米田耕之助「第2章菊間向原遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』1988 市原市教育委員会
- 註43 武部喜充「千葉県市原市埋蔵文化財緊急調査報告書」1983 市原市辰巳ヶ原遺跡調査会
- 註44 田中清美「(7)辰巳ヶ原遺跡」『一不特定遺跡報告書(1)一』P61～63、1989 (財)市原市文化財センター
- 註45 〃 「3. 大厩細野遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』P14～23、1993 (財)市原市文化財センター
- 註46 大村直「市原市大厩弁天台遺跡」1989 (財)市原市文化財センター
- 註47 浅利幸一「4. 南大広遺跡(B地区)」『第7回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』P14.15 1992 (財)市原市文化財センター
- 註48 近藤敏「第5章定堀込遺跡」『昭和63年度市原市内遺跡群発掘調査報告』P40～43、1989 市原市教育委員会





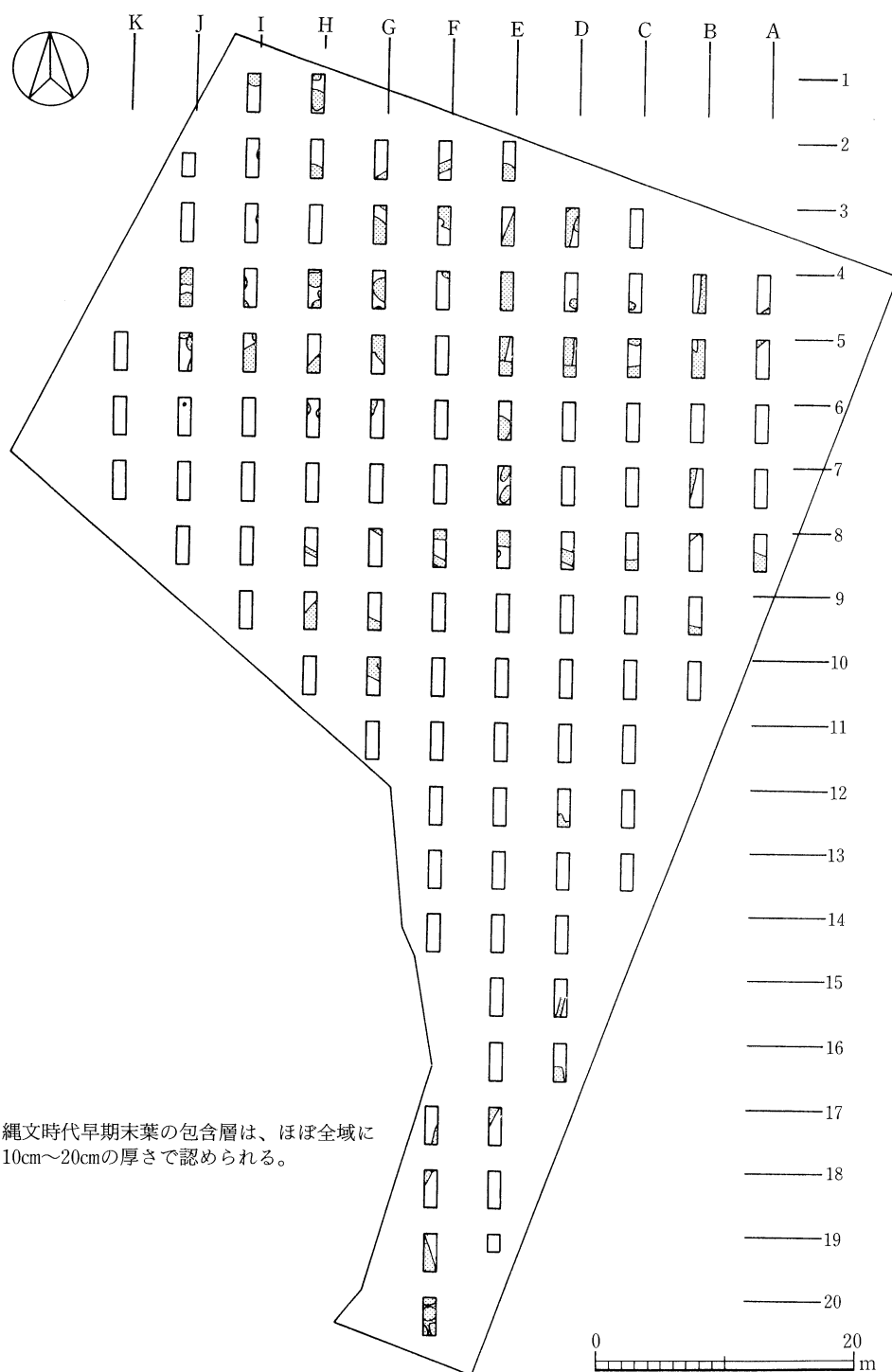
第2図 地形図

3. 調査方法と内容

調査は確認調査を実施し、照会地全域の遺構の確認を行った上で結果的に建物予定地等掘削影響範囲を本調査に移行することになった。確認調査は、全域にグリッドを東西が東からA～K、南北を北から1～20の記号で設定し、「A-1区」などと表現した。トレンチは各グリッドの北東隅を基準に1×3mの大きさで設定した。その結果、一部（南西側、南側など）を除いて遺構のプランを確認し、遺構を認められない部分も縄文時代早期の包含層をほぼ全域にわたり検出した。

遺跡の標準土層は、I層＝表土（耕作土）、II層＝黒色腐蝕土（ローム漸移土までa～cの3層に分けられる）、III層＝ソフトローム、IV層＝ハードロームであり、II層は地区によって厚さは異なるが約10～30cm残存して

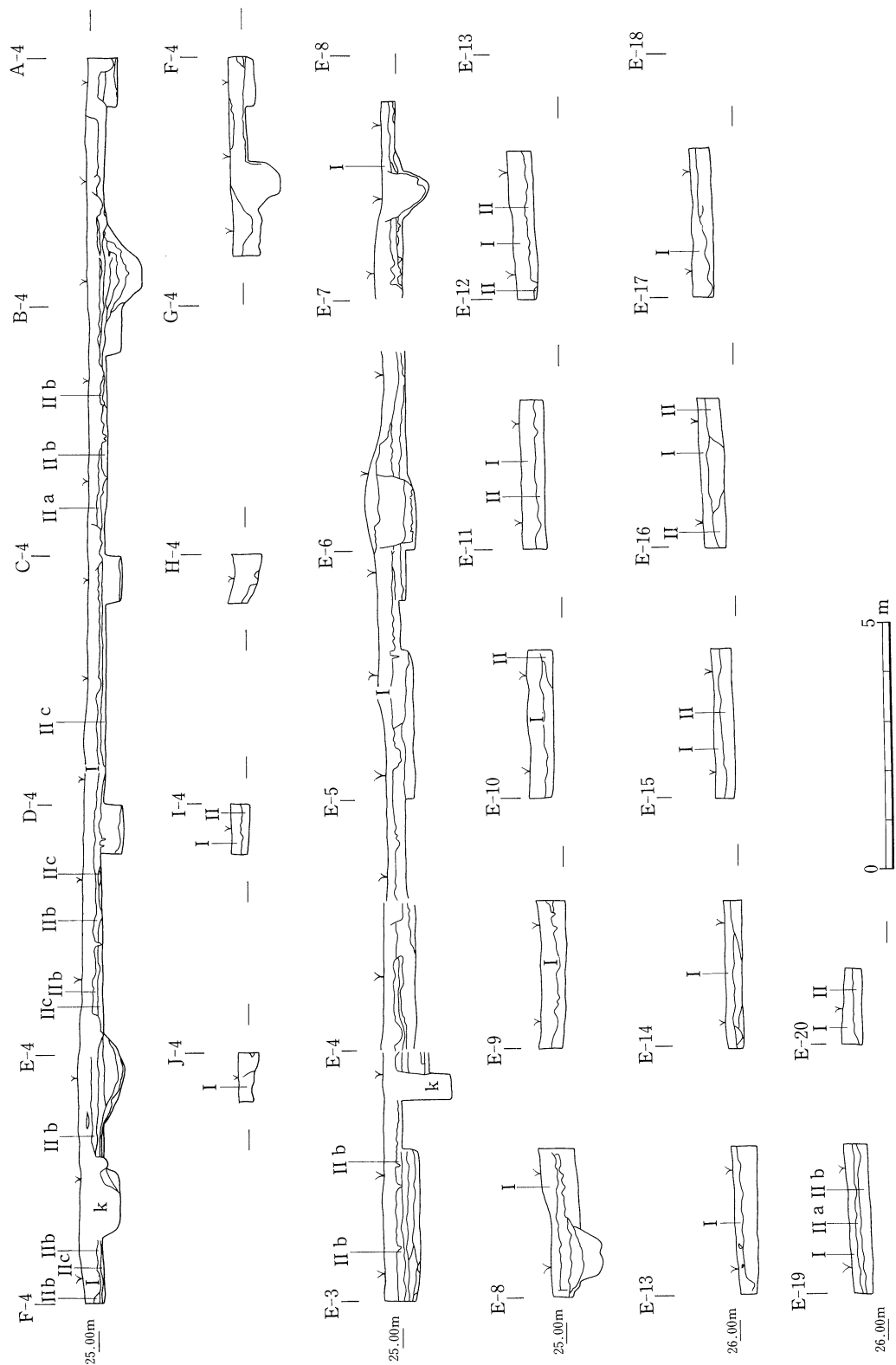
※縄文時代早期末葉の包含層は、ほぼ全域に10cm～20cmの厚さで認められる。



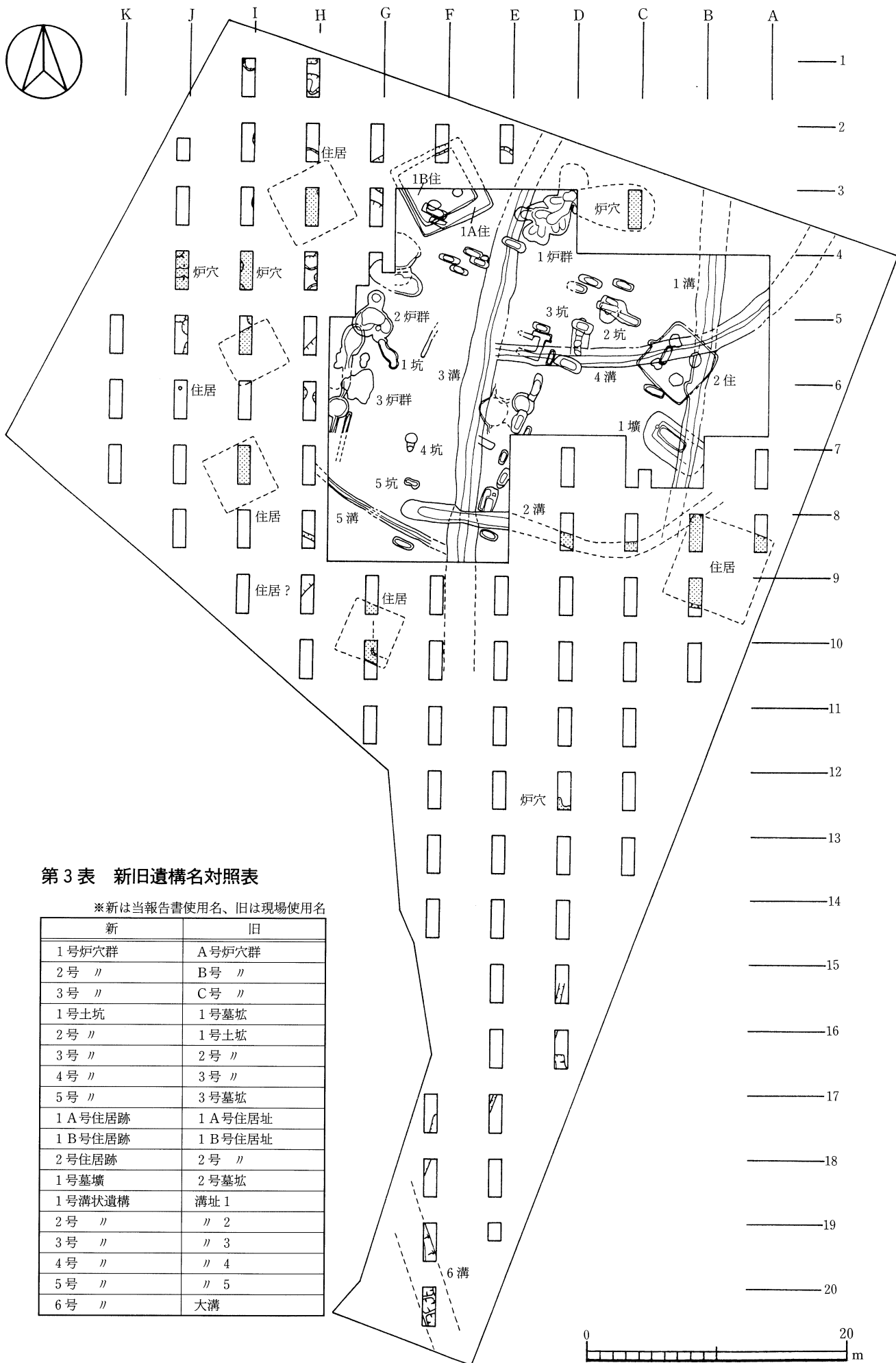
第3図 トレンチ設定図 ※スクリーンは遺構プラン

いる。縄文時代早期の炉穴はローム漸移土付近（II c層付近）から、古墳時代後期の竪穴住居跡はII a層付近からの掘り込みである。なお、今回の調査はすべて重機を使わず、人力で行った。

本調査は、対象地区の北側で672㎡を実施した。記録類は、確認調査・本調査とも実測図がグリッドポイントを基準に1/100～1/10縮尺、地形図は昭和55年作製の市原市地形図1/2,500 c-7他を使用した。写真は35ミリとブローニー（6×7）版の白黒とカラープリントフィルムを採用した。



第4図 主なトレンチ土層セクション図

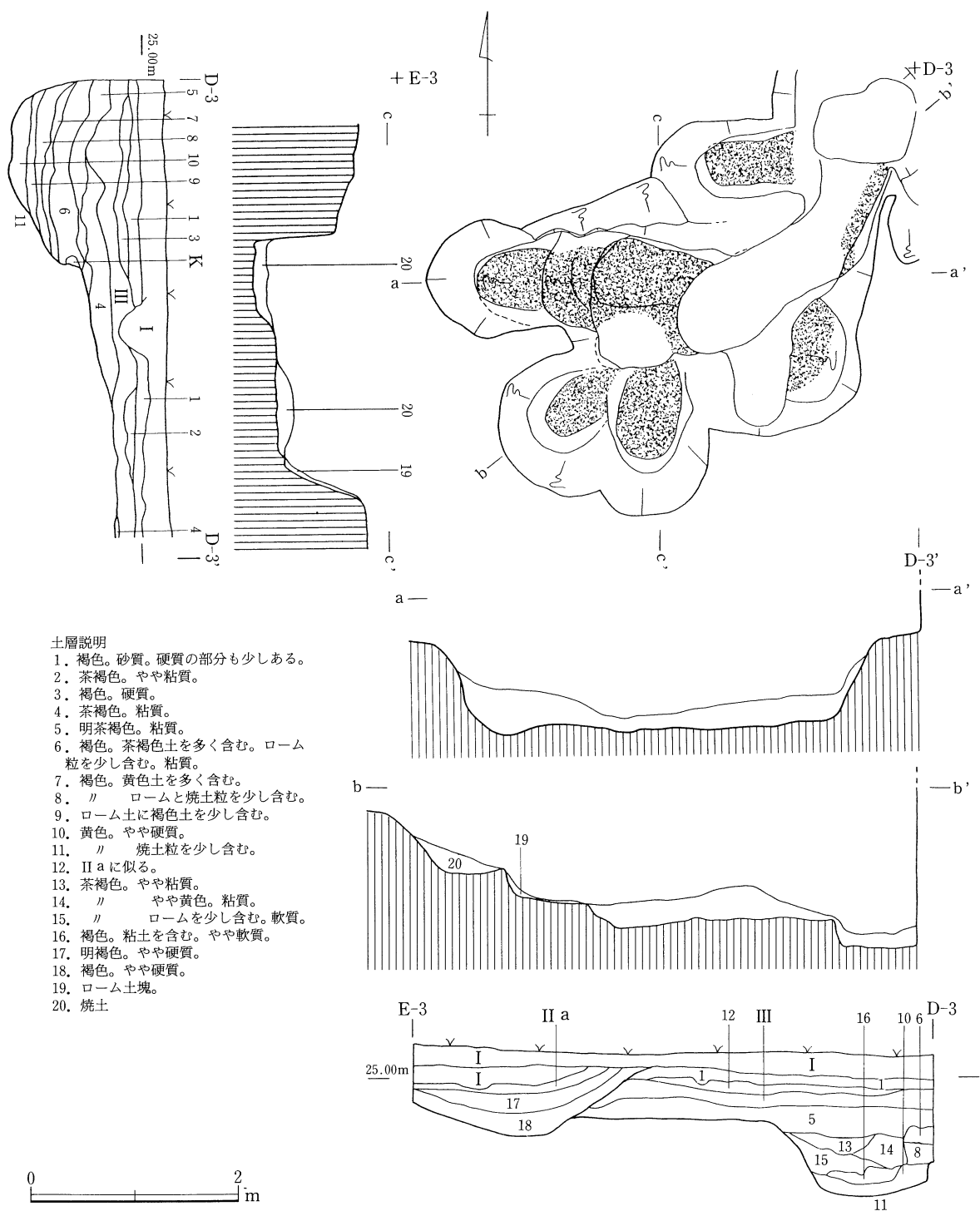


第3表 新旧遺構名対照表

※新は当報告書使用名、旧は現場使用名

新	旧
1号炉穴群	A号炉穴群
2号 //	B号 //
3号 //	C号 //
1号土坑	1号墓坑
2号 //	1号土坑
3号 //	2号 //
4号 //	3号 //
5号 //	3号墓坑
1 A号住居跡	1 A号住居址
1 B号住居跡	1 B号住居址
2号住居跡	2号 //
1号墓墳	2号墓坑
1号溝状遺構	溝址1
2号 //	// 2
3号 //	// 3
4号 //	// 4
5号 //	// 5
6号 //	大溝

第5図 調査全体図

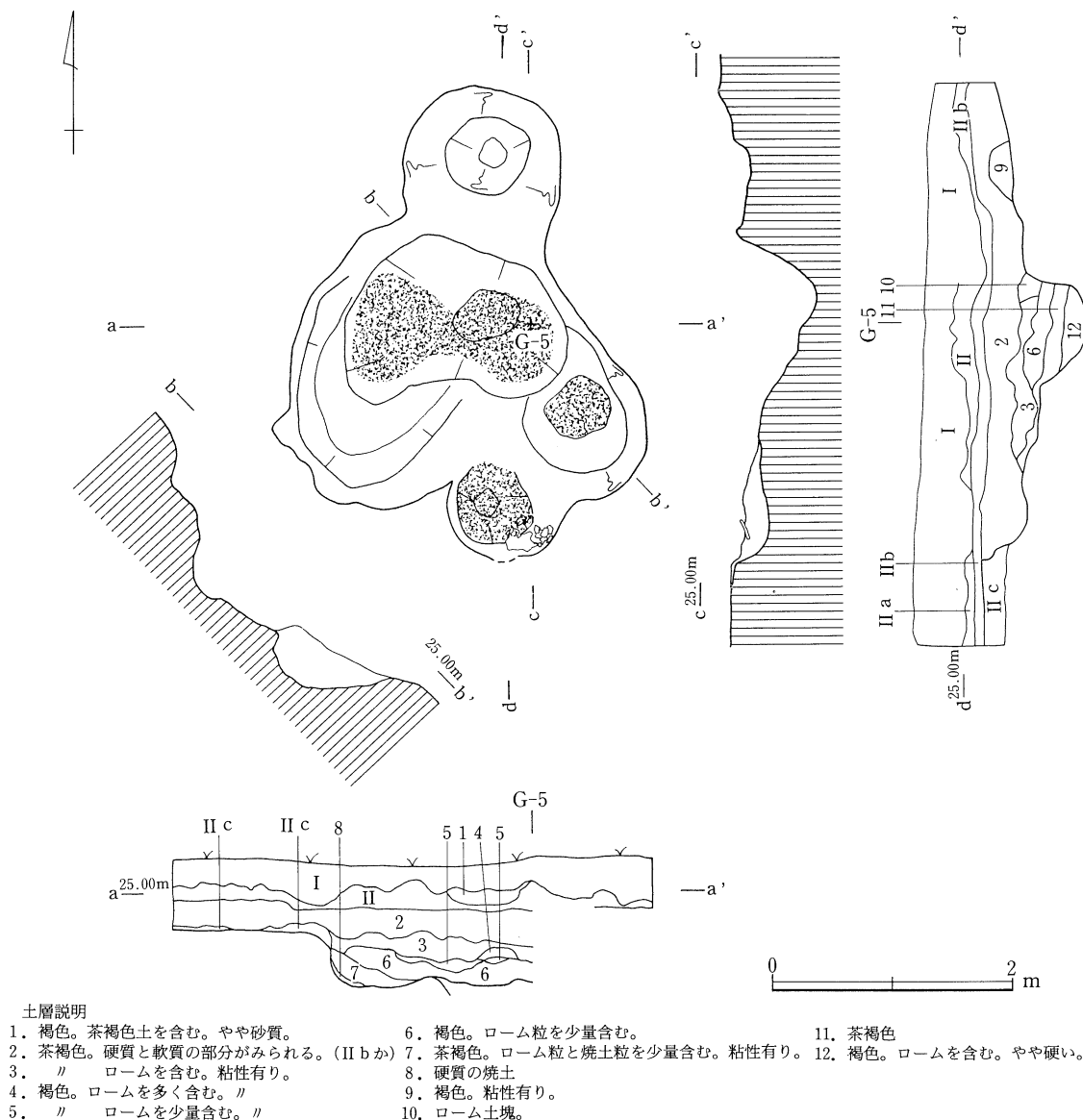


4. 検出した遺構と遺物

遺構名については、本書と現地調査時点で若干名称を変えている(第3表)。本書ではその遺構の種類別に解説する。

(1) 1号炉穴群(第6図)

本調査地区の北側中央端部に位置し、全掘は出来ていない(未調査地区の北側と東側に続いている)。



第7図 2号炉穴群実測図

10基以上の炉穴と土坑が重複しアメーバ状の形態を呈する。焼土は8ヶ所認められ少なくとも炉穴は8基存在し、その後土坑によって一部が切られている。全体の大きさは、長軸4.60m以上、短軸3.30mを測る。深さは最深部で90cmである。土坑は2基以上で最深部は1.15mまで下がっている。炉穴の覆土は自然堆積で、褐色土と茶褐色土を主体として下部には焼土粒を含んでいる。土坑の時期は不確定であるが覆土の観察から北東隅の土坑以外は比較的炉穴に近い時期と考えている。出土遺物は、第8図1～7ですべて胎土に繊維を含み貝殻条痕文系の早期末葉の土器片で、1は沈線と円形刺突文の組み合わせ、3は集合沈線が施されて鵜ヶ島台式、2は沈線と角棒状工具の組み合わせで野島式か、4～7は茅山上層式頃と考えられる。

(2) 2号炉穴群 (第7図)

本調査地区の西側中央付近に存在し、1号炉穴群より南西に約12m離れている。焼土は4ヶ所認められ、少なくとも4基以上が重複する。大きさは、長軸約4.00m、短軸約3.00m、深さは最大で80cm

を測る。覆土は、褐色土と茶褐色土を主体として下層には焼土粒を多く含む。掘り込み面は、Ⅱc層上面である。出土遺物は、第8図8～14と第9図1～3で、第8図8と11は、胴上部にわずかな稜をもつ深鉢片で文様は区画線が沈線で文様充填部は集合沈線と円形刺突文の組み合わせである。鶺鴒ヶ島台式である。12は口縁部片で2段の終条体圧痕文がなされ、早期後半と考えられる。9、10、13、14、第9図1～3は、口縁部片で口唇部に刻目が施される例の多く、茅山上層式とみられる。

(3) 3号炉穴群 (第10図)

本調査地区の西側端部で2号炉穴群より南に約2.5m離れている。焼土が4ヶ所認められ4基以上の重複とみられる。大きさは、長軸2.70m、短軸2.40m、深さ30cmを測る。覆土は自然堆積で暗褐色土と明褐色土を主体とし下部に焼土粒を多く含む。出土遺物は第9図7で茅山上層式の深鉢口縁部片。

(4) 1号土坑 (第10図)

2号炉穴群の南東側に重複して存在する。平面形体は不整長円形を呈し、大きさは、長径3.10m、短径は0.85m、深さ60cmを測る。長径方向はN-28°-Wを示す。覆土は自然堆積で焼土粒を含む褐色土と茶褐色土が主体である。出土遺物は北側と南側に集中する。第9図8、9は早期末の貝殻条痕文系で9は胴中央部付近に稜が認められ、胴上部から口縁部は沈線で区画し充填部は集合沈線が施される。野島式か。第9図4は口縁部片で上部に連続瓜形文(三角文)を2段と胴上部にも認められる。また、その間に細い半截竹管状工具による弧状を主体とした平行沈線が施される。第9図5と6も口縁部片で貝殻復縁の圧痕文を横位に配置している。これらは前期後半で4は興津式、他は浮島式とみている。1号土坑は当初炉穴群と考えていたが、覆土中以外焼土が存在しない点、前期後半の土器片の出土などから性格不明の土坑として扱っている。

(5) 2号土坑 (第10図)

本調査地区の北東側中央付近に位置し、イモ穴によって切られ部分的な検出である。平面形体は長円形と考えられ、大きさは推定短軸が1.40m、深さは50cmである。主軸方向はほぼ真北で、覆土は自然堆積と考えている。出土遺物は無い。

(6) 3号土坑 (第10図)

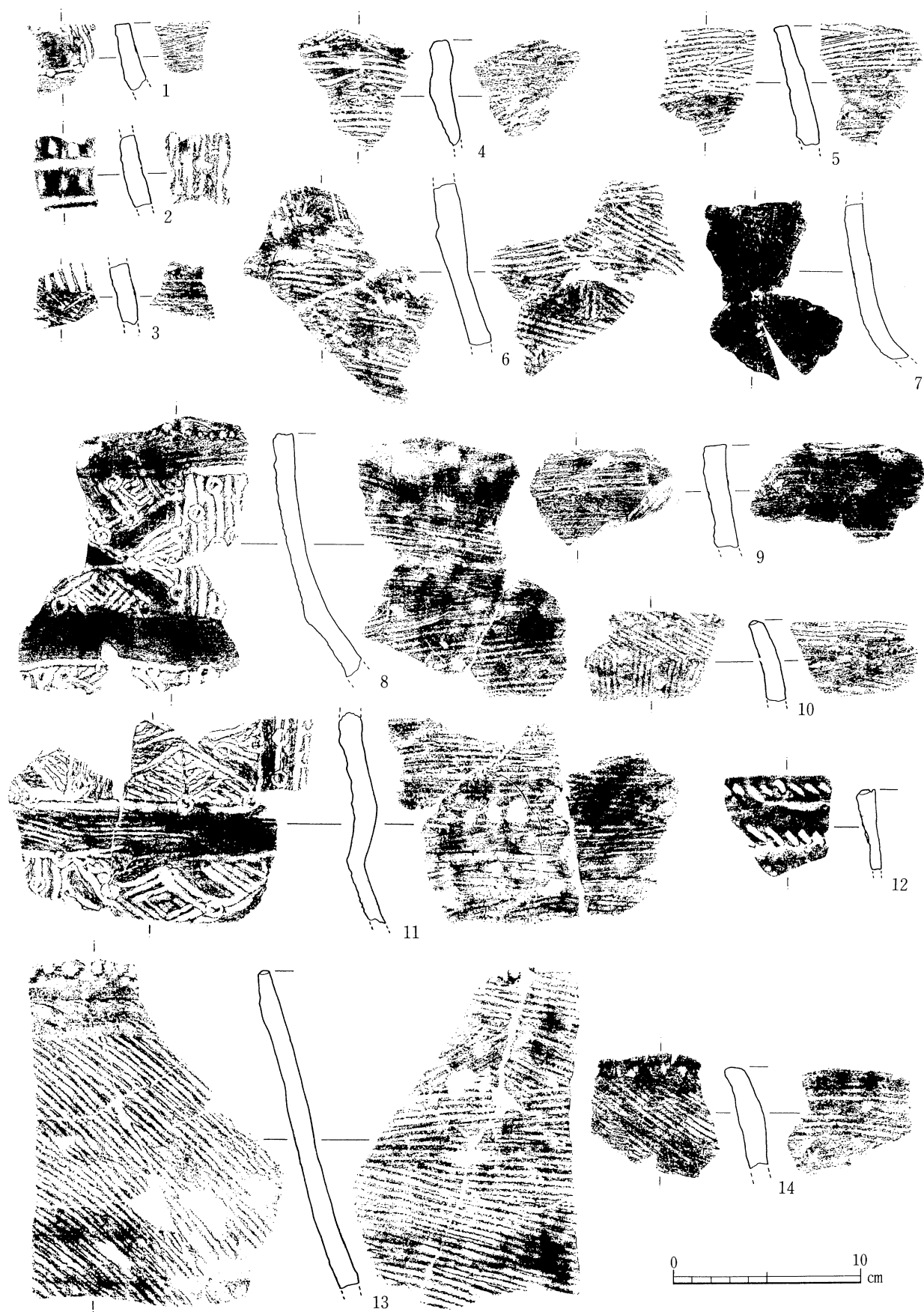
本調査地区の中央やや東側で2号土坑より南西に約1m離れている。また、北側はイモ穴、南側は4号溝によって切られている。平面形体は不整長方形とみられ、大きさは長軸2.80m、短軸1.60m、深さ23mを測る。主軸方向は、N-8°-Eを示す。覆土は自然堆積と考えている。底部に4本の方形ピットをもち、短い柵列状の遺構とも扱えられる。4号溝に直行しており溝と同時期の可能性もある。ピットの深さは土坑底部からでは8～10cm前後である。出土遺物は無い。

(7) 4号土坑 (第10図)

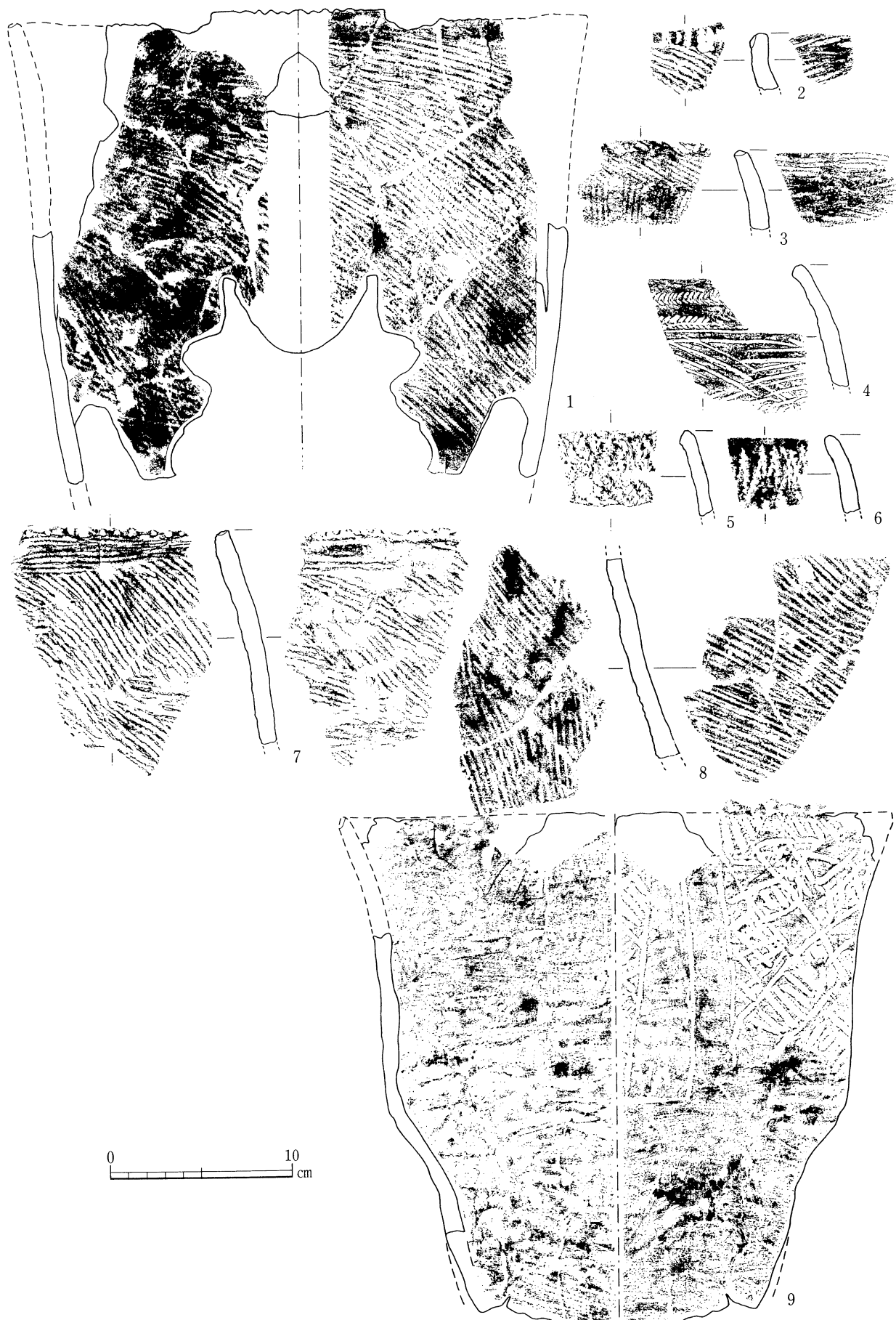
本調査地区の南西側に位置し、3号炉穴群より南東へ約5m離れている。平面形体は不整長円形で大小2本のピットが重なった様な形体である。大きさは長軸1.37m、短軸0.92m、深さ30cmを測る。主軸方向は、ほぼ真北で出土遺物は無い。

(8) 5号土坑 (第10図)

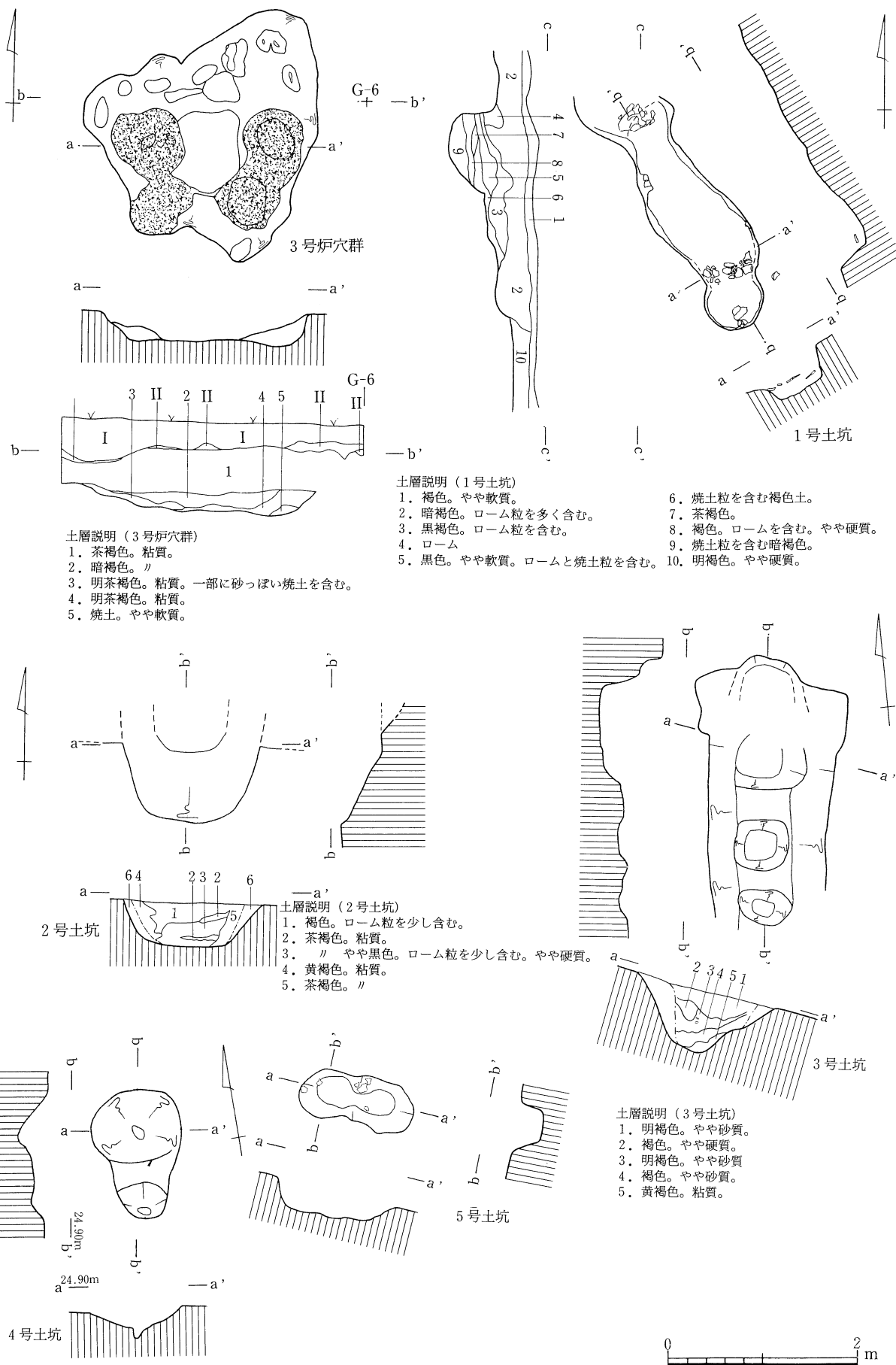
4号土坑より南に約2.5m離れて所在する。平面形体は不整長円形で底部は瓢箪形にちかい。大きさは長径1.20m、短径0.57m、深さ33cmを測る。長径方向は、E-23°-Sを示す。出土遺物は第22図1で口唇部に刻目を施された条痕文系の土器片で茅山下層式と考えられる。上層に混貝土層を含む。



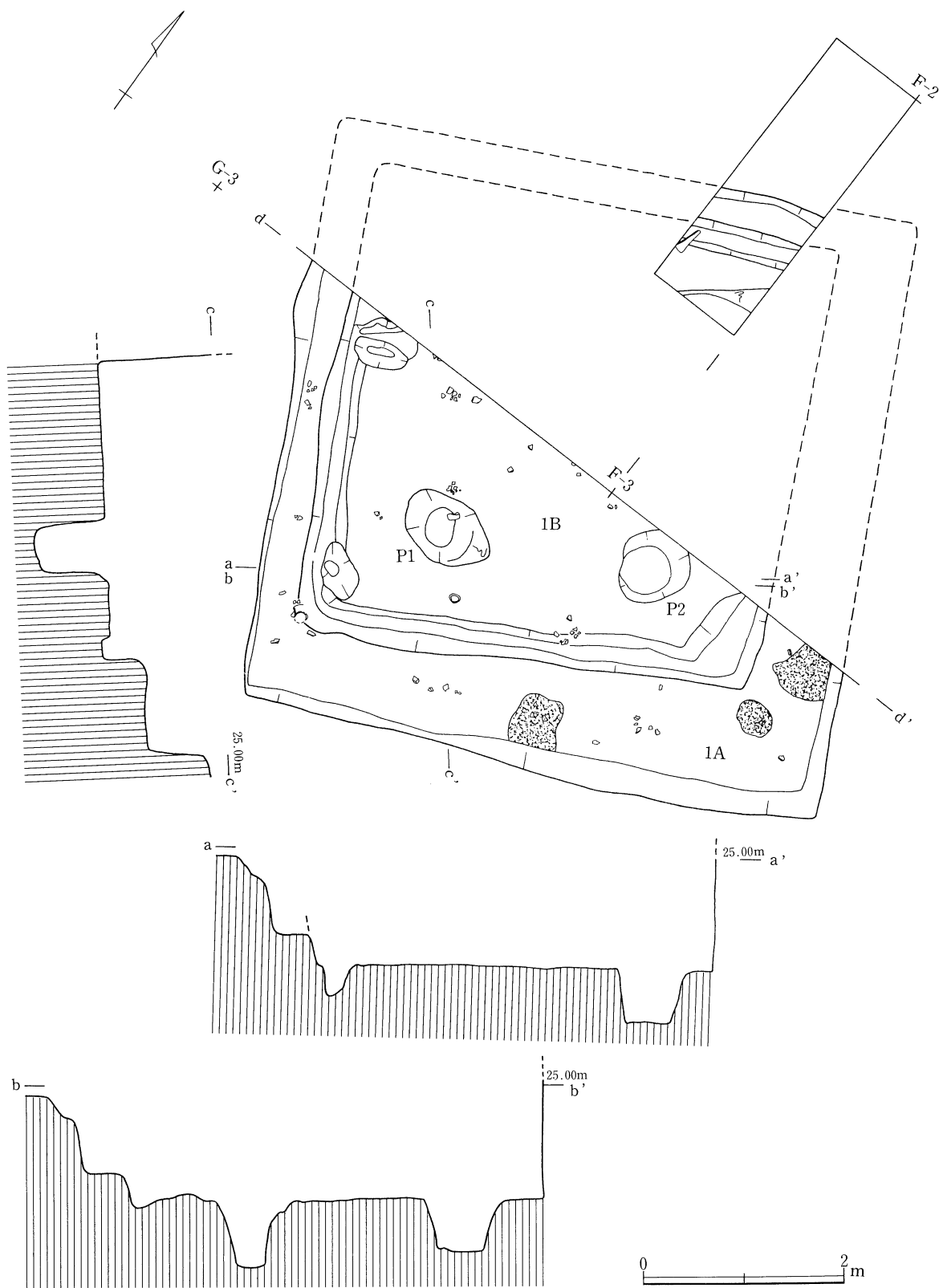
第8图 1号(1~7)、2号(8~14)炉穴群出土遗物实测图



第9図 2号(1~3)、3号(7)炉穴群、1号土坑(4~6、8、9)
出土遺物実測図



第10図 3号炉穴群、1～5号土坑実測図



第11图 1 A · B号住居跡実測図

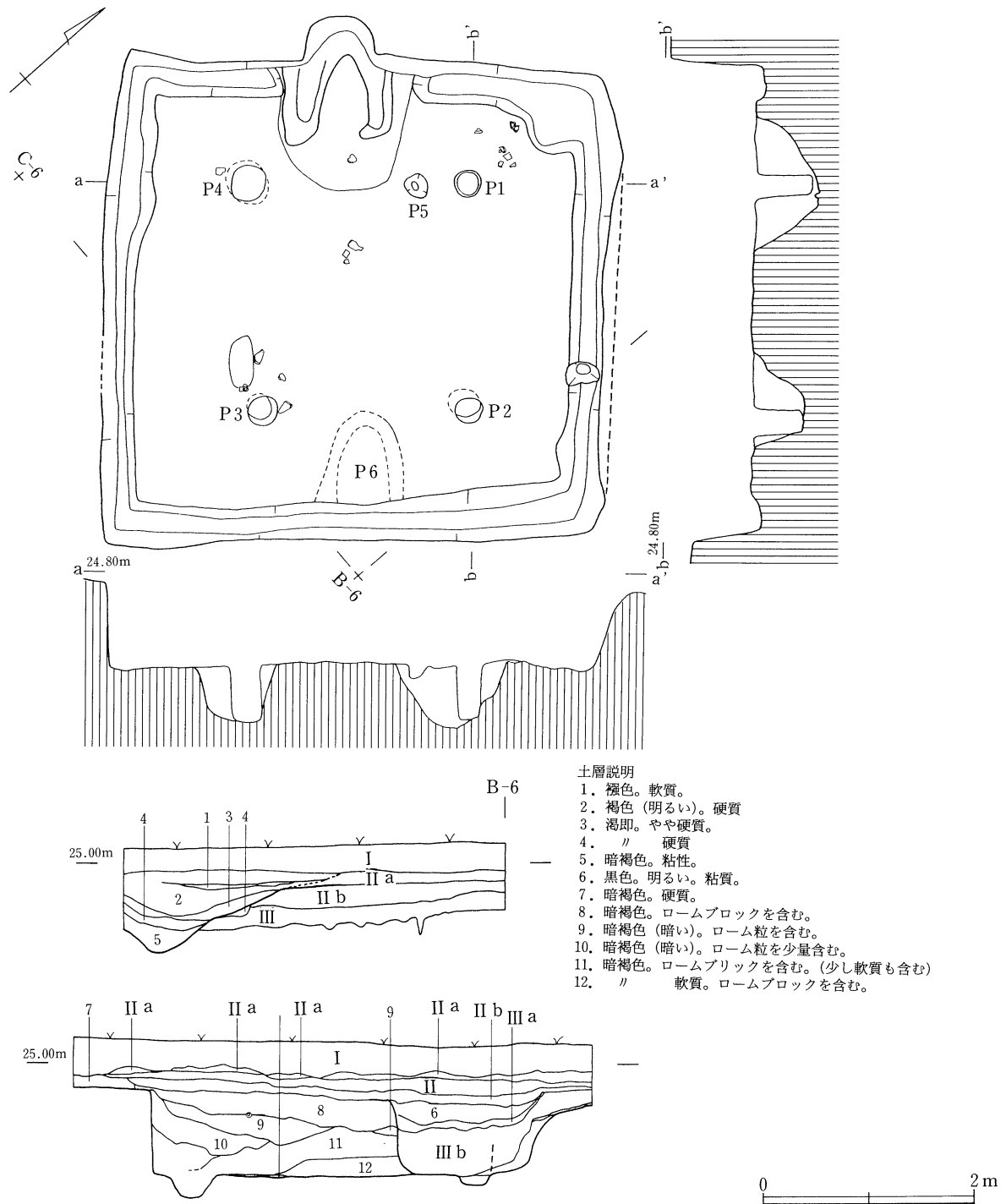
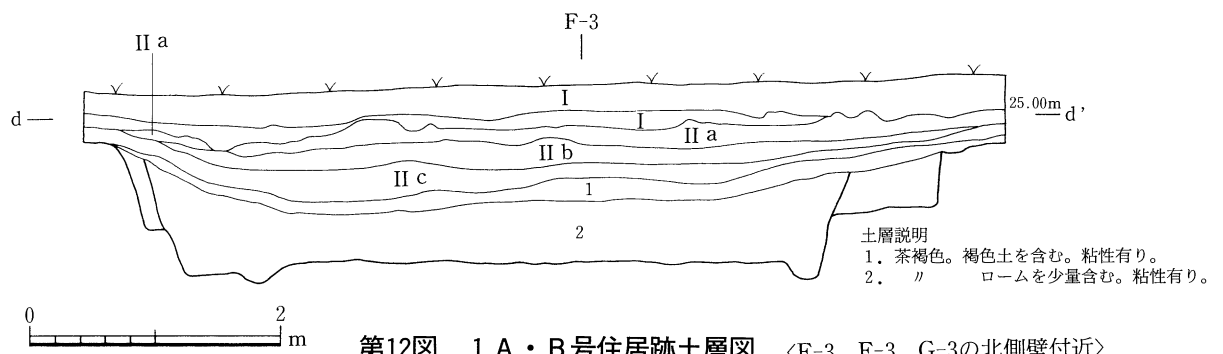
(9) 1 A・B号住居跡 (第11図)

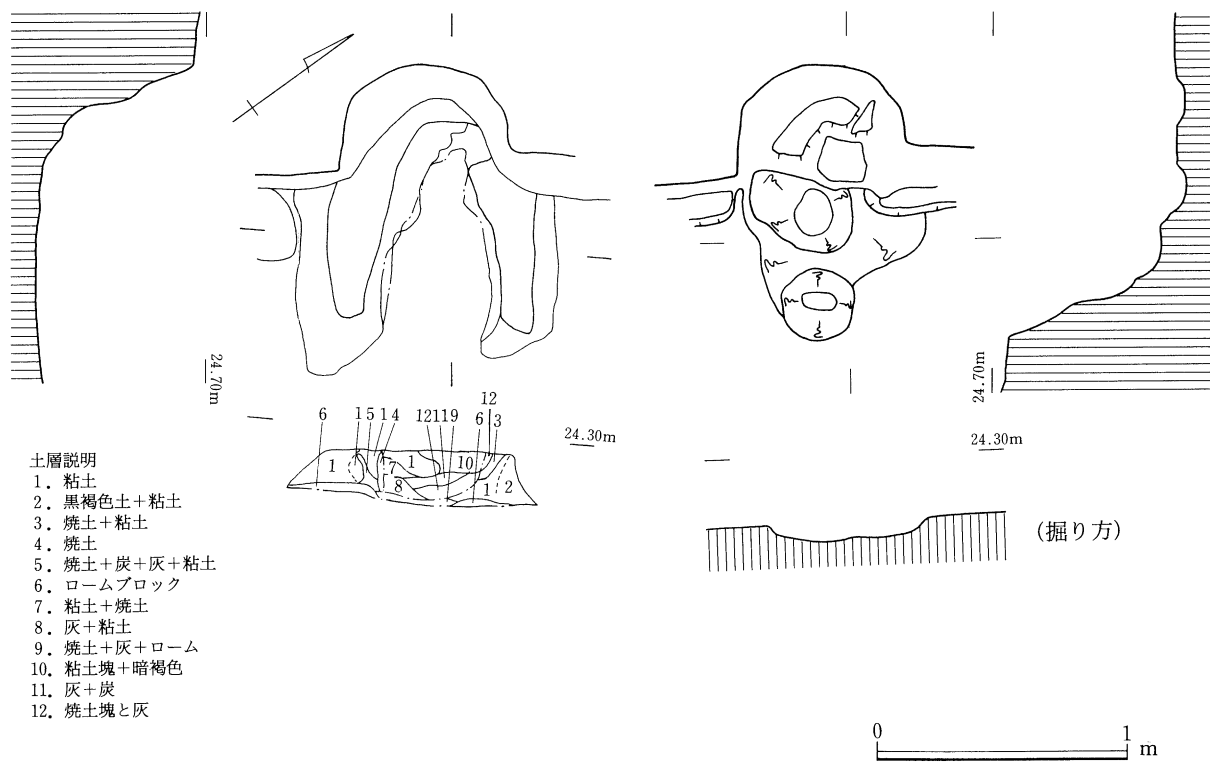
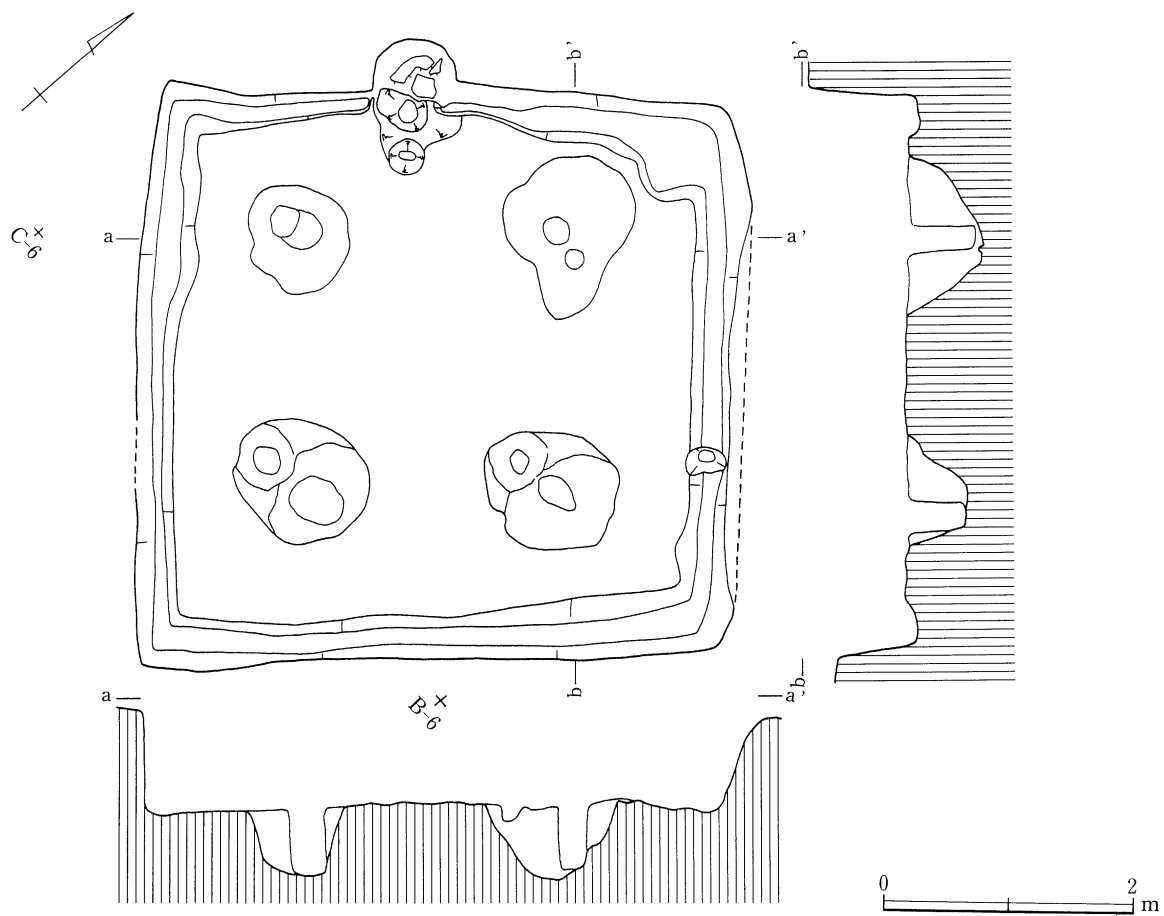
本調査地区の北西側に位置し、1/2弱の検出で北側のプランは未調査である。2号住居跡からは北西に約16m離れている。2軒の竪穴の重複で小型で新しい竪穴を1 A、大型で古い竪穴を1 Bとして説明する。平面形体は両者とも方形と推定され、大きさが1 Aは推定長軸4.67m、短軸4.63m、深さ80cmを測る。主軸方位はN-25°-Wを示す。ピットは2本検出し主柱穴とみられる。ピットの大きさはP₁が上端長径96cm、短径65cm、下端長径40cm、短径28cm、深さ73cm、P₂は上端長径95cm、下端長径短径とも49cm、深さ52cmを測る。この他に西側の壁溝付近に2ヶ所小ピットが存在するが機能は不明である。出土遺物(第16図6~11)は床面付近より手捏ね土器(小鉢)、土師器甕、高杯、土製支脚、砥石(?)が各1点(高杯は2点)検出されている。6の小鉢は、碗形で復元口径6.8cm、器高3.2cmを計る。外面に粘土紐積み上げ痕が認められる。7の甕は、やや小型で胴上部から口縁部の破片である。復元口径14.3cm、全体にやや磨耗がみられる。8と9の高杯は両者とも脚部片で比較的小型で低い作りである。外面は縦方向のヘラ削り、下端部は横ナデである。9の脚下端径は9.4cmを計る。11の土製支脚は破片で方柱形を呈する。10は砥石とみられ磨耗痕(使用痕)が数ヶ所に認められる。1 Bは大きさが推定長軸6.10m、短軸5.82m、深さは1.00mである。柱穴は検出されていないが1 Aの柱穴と共有している可能性がある。壁周辺の床面付近には焼土が流れ込んだ形態で認められ火災住居の可能性がある。床面のレベルは1 Aより20~30cm程低い。出土遺物(第16図1~5)、須恵器杯身、土師器甕、鉢、甑、土製支脚が各1点ずつ覆土下部と床面付近より検出されている。1の須恵器杯身は蓋受部が稜をもち、口縁部がわずかに内傾して立ち上がる小型の形体で、外面下位にはヘラ削りが認められる。法量は復元で口径10.7cm、体部最大径12.8cm、器高4.5cmを計る。2の土師器甕は胴上部から口縁部付近の破片で胴部の張りは少なく口縁部の外反も少ない小型の鉢に似た形体である。復元口径21.5cmを計る。外面胴部は縦方向のヘラ削り、内面はヘラナデが認められ、口縁部は内外面とも横ナデである。3つの鉢は口縁部の小片で碗状を呈する。外面は横方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラナデ(ミガキ?)が認められる。復元口径は20cmを計る。4の甑も口縁部付近の破片で水平に近く外反し、胴部は鉢形を呈する。外面胴部は縦方向のヘラ削り、内面は丁寧な横方向のヘラナデとみられる。口縁部は両面とも横ナデ、復元口径は24.0cmである。5の土製支脚は、完形で方柱形で頂部は一辺2cmほどで狭い作りである。下端の一辺は6.5cm、高さは18.2cmを計る。

両方の住居跡ともカマドが北側壁に存在するとみられるが未調査地区のため検出していない。

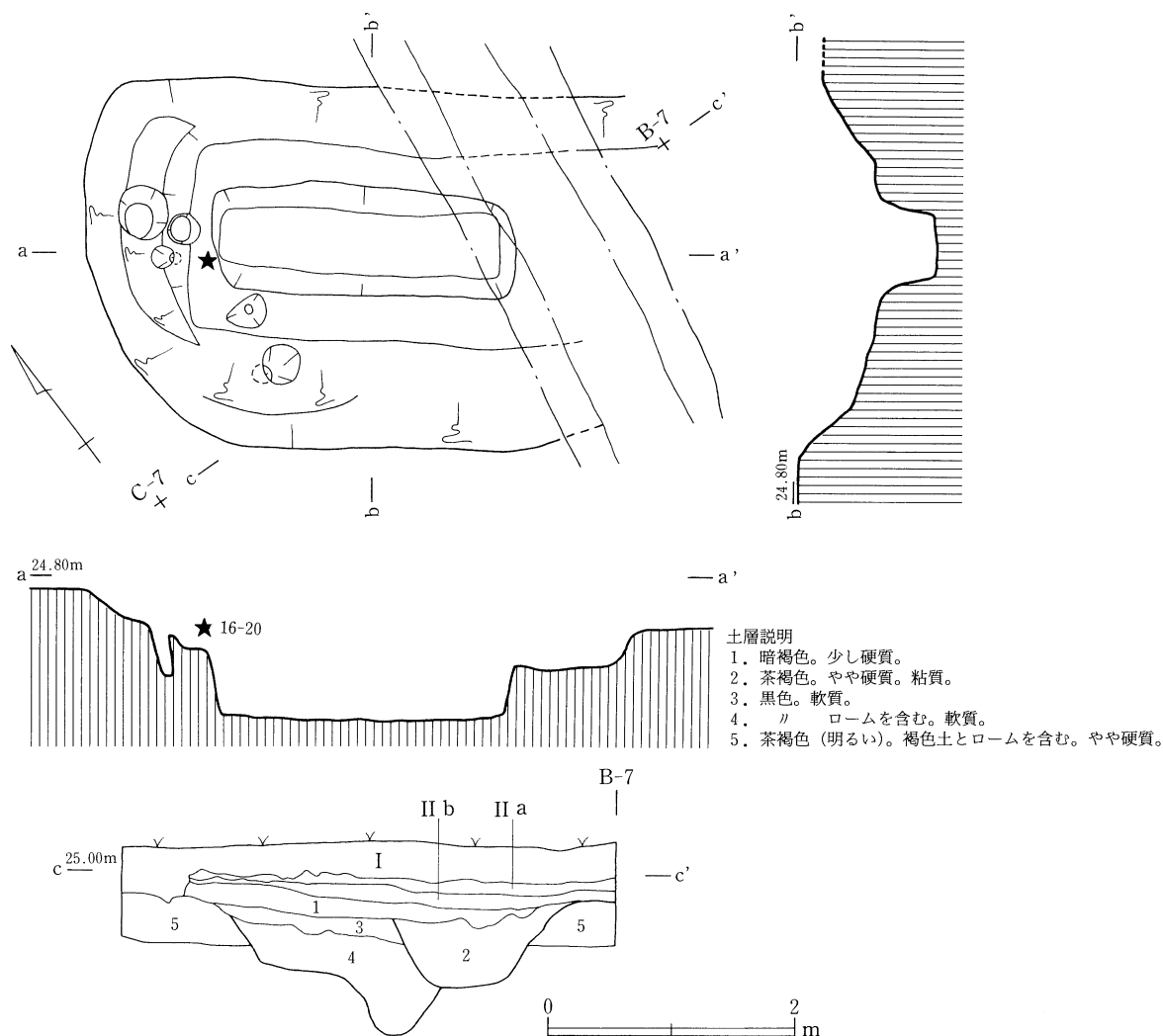
(10) 2号住居跡 (第14図)

本調査地区の東側中央に位置し、1号溝と4号溝に切られている。平面形体は方形で大きさは長軸4.80m、短軸4.60m、深さ87cmを計る。主軸方向はN-47°-Wを示す。竪穴の覆土はロームブロックを含む暗褐色土を主体とし自然堆積である。主柱穴は4本で底部中心点間でP₁~P₂が2.13m、P₂~P₃が1.92m、P₃~P₄が2.15m、P₄~P₁が2.02mを測る。各ピットの大きさは、P₁が上端長径25cm、短径24cm、下端長径21cm、短径18cm、深さ54cm、P₂上端長径30cm、短径27cm、下端長径26cm、短径24cm、深さ46cm、P₃上端長径30cm、短径27cm、下端長径25cm、短径24cm、深さ45cm、P₄上端長径43cm、短径36cm、下端長径32cm、短径30cm、深さ52cmを測る。掘り方は1m前後の大きさが認められ、下端を各々2ヶ所ずつ検出しており建て替えの可能性もある。カマドは保存状況は良好ではないが北側壁中央やや西寄りに設置される。煙道部は竪穴壁を広く逆U字形に40cmほど掘り込み、燃烧部は壁溝付近に存





第14図 2号住居跡掘り方及びカマド実測図

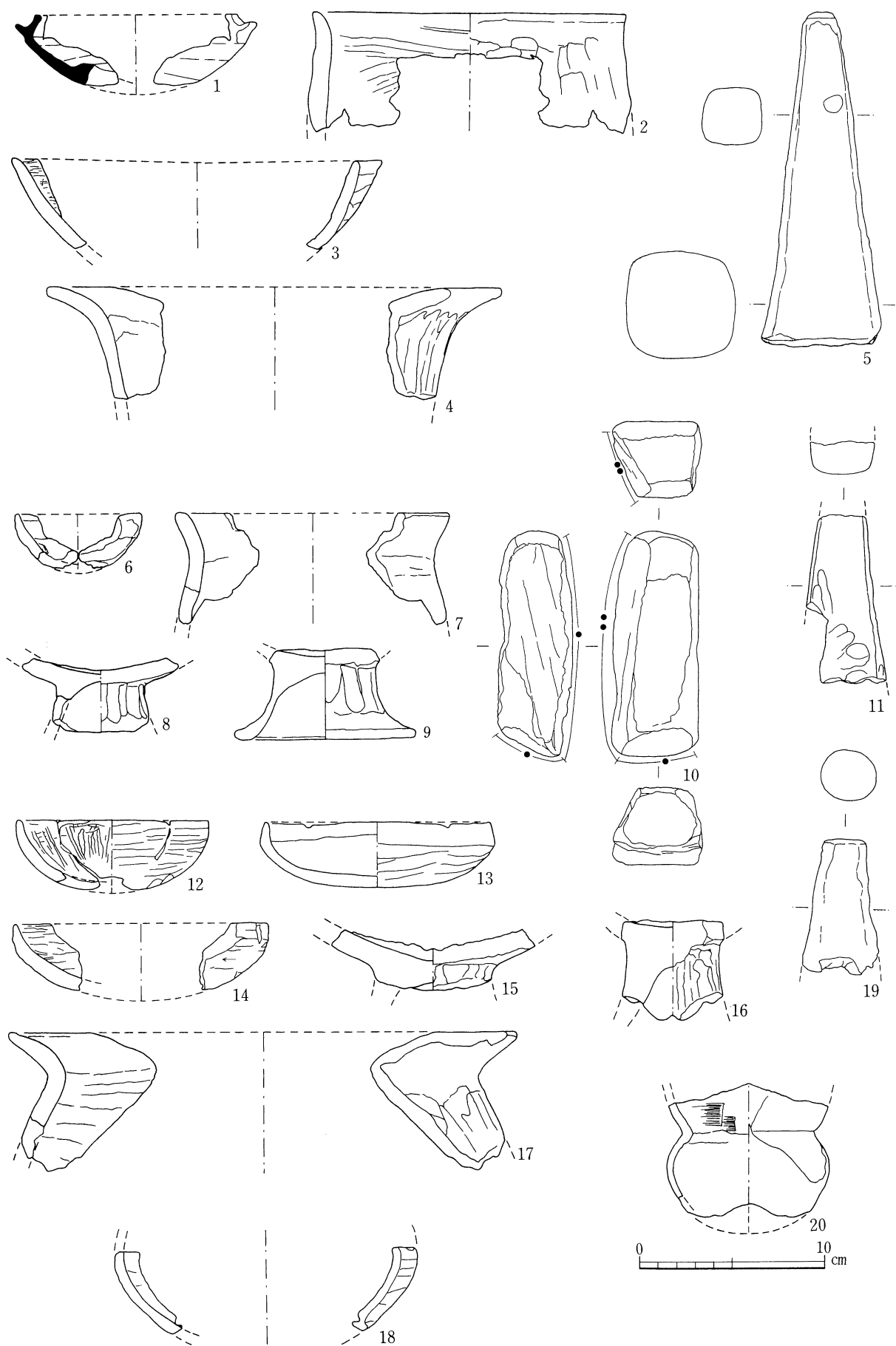


第15図 1号墓墳実測図

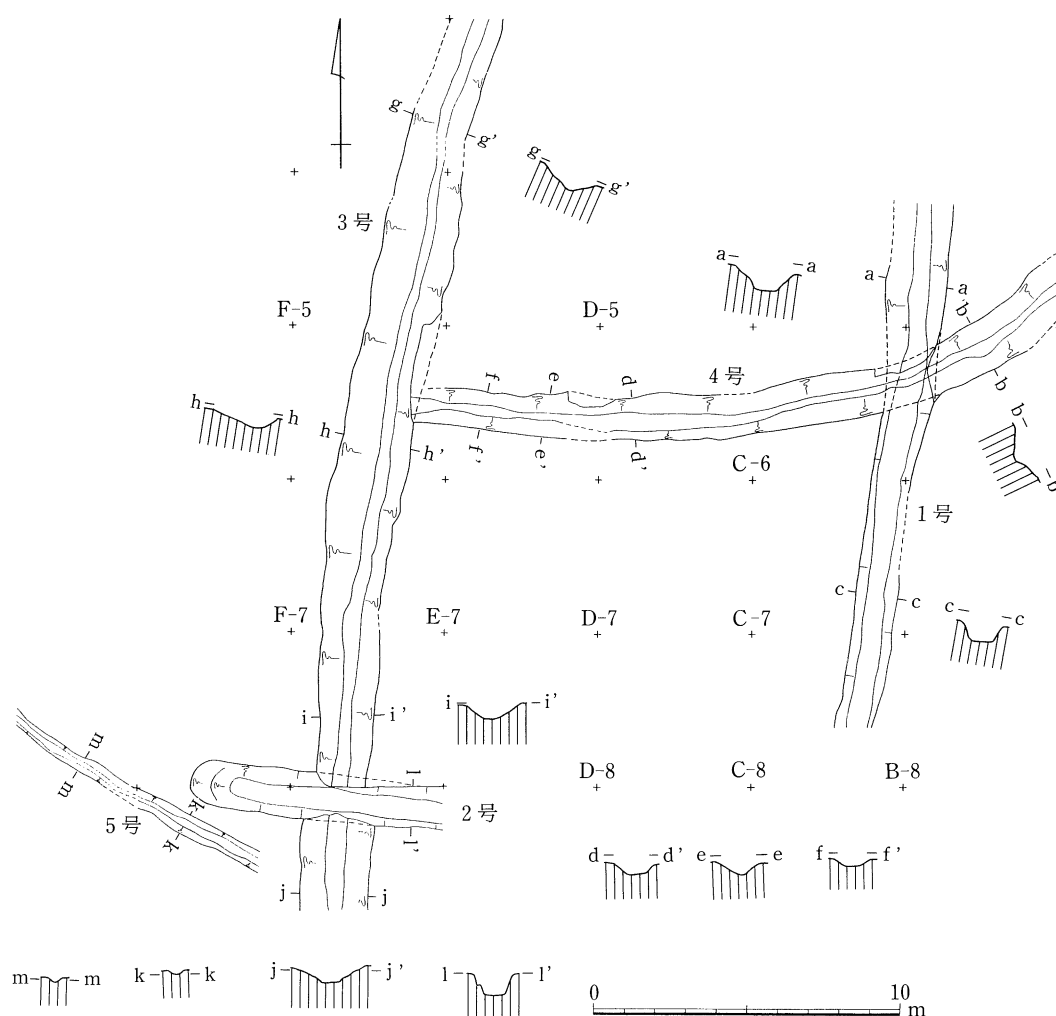
在する。焚口は燃焼部より40cmの間隔がある。袖部は長さ70cm、幅は各々35cmとみられ、内径は最大で50cmである。カマドの右側床面には小ピットのP₅があり、大きさは上端長径22cm、短径20cm、下端長径8cm、短径5cm、深さ15cmであるが機能は不明。また、カマドの反対側の床面には馬蹄形のわずかな高まりがみられ(P₆)、大きさは長さ92cm、幅80cmを測り、出入口用の階段を設置した痕跡と考えられる。出土遺物は(第16図12~19)、土師器杯3、高杯2、甕と鉢1、土製支脚1である。12の土師器杯は、浅い碗状で復元口径10.3cm、器高4.0cm、外面は横方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラナデの後縦方向のヘラ磨き。13は口縁部に稜をもち直立する形体で復元口径は11.8cm、器高3.7cm、14はやや丸みを帯び、復元口径は13.6cm、器高4.4cm、15の高杯は脚上部の小片であるが比較的大型とみられる。16の高杯も脚部片でやや器高のある形体とみられる。17の甕は口縁部片で復元口径27cmを計る。18の鉢は体下部の小片で球状の体部をもつと考えられる。復元の体部最大径は16.0cmである。19の土製支脚は円柱状で上部片のみである。上端部径は3.0cmである。

(II) 1号墓墳 (第15図)

本調査地区の南東側に位置し、一部は未掘である。2号住居跡より南に約1.8m離れている。また、1号溝に南東側を切られている。形体は隅円長方形で中に長方形の木棺痕が一段低く存在する。土墳



第16図 1 A (1～5)・B号(6～11)、2号住居跡(12～19)、1号墓墳(20) 出土遺物実測図



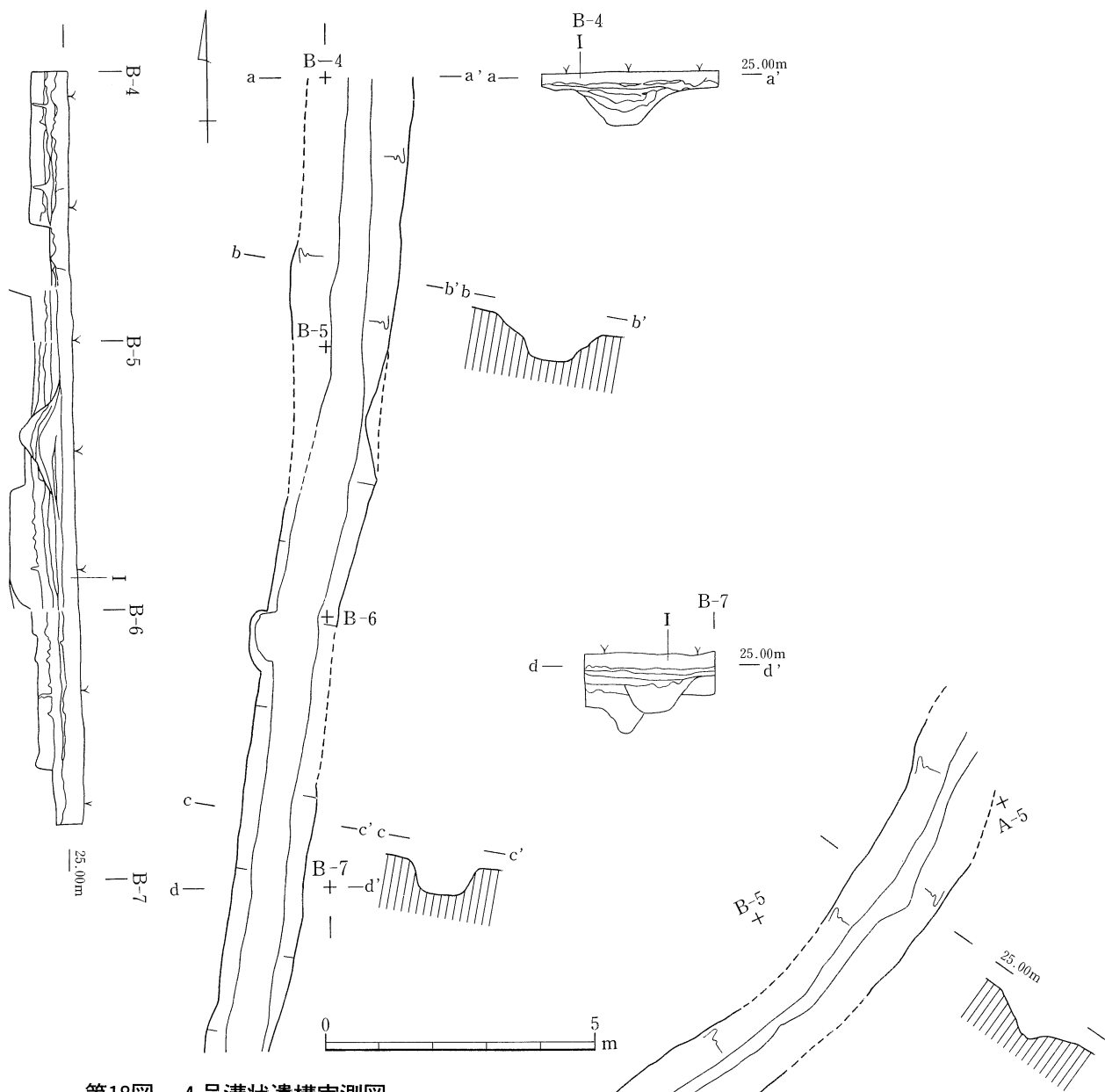
第17図 溝状遺跡配置図

の大きさは長軸推定5.00m、短軸3.00m、深さ50cm、木棺部は長軸上端2.43m、下端2.22m、短軸上端90cm、下端60cm、深さ（土壌底部より）49cmを測る。主軸方向はN-50°-Wを示す。立ち上がりは長軸部分の北西側と南東側は2段と考えられ（南東側は未掘）、北西側にはピットが認められるが機能は不明である。主体部の覆土はローム粒を含む軟質の黒色土である。出土遺物は北西側覆土上部から

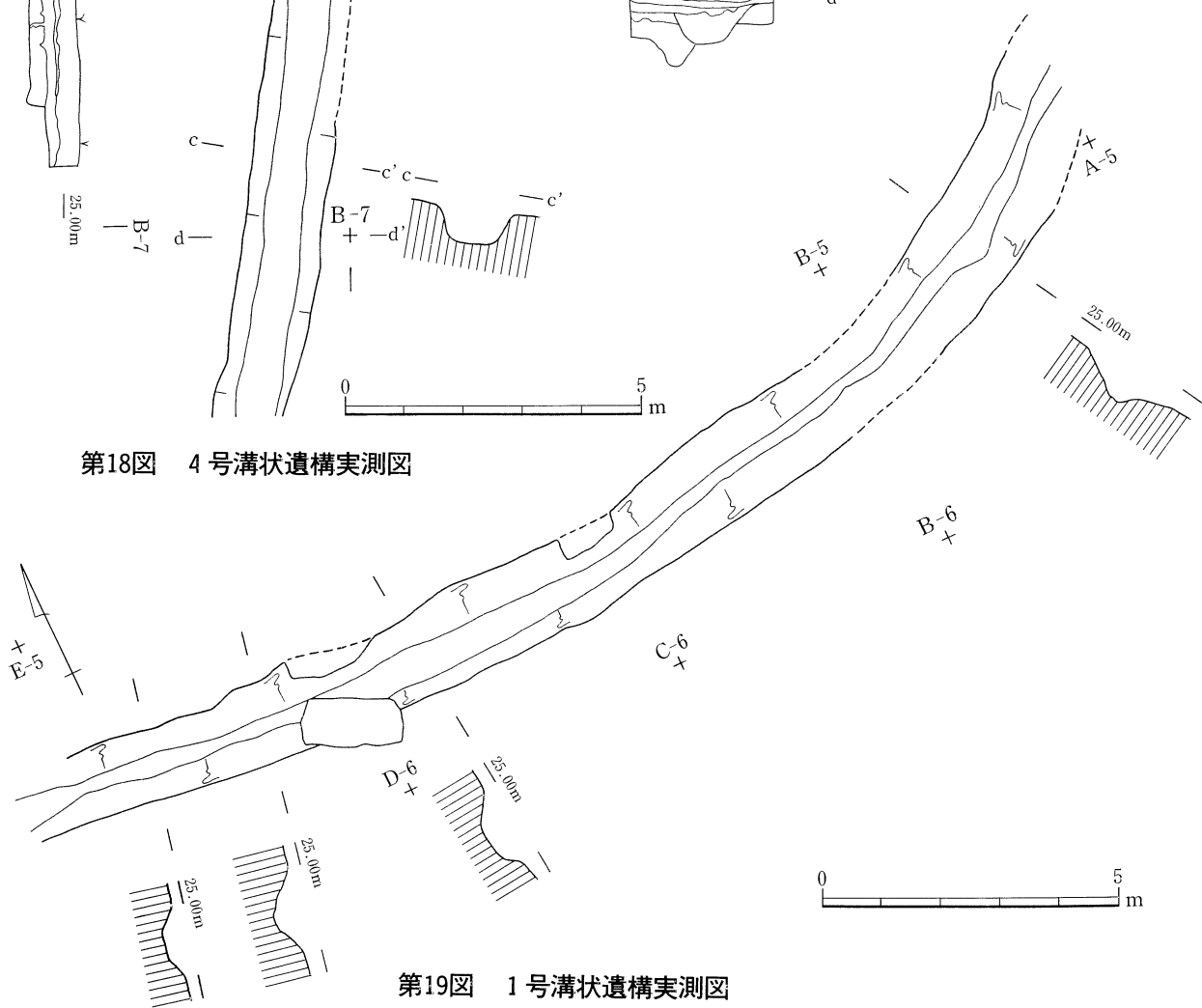
第4表 溝状遺構一覧表

単位 m、() は推定

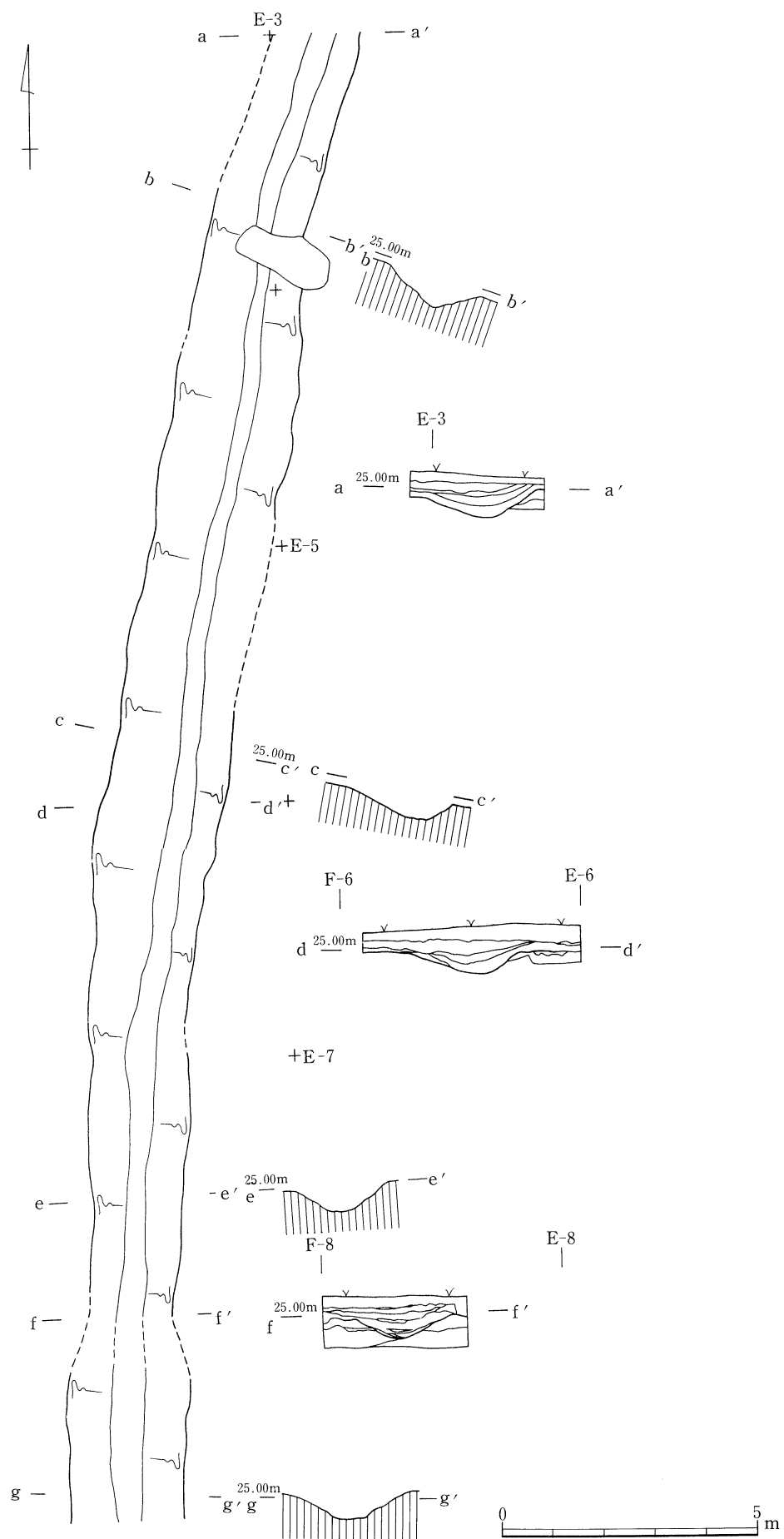
名称	幅 上端 下端	深さ(最大)	検出した長さ	備 考
1号	1.2~2.0 0.4~0.9	0.8	19	底部は比較的広い。 第19図
2号	1.3~1.6 0.6~0.8	0.8	8.5	西側は途切れる。底部は比較的広い。 第21図
3号	1.7~2.4 0.2~0.7	0.7	32	底部は比較的狭い。 第20図
4号	1.2~1.7 0.2~0.6	0.4	23	底部は比較的狭い。西側は3号と重複し途切れる。 3号土坑と同時期？ 第18図
5号	0.3~0.7 0.1~0.3	0.2	9.6	最も細く、東側は消滅する。 第21図
6号	2.0~2.5 0.8~1.0	0.8	(15)	ピット底部までの深さ1.4、長方形のピット（幅上端1.2~1.0、下端0.4~0.6前後）が 底部に約1.5mの間隔（中心点間）を置いて存在する。柵列か。 第21図



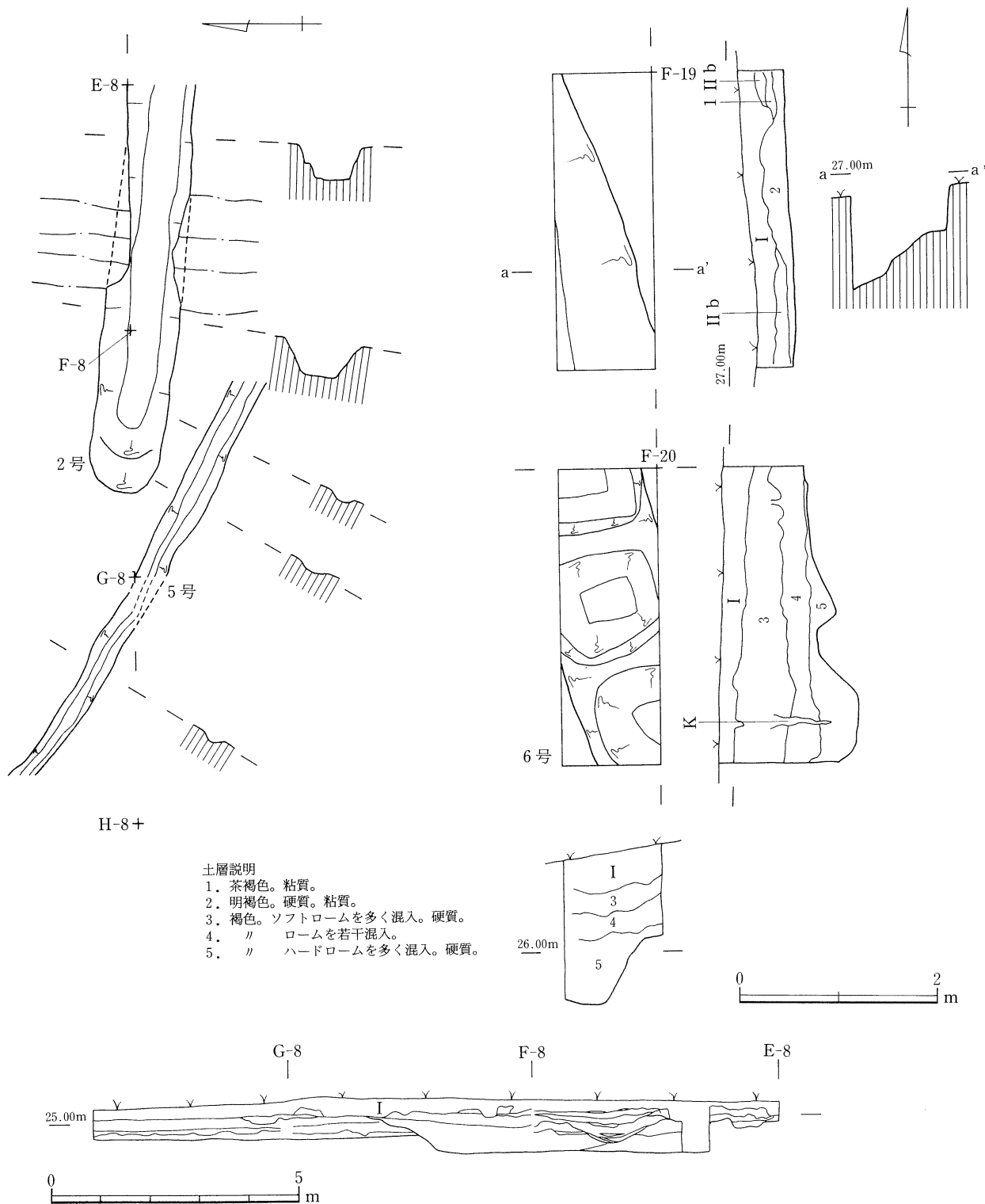
第18図 4号溝状遺構実測図



第19図 1号溝状遺構実測図



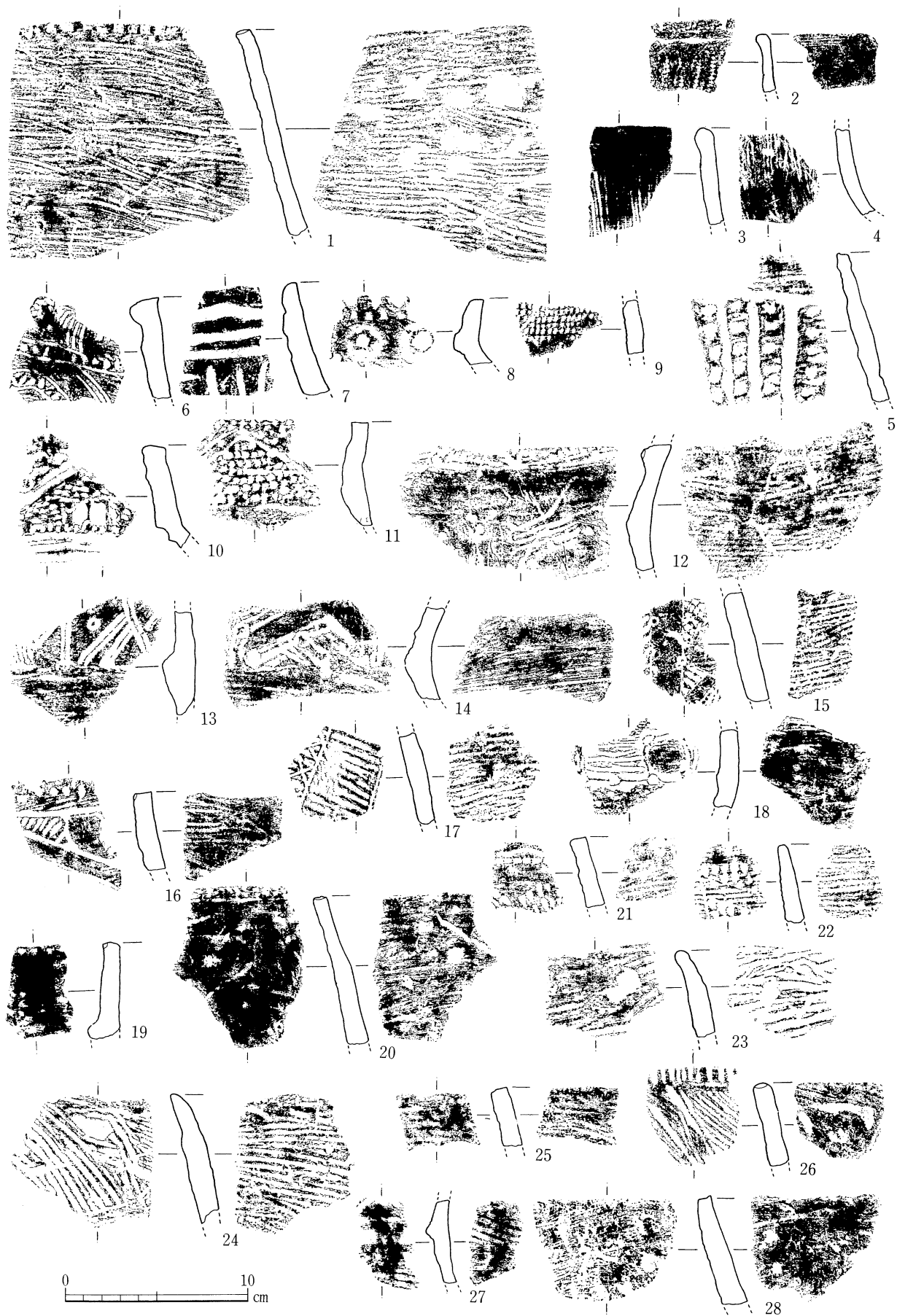
第20图 3号沟状遺構実測図



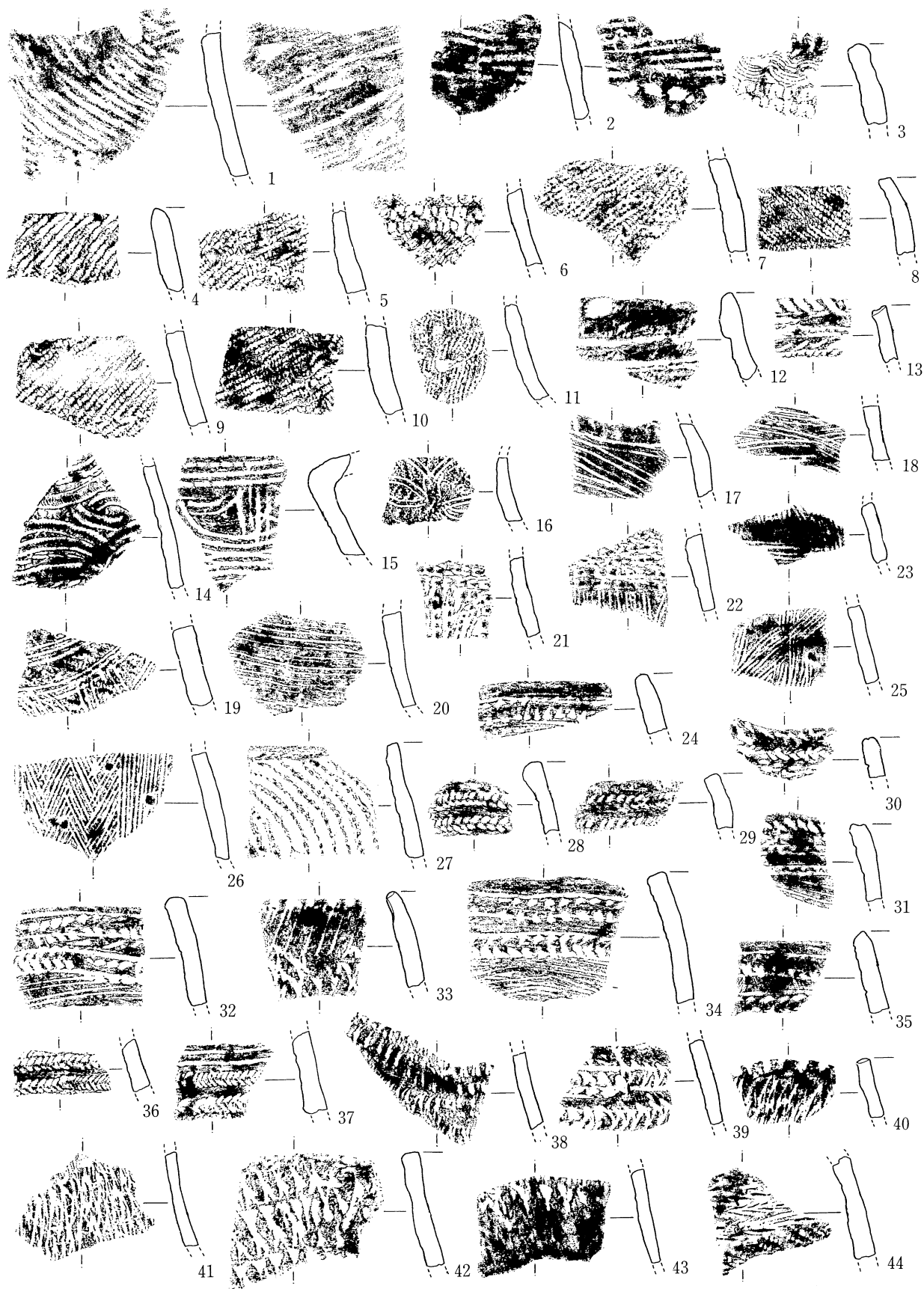
土師器埴片1点検出されている。口縁部と体部の径がほぼ同じ形体で体部最大径は復元8.7cmを計る。内面の口縁部に横方向の刷毛目が残っている。

(12) 溝状遺構 (第17図配置図、第4表)

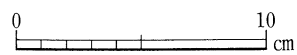
溝状遺構は6本認められる。本項では一括して説明する。1号溝は東側に位置し、南北方向に走る。4号溝に切れ、比較的底部は幅広い。2号溝は南西側に位置し、東西方向に走る。西側は途切れ、3号溝に切られている。底部は比較的幅広い。3号溝は調査地区の中央やや西寄りをほぼ南北方向に



第22図 5号土坑(1)、グリッド等出土遺物実測図



第23図 グリッド等出土遺物実測図(1)

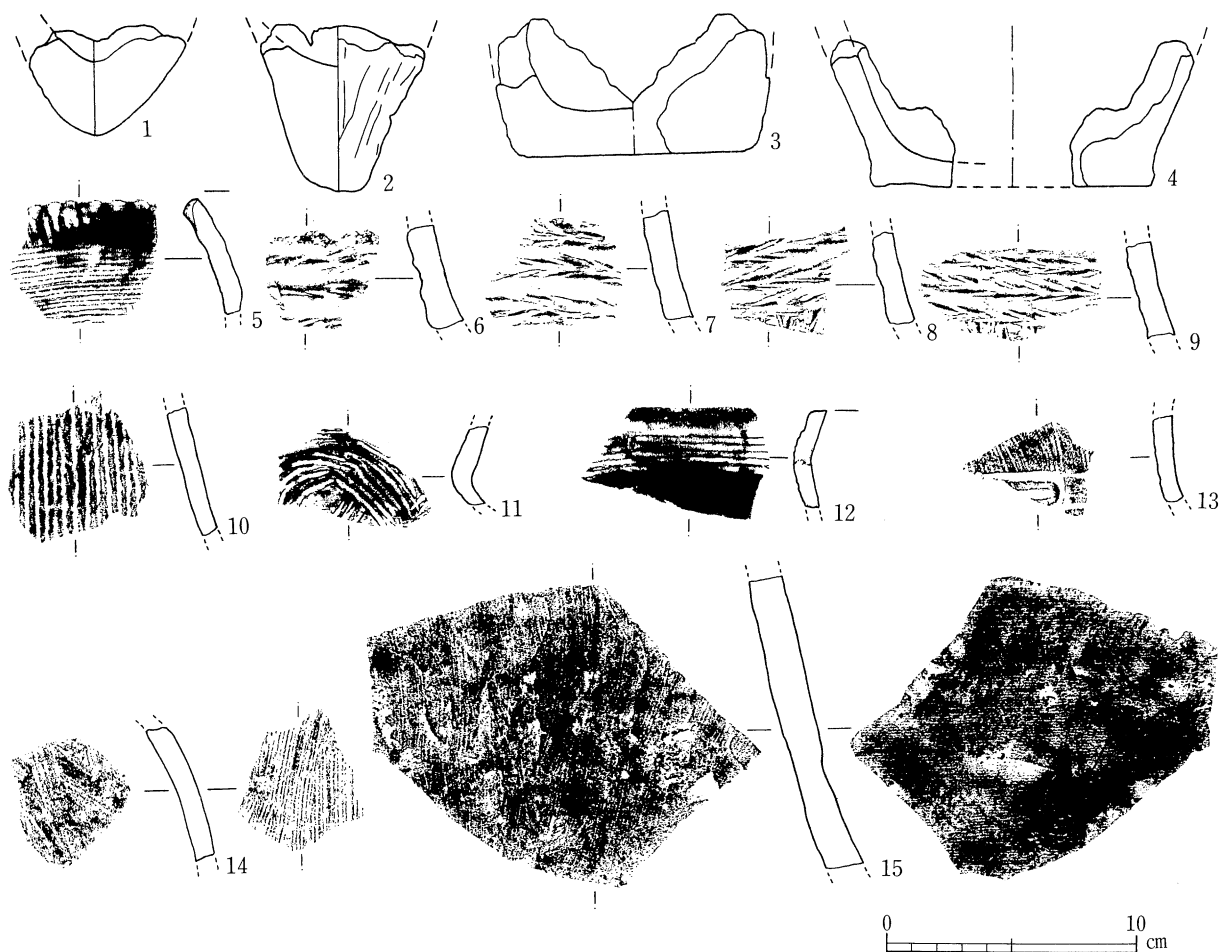


走る。中程やや北側で4号溝と重複するが切り合い関係は不明である。底部は比較的狭い。4号溝は調査地区の中央やや北側を少し弧を描いて東西に走り、西側は3号溝で途切れる。底部は比較的狭い。出土遺物はC-6ポイント付近の落ち込み上部より常滑の甕小片を1点検出した。5号溝は本調査地区の南西隅に位置し北西～南東方向に走る。細い溝で南東側は底部のレベルが高いためか消滅する。掘り込み面はⅡ層上面、底部はⅡ層内で深さは20cmと浅い。6号溝は確認調査地区の南側に位置し、トレンチのみの検出である。南北方向（やや西寄りに傾く）に走り、上端幅は2.0～2.5mで底部に長方形のピット列が存在する。

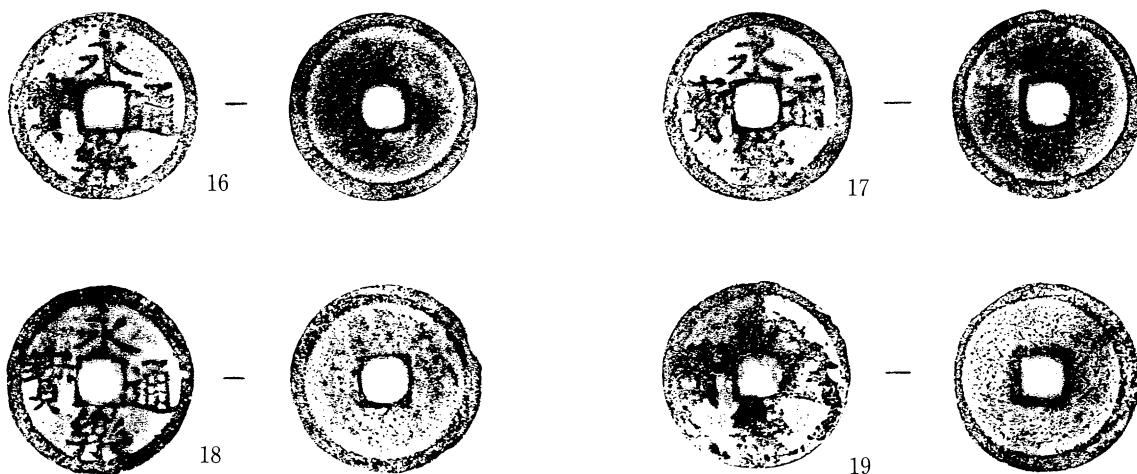
(13) その他の出土遺物（第22～25図）

本項では包含層や遺構内覆土などから出土した主な遺物を説明する。第22図2はやや微厚の口唇部と口縁上部に縄文を施し、少し薄手である。縄文時代早期前葉の井草Ⅱ式と考えられる。3と4は胴部に縦位の撚糸文を配し、稻荷台式とみられる。5～7は早期中葉の沈線文系で5は口縁部隆帯に刻目を施し、細い沈線と刺突文の組み合わせ、6はたい沈線を数条単位に縦や横方向に配する。7は口唇部に刻目、口縁部に大小の刺突文が施されている。いずれも焼成は良好で7は田戸下層、他は上層と考えられる。8は小さな角棒状の刺突文を充填し、胎土にわずかに繊維を含む。早期後半で子母口式か。9は胎土に繊維を含み、口縁部に太い沈線と方形の刺突文を配している。8と同様の時期か。10～18は繊維を含み、沈線と円形刺突文を組み合わせている。11・15は小さな方形の刺突文を充填し、17は細い格子状沈線がみられ、18は細隆起線文を主体にその周囲に円形の刺突文を配している。早期後半の鷯ヶ島台式である。19～28（第23図1、2）は口唇部に刻目をもつ例（19、20、26）、口縁部に刺突文（19、21、22）、胴上部に隆帯をもつ例（19、27）などがあり、他は貝殻条痕文を内外面に残している。早期末葉の茅山上下層式の範疇である。第23図3～11は、大小の斜縄文を地文にループ文とコンパス文を横位に配置しており、前期前半の関山式とみられる。第23図12～44、第24図5～9は前期後半の諸磯式、浮島式、興津式の土器群である。13は口唇部に刻目、口縁部に列点状の押引き文を横位に配した中に平行沈線文を施す。14～20は大小半截竹管による弧状の平行沈線で文様を描く、21、22、27は渦巻状の浮線文を充填し、23、25、26は細い集合沈線を地文にボタン状の貼付文を配している。24、28～39、42、43は一部に細い弧状の沈線を横位に施し、その間に連続三角文（瓜形文）を数段に渡り配する。40、41は波状貝殻文、44と第24図6～9は羽状を呈している。第24図5は口唇部に刻目、口縁部は細い沈線を横位に配置している。第24図1～4は底部片で1・2は尖底で早期前半、3・4は平底で前期後半と考えられる。10は焼成は良好でやや太い縦位の撚糸を配し、中期後半の加曾利E式、11は細い円弧状の集合沈線を口縁部に施し、中期の所産、12、13は晩期後半の大洞A式と考えられ、いわゆる浮線文とみられる。14は土師器甕の胴上部片と考えられ、外面に刷毛目が残る。古墳時代前期か。15は常滑の水甕胴部片である。16～19は永樂通寶で径は2.5cm、初鑄は1408年明代の所産である。出土位置はE-4区Ⅱa層上面である。

第25図1～4は須恵器で1～3は杯蓋、4は杯身である。1は口縁部の小片で推定口径11.4cm、2.3は口縁部外面に沈線か周り2の復元口径は10.6cm、器高は推定で5.6cm、3は復元口径10.4cm、器高4.7cm、4は口縁部小片で稜をもち、かえりは小さく低い、推定口径9.0cm、体部最大径10.4cmとみられる。5～9は土師器杯で5は開きぎみの口縁部で稜をもち須恵器蓋杯を模倣した形体である。復元口径は12.9cm、推定器高5.4cm、6はほぼ完形で口縁部は短く直立しわずかな稜をもつ、体部外面のヘラ削り

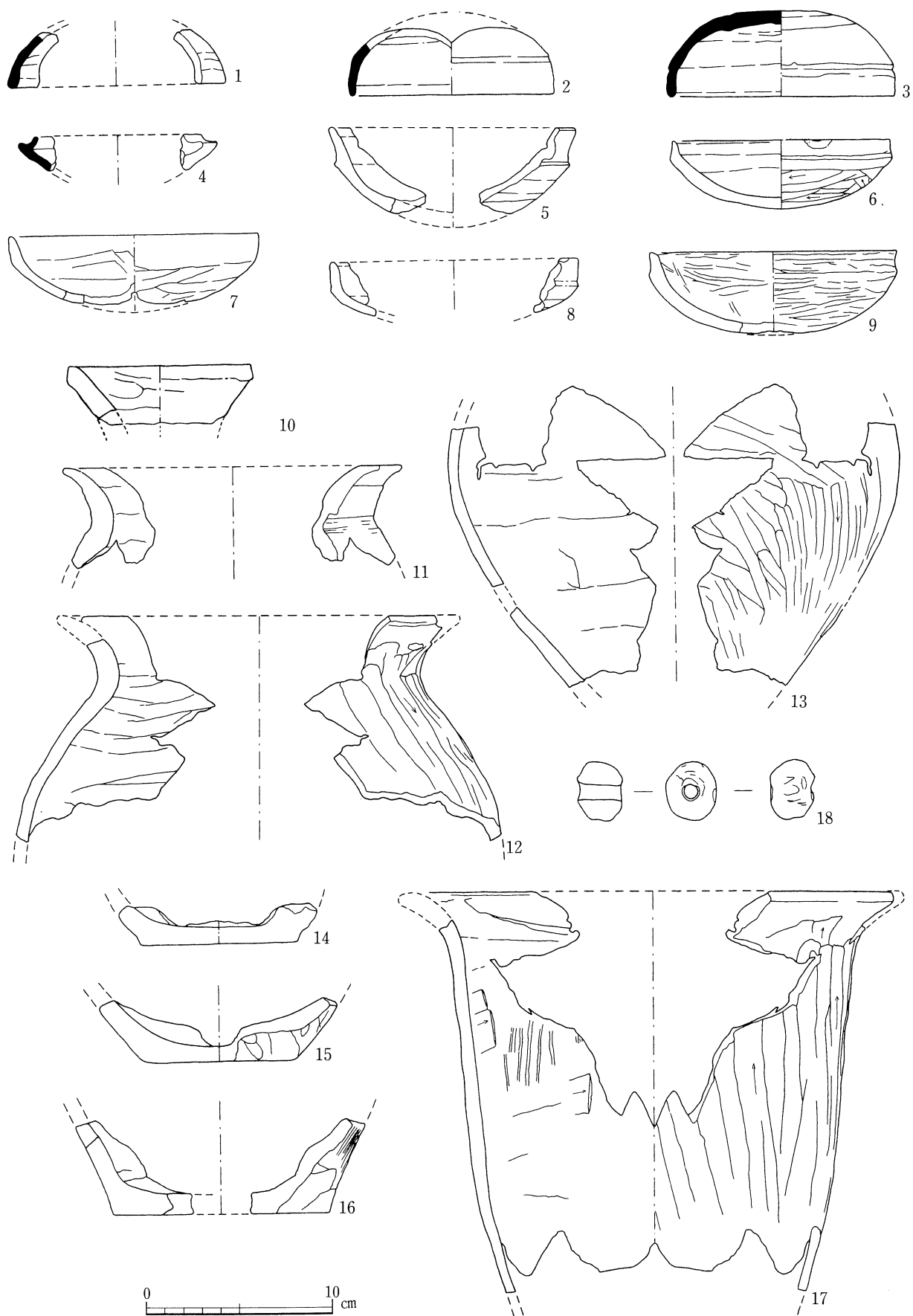


(ただし16~19は原寸)



第24図 グリッド等出土遺物実測図(2)

は明瞭である。口径は11.6cm、体部最大径は11.8cm、器高3.7cm、7はほとんど口縁部に稜がみられない形体で復元口径は13.3cm、体部最大径12.8cm、器高4.2cm、8は小片で口縁部に稜をもち立ち上がりは直立する。復元口径と体部最大径とも12.8cm、9は少し大型で内外面ともにヘラ磨きがなされる。口縁部はわずかに稜をもつ。復元口径は13.2cm、体部最大径は13.3cm、器高は4.6cmである。10は土師器小鉢とみられる。体部は逆ハの字状に開き口唇部外面は面取りされる。復元口径は9.8cmである。11~13



第25図 グリッド等出土遺物実測図(3)

は土師器甕でいずれも胴部が球形で口縁部が小さく壺形である。胴部外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラナデが認められる。11は口縁部の小片で復元口径は17.9cm、12は胴上半部片で復元口径は21.4cm、13は胴部片で最大径は24cmを計る。14～16は甕の直部片とみられ、16は外面胴下位に縦方向のヘラ磨きが認められる。復元底径は14と15が8.0cm、16が11.2cmである。17は土師器甕で胴下部を欠損する小片である。胴部外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラナデの後一部に縦方向のヘラ磨きがなされる。18は球状の土錘で直径は2.6～3.0cm、孔は径0.7～0.9cmである。

5. まとめ

辰巳ヶ原遺跡の今回の調査について簡単にまとめてみたい。調査面積は確認調査の対象が3.130㎡でそのうち本調査を北側部分672㎡実施した。本調査で検出した遺構は、縄文時代早期末葉の炉穴群3群、古墳時代中期の墓壇1基、後期の竪穴住居跡3軒、縄文時代と考えられる土坑2基、中世と考えられる土坑1基、時期不明の土坑2基、中世と考えられる溝2条、中世以前の溝2条、時期不明の溝1条である。

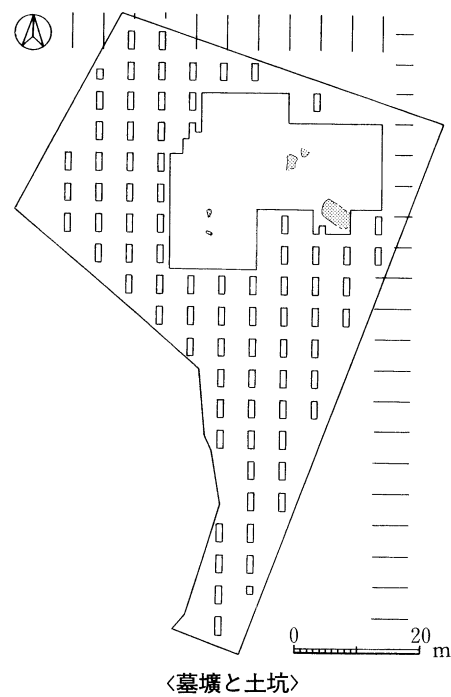
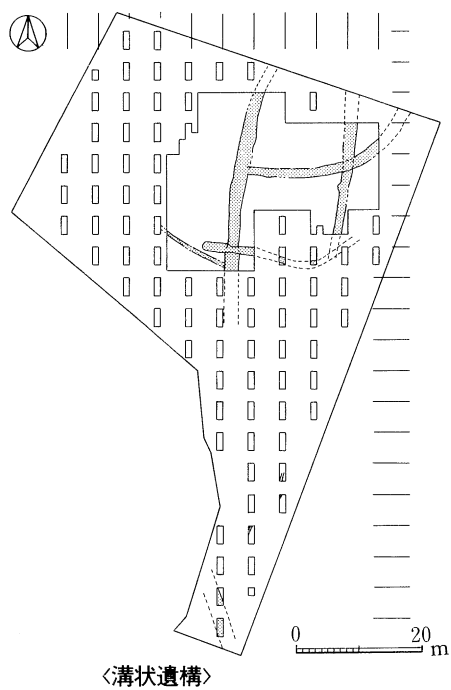
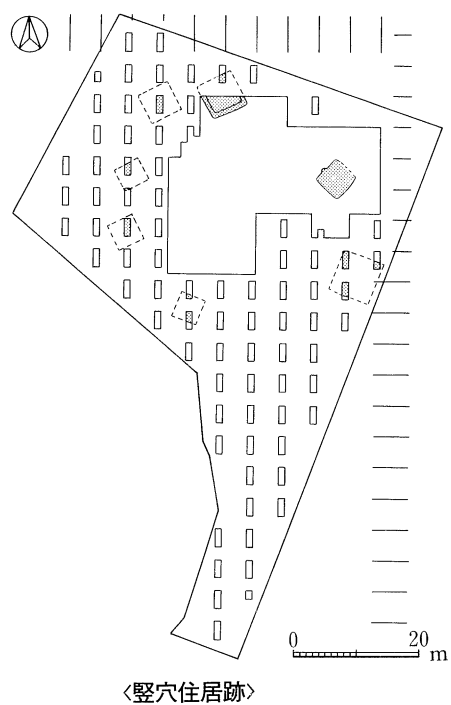
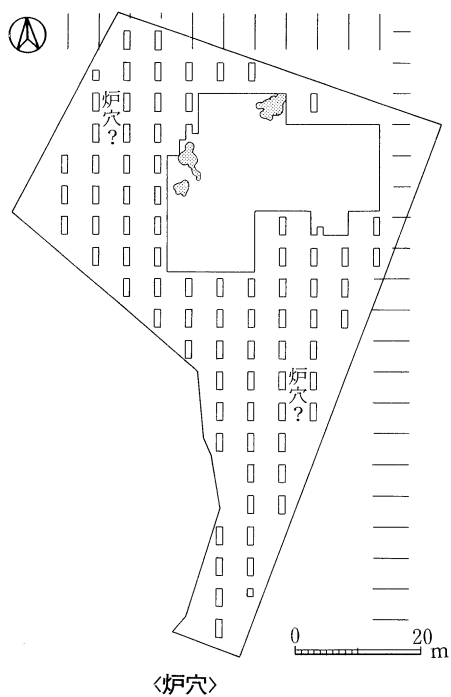
縄文時代早期末葉の炉穴群は単独の例は無く数基が重複している。出土土器から主体は茅山上層式とみられるが、他に鶺鴒ヶ島台式、野島式、茅山下層式の土器片も覆土から検出されている。周辺の確認調査範囲でも幾つかの炉穴群が認められ、また、ほぼ全域に早期の包含層が存在する。

1号土坑は、不整長円形で出土遺物は野島式などの早期後半が多いが、興津式や浮島式の土器片もみられ、前期後半の所産と考えている。5号土坑は小型の不整長円形で上部に混貝土層を含み、流れ込みの状況で茅山下層式の土器片が出土している。

古墳時代中期の墓壇は、木棺直葬で覆土上部から出土した埴片（上部に置かれた供献土器と考えている）から時期を推定した。口縁部径と体部径の大きさが近似しており、一部に刷毛目も残り、小澤^{註1}氏編年のⅡ期（400～420年）に概当すると思われる。

後期の住居跡は、完掘出来た竪穴は2号の1軒である。出土した土器から編年時期を推定すると、1A号が須恵器杯身がTK217の新しい時期と考えられる点などから茶ノ木遺跡編年（木對氏編年）^{註2}の10期（650～670年）の古い段階、1B号が同じく10期の新しい段階、2号が土師器杯から同じく10期（650～670年）の古い段階と考えている。1A号は焼土が存在し火災か焼却廃棄と考えられる。また1B号が柱穴を再利用している可能性があるため、1Bは1A廃絶後それほど離れていない時期に作られたと思われる。

溝状遺構は、土層観察から幾つかの新旧関係は判明しているが確実な時期は不確定である。そのうち4号は立ち上がりの上部から鎌倉期と思われる常滑の甕小片^{註3}が出土し、溝の断面の形態が底部が狭い、いわゆる箱葉研を呈している。また、同様の形態をもつ3号溝と直角に接続する。したがって3号と4号は、中世の何らかの区画溝の可能性はある（永楽通寶4点がまとまって3号溝付近から出土している）。さらに3号土坑も長さ2.8mほどで底部に方形のピットが4本存在し、3号溝と方向が似ている点などから中世の所産かもしれない。1号と2号溝は3号と4号溝より古いがそれぞれの機能は不明である。5号も土層観察から比較的新しい溝と考えられる。また、確認調査区域の南側に所在する6号溝はトレンチのみの調査であるが、幅2～2.5mで底部に幅1m前後のピットを約1.5m間隔で認められ、溝の方向や位置がこの台地縁辺部に添って存在する点などから柵列を伴う溝とみられ



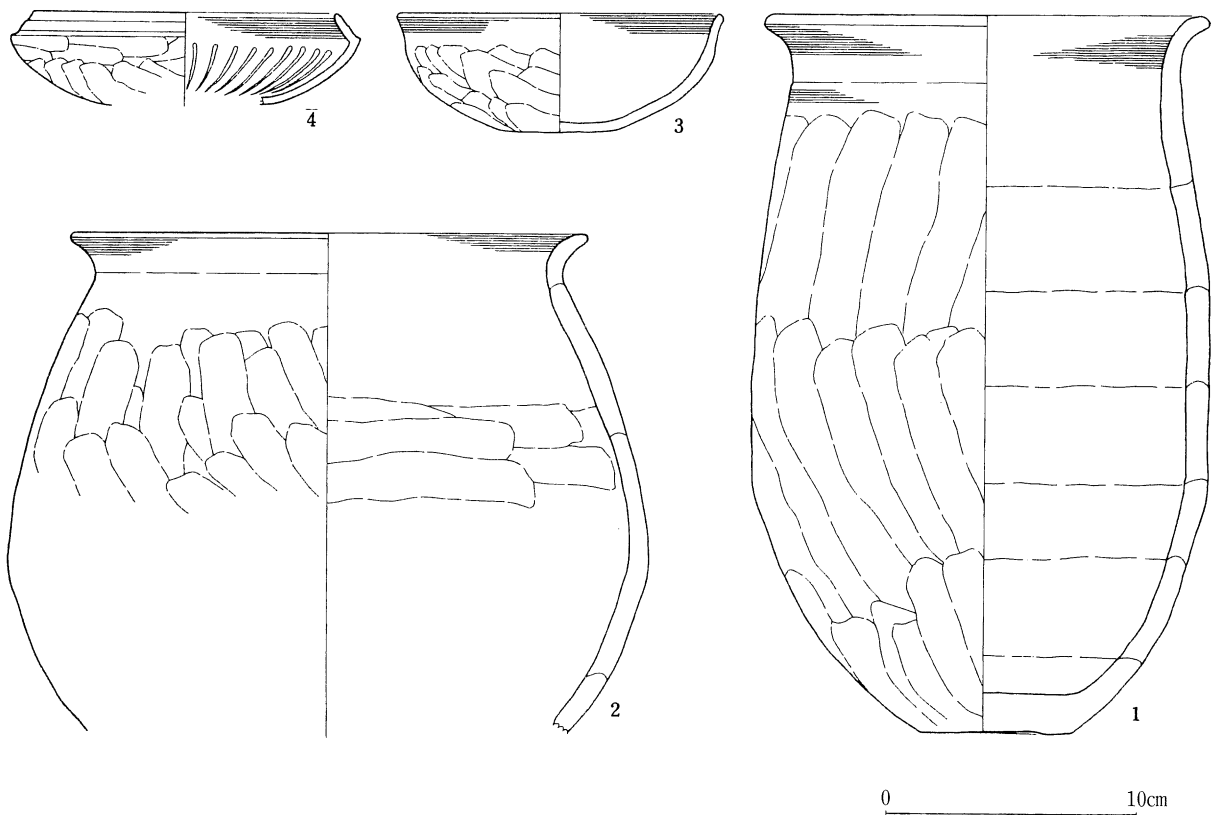
第26図 種類別遺構配置図

る。中世の所産と推定されるが、3号や4号溝との関連性を考えると興味深い遺構である。

この他グリッドなどから早期前半の撚糸文系から晩期までの土器片などが出土している。井草、稻荷台、田戸、子母口、野島、鶴ヶ島台、茅山、関山、諸磯、浮島、興津、加曾利E、大洞など後期を除く各時期がみられるが、特に炉穴群を伴う早期末葉と土坑以外遺構が少ない前期後半の土器量が多い。土師器では刷毛目をもつ甕片があり（第24図14）、1号墓壙との関連も想定できる。

当遺跡は縄文時代早期末葉の炉穴群と古墳時代後期7世紀代の集落及び中世の区画溝が主体と考えられるが近接地の調査では、炉穴群が北側の向原遺跡^{註4}（鶴ヶ島台式期4群）と1982年の調査^{註5}（茅山上層、下層式期3群）が検出されている。また、台地北東端の大厩遺跡^{註6}では茅山上層、下層式期が8群調査され、当台地縁辺部に点々と炉穴群が設営されていたことが伺える。さらに、1982年の調査^{註7}では鬼高式期の住居跡が1軒調査され、出土遺物から茶ノ木編年8期頃（620～630年）と考えられる。さらに、向原遺跡^{註8}や南側の小谷頭に位置する定堀込遺跡^{註9}では方形周溝状遺構が、その隣接地の南大広遺跡^{註10}では奈良時代の寺院跡がそれぞれ調査され、当遺跡は7世紀代の集落が営まれた後に奈良時代の墓域等として使用されていたとみられる。中世では、定堀込遺跡で陶器片が出土し、その東側の東四辻遺跡^{註11}では小谷に挟まれた部分の台地を切断する様に幅3mほどの溝が確認されている。当遺跡の溝もそれらとの関連性が伺えるのかもしれない。

辰巳ヶ原遺跡は、大厩台地の西側に位置し昭和30年代の辰巳台団地の造成によりかなりの部分が消滅したが、今回の調査の様な小さな結果を積み上げてゆくことにより、その全体像の復元も可能になる。さらには、村田川流域における歴史的景観復元にも貢献できると考えている。



第27図 1982年の調査で検出した竪穴住居跡出土土器（1983 武部）

(註)

- 註1 小沢洋「上総における古墳中期土器編年と古墳・集落の諸相」『君津郡市文化財センター研究紀要Ⅷ』P77～108、1998 (勸君津郡市文化財センター)
- 註2 木對和紀「堅穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉—椎津茶ノ木遺跡を中心として—」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』P249～324、1993 (勸市原市文化財センター)
- 註3 櫻井敦史氏ご教示
- 註4 米田耕之助「第2章菊間向原遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』P10～14 1988 市原市教育委員会
- 註5 武部喜充「千葉県市原市辰巳ヶ原遺跡発掘調査報告」P4～7、1983 市原市辰巳ヶ原遺跡調査会
- 註6 古内茂他「市原市大厩遺跡」P6～17、1974年 千葉県都市公社、(勸千葉県文化財センター)
- 註7 註5と同じ。P10、11
- 註8 註4と同じ。P15、16
- 註9 近藤敏「第5章定堀込遺跡」『昭和63年度市原市内遺跡群発掘調査報告』P40～43、1989 市原市教育委員会
- 註10 浅利幸一「4. 南大広遺跡(B地区)」『第7回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』P14、15、1992 (勸市原市文化財センター)
- 註11 註9と同じ。P43
- 註12 高橋康男「6. 東四辻遺跡」『市原市文化財センター年報昭和62年度』P16、1989 (勸市原市文化財センター)

八幡御所跡推定地

第二章 八幡御所跡推定地

1. 調査に至る経緯

昭和56年3月2日付けで株式会社ジョイフル本田代表取締役本田昌也は、千葉縣市原市五所字神明1.746他に店舗用の駐車場等の造成を計画し、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」の照会を千葉県教育委員会と市原教育委員会に提出し、現地踏査などの後に昭和56年4月10日付けで千葉県教育委員会教育長より「館跡1ヶ所」の回答がなされ

第5表

た。それを受け度重なる協議を経て、対象地全域について確認調査を実施し、進入道路等に関わる部分については本調査を行う方針が決定された。発掘調査は、「市原市八幡御所跡調査会」(第5表)を組織して行われ、昭和56年6月10日から20日までの確認調査では、土塁内部に遺構が検出されなかったため、道路によって削平される土塁部分の本調査(210㎡)が同年8月26日から29日まで実施された。なお、その他の土塁については、同年10月1日付けで取り交わした開発行為に関わる市原市長と株式会社ジョイフル本田との協定書により、現状保存することとなった。

市原市八幡御所跡調査会組織	
会長	石井正泰 市原市教育委員会教育長
委員	東條高史 ㈱ジョイフル本田市原店出店準備室次長 小出新一郎 市原市教育委員会社会教育課長 越川敏夫 調査主任
調査主任	越川敏夫 日本考古学研究所(発掘担当者)
事務局	東條高史 調査委員 田中清美 市原市教育委員会社会教育課

2. 遺跡の位置と歴史的環境

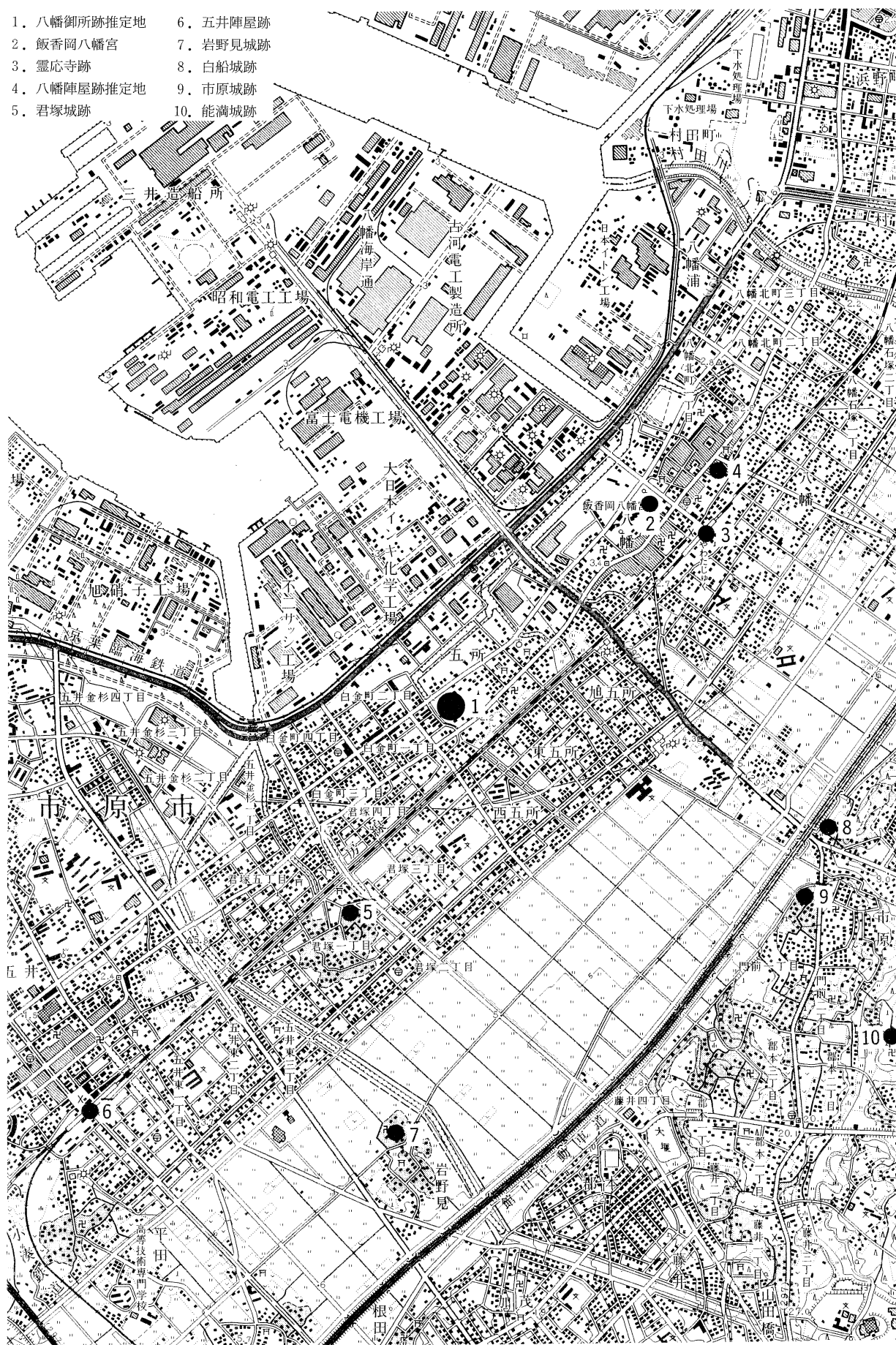
八幡御所跡推定地は、東京湾に面する沖積平野の砂帯上に所在する。海岸線は、現在埋め立てられているが、当時は間近に海岸が迫っていたようである。八幡から五井地区にかけての標高2～3mのこの砂堤帯上には現在市街地が海岸線に沿って広がっており、その後背地には水田が控え、本遺跡から東1kmほどには標高20mほどの市原台地が位置する。遺跡は、西側を流れる金杉川に接する。

本遺跡周辺は、早くから市街化されたこともあり、発掘調査によって明らかになった遺跡は少ないが、現存する史料などを加味して遺跡周辺の中世の歴史的環境を概観してみたい。

東方に位置する沖積平野を望む市原台地の西端部には、白船城跡と市原城跡が占地している。白船城跡は、15世紀から16世紀初頭にかけて、先行する墓域を取り込むようにして普請された城郭であり、15世紀後半を最盛期としている。細長い独立丘陵を3条の箱堀で区画したいわゆる連郭式の形状を呈し、築城主体については、八幡後背低地及び市原台地周辺の在地領主となる可能性が指摘されている。一方、市原城跡は15世紀代の墓域を破壊して築城されたと考えられている。築城時期は16世紀後半を中心とした時期で、前述の白船城跡との有機的な関連性が想定されている。この台地上には、中世上総国衙の推定地と考えられている能満城跡や、飯香岡八幡宮の前身と伝えられる市原八幡神社、15世紀末から16世紀初頭の室町初期の建築様式を残す府中日吉神社などが位置している。

一方、本遺跡と同様の沖積平野に立地する遺跡に、八幡宿駅東口の区画整理事業に伴って調査された御墓堂遺跡がある。この遺跡は、旧霊応寺境内に含まれる墓地であり、足利義明夫妻の墓塔と推定される大形五輪塔2基が存在している。霊応寺は明治期の廃仏毀釈運動により廃絶したが、足利義明が仏道を極めた鎌倉の鶴岡八幡宮と関係が深い飯香岡八幡宮の別当寺であり、義明の居館となる八幡御所が造営されるまでの仮寓の場所と考えられている。なお、仮寓の時期は明らかではないが、永正7(1510)年頃と推定されており、義明が原氏を破って小弓城に入城する同14(1517)年までが八幡御所に居を構えた期間とする説がある。調査の結果では、中世の道路や溝などが検出されている。ま

1. 八幡御所跡推定地
2. 飯香岡八幡宮
3. 霊応寺跡
4. 八幡陣屋跡推定地
5. 君塚城跡
6. 五井陣屋跡
7. 岩野見城跡
8. 白船城跡
9. 市原城跡
10. 能満城跡



第28図 遺跡の位置図 (1/25,000、蘇我・五井)



第29図 周辺遺跡位置図 (1/40,000)



第30図 周辺地形図 (1/2,500)

東五所県営住宅

た、無量寺は千葉市に所在する大巖寺の末寺で、原氏を含めた下総千葉氏系氏族による影響が指摘されている。康正2（1456）年、東常縁によってせめられた馬加城主千葉康胤がいわゆる八幡合戦によって村田付近で敗死したが、その一族の墓塔と伝えられている中形の五輪塔が3基現存している。

低地上の中世と考えられる城館跡には、君塚城跡、岩野見城跡、根田城跡、養老川を挟んだ対岸に位置する飯沼城跡、島野土腐館跡、白塚館跡などがある。

このような遺跡が位置する当該地域は、中世を通して市原荘に含まれていることは既に指摘されている。その成立年代については明かではないが、12・13世紀頃に石清水八幡宮を荘園領主として成立した寄進地型荘園と想定され、北条氏が何らかの権利を有していたことが知られている。その後、南北朝期になると足利氏のもとで醍醐寺勢力の本荘への本格的な進出が顕著になるが、一方では国衙領などの存在も推測されており、一円開発とは異なった複雑な領主権が錯綜していたことも大きな特徴である。本遺跡周辺に多く存在する小規模な城館跡を考えあわせると、市原荘内に強大な在地勢力が展開しなかったことの証左とする指摘がある。15世紀後半になると、武田氏の影響が強くなり、16世紀初頭には陸奥にいた足利義明を擁立して基盤の浸透に力を注いでいった。その居住地として想定されているのが今回調査した八幡御所跡推定地であり、後には、小弓城に入部し、小弓公方として強い力を示すようになった。

3. 調査の概要

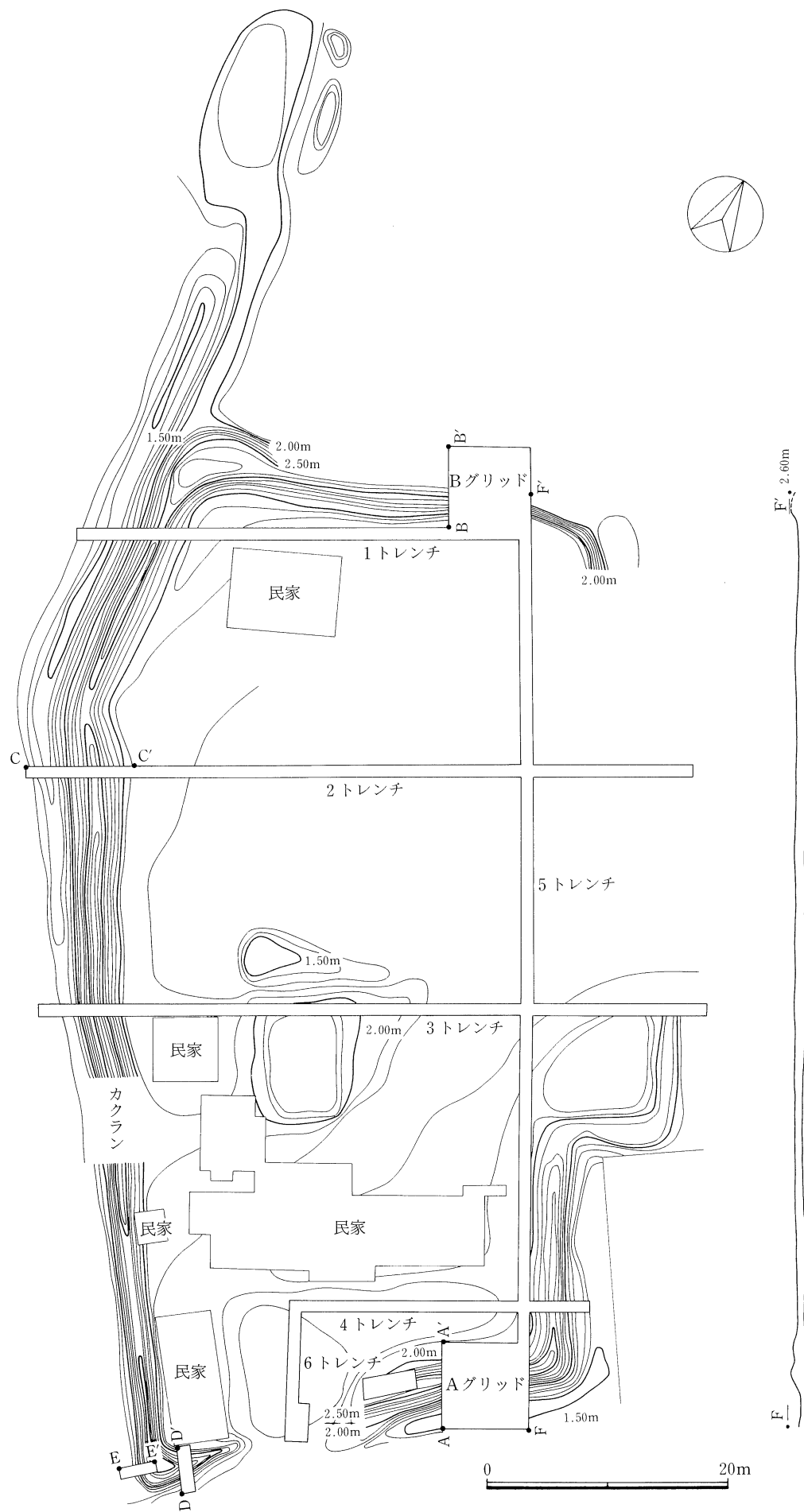
発掘調査は、造成予定地全域に対して10%の確認調査を実施し、遺構の有無を確認した後道路等掘削影響範囲に対して本調査に移行することとなった。調査に際して、10cm間隔の等高線で地形図を作成した。これをもとに、確認調査は、幅1mのトレンチを土塁に直交するように設定し、1～7トレンチと呼称した。土塁内部の標準土層は、Ⅰ層：表土層（耕作土）、Ⅱ層：暗灰褐色土（砂質）、Ⅲ層：黒灰褐色土（砂質）であるが、全体に攪乱が著しかった。その結果、土塁内部の遺構が確認されなかったため、道路によって削平される土塁部分のみに本調査を実施することとなった。本調査の面積は210㎡で、土塁下からの遺構も確認されなかった。

4. 検出された遺構

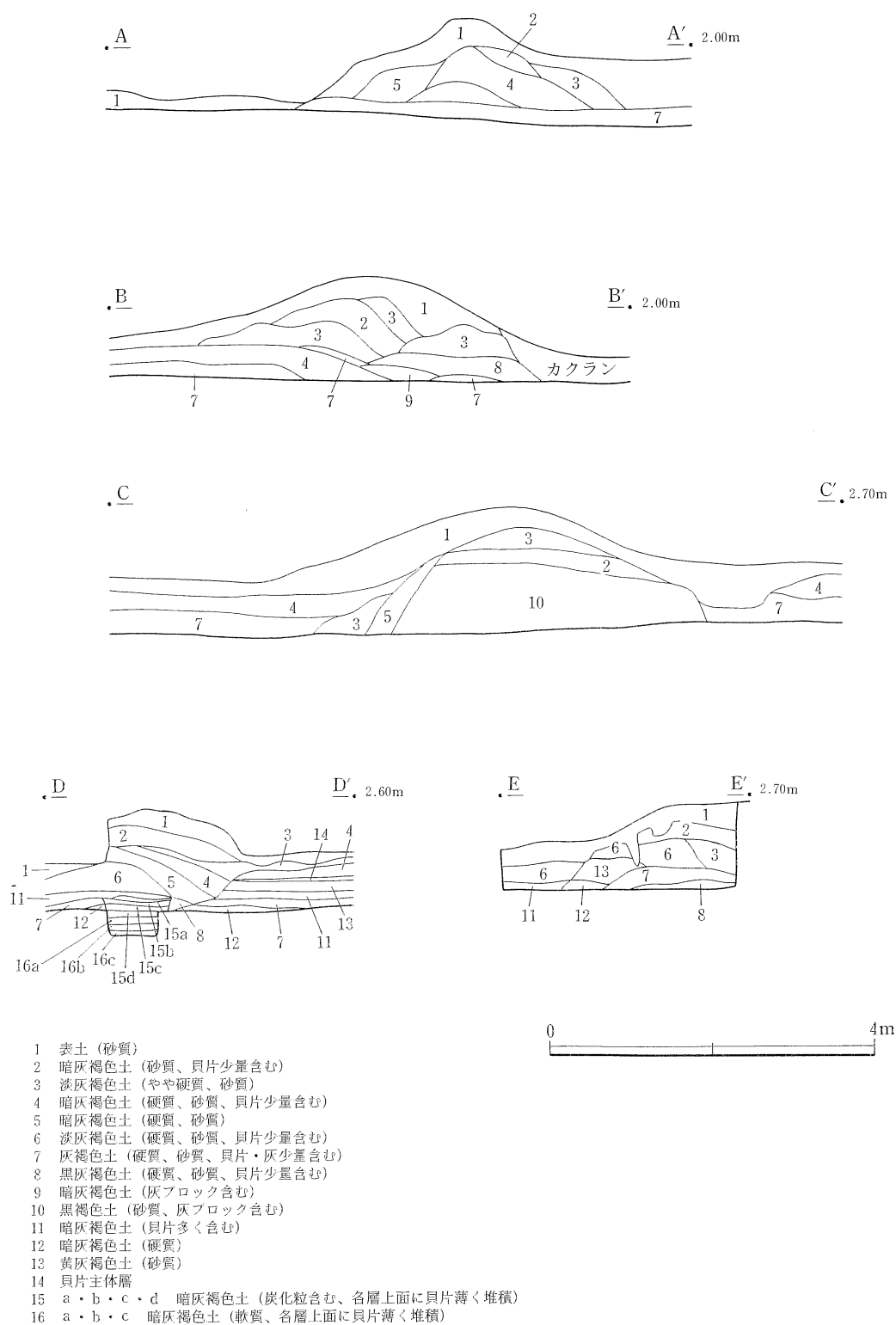
本遺跡から検出された遺構は、四方を巡るように築かれた土塁のみで、他の遺構については、後世の攪乱等もあり確認されなかった。

土塁（第31・32図）

全体的に遺存状況はあまり良くなく、北側土塁外側は部分的に削平され、東側も長さ40m程にわたって消失している。西側は、金杉川の流路に沿って土塁が築かれている。北側でくの字状にやや屈曲しているが、これは流路の形状に規制されたためと考えられる。長さは約85mを測る。南側に移行するに従い幅を減じているが、これは、内側が現存する宅地による改変、外側は護岸工事によって削られた可能性が高い。本来は北側に確認されるように土塁外側に犬走り状の窪みが伴っていたようである。北側土塁も外側が削平されており、かなり狭くなっているが、西側に残る平場の存在から推定すると幅5m以上、長さ40m程になることが予想される。なお、落合氏が想定した水堀跡については、攪乱もあり確証を得るには至らなかった。西側と北側の土塁が接する部分から北方向に40m程土塁が延びており、先端部は18×8m程度の長方形を呈する平場が形成されている。南側土塁は、落合氏の調査により津波除けの防潮堤に改造されていると指摘されているが、本来の土塁の痕跡を捉えるこ



第31図 土塁実測図・トレンチ配置図 (1/500)



第32図 土塁部土層断面図 (1/80)

とはできなかった。ただ、土塁中央部の途切れる部分が小口となることは確かであろう。長さは35m程で、現状で確認される小口部の幅は10m前後である。また、東側土塁は推定75mの長さで、南東コーナー付近には、「折」と呼ばれるクランク状の屈曲が観察される。全体的な形状は方形を呈している。土塁内部の空間は、現状で長さ70m、最大幅43mを測る。

5. まとめ

本遺跡は、八幡公方と称された足利義明の居館である「八幡御所」となる可能性が高いことが落合忠一氏により指摘されているが、土塁内部の建物や出土遺物が確認されなかったため、調査成果からは不明と言わざるをえない状況であった。義明と八幡御所との関係については、『飯香岡八幡宮由緒本紀』に、「人皇百四代後土御門院御宇寛正六乙酉年足利右兵衛佐源義明公御所註1 當郷ル被爲築早速御殿御造立被爲有則八幡御所止奉祀・・・」とあり、当御所が「乙酉館」とも呼ばれていたことが伺える。ただし、寛正6（1465）年という造立年代については、義明の活動を示す他の史料から考えて史実を的確に示していない。以下では、他の調査例などを参考に本遺跡の性格を考えてみたい。

落合氏は、本遺跡を八幡御所と推定しているが(第33図)、その主な根拠として、①方形の土塁が巡っており、その東北にある隅を凹字形に引き込ませる「隅欠け」という技法を用いている。②海側の土塁は幅5m、高さ1m余りあり、築造当時の規模が想定され、また、海側土塁の外には幅3m程の水堀が残り、金杉川の流れとともに要害を示している。③土塁西北側は深田が宅地を囲んでいる。④宅地面積は4反歩あり、武将館跡の最低面積をもっている。などを挙げている。①の土塁の形状は、いわゆる「方形館」に属するものである。関東地方の調査例を検討した橋口定志氏により、本遺跡のような居館跡はI種2類C種註2に分類されている。これは、沖積地内の自然堤防上・微高地上等の平坦面を利用し、水堀によって区画されるものとの分類で、土塁あるいは柵列または塀を伴う。水堀には用水が引き込まれる場合が多く、このようなタイプの館は14世紀以降16世紀が主要な展開期であるとしている。また、浅野晴樹氏によって、土塁や堀を伴う館は15世紀後半以降に多いことも指摘されている。橋口氏は、同タイプの居館の堀が灌漑用水的な機能を有していた例がほとんどであることなどから、「沖積地開発型居館」と位置づけ、「・・・堀は防御施設という側面よりも在地支配層の勸農権との関係を含めた灌漑用水との密接な関わりの中で理解すべきである。」とまとめている註3。①については、足利義明が八幡御所に居住したと思われる16世紀前半と時期的には矛盾がない。しかし、②～④については御所跡と推定する根拠とはなり得ないであろう。

土塁以外の遺構や遺物が確認されなかった現状では本遺跡の性格は明かではない。しかし、中世後半の築造がほぼ間違いないものであるならば、土塁の形状などから見て、御所というよりも橋口氏の同タイプの居跡に対する理解から、周辺の勸農を積極的に推進していった在地領主層の施設と考えた方が適当と思われる。

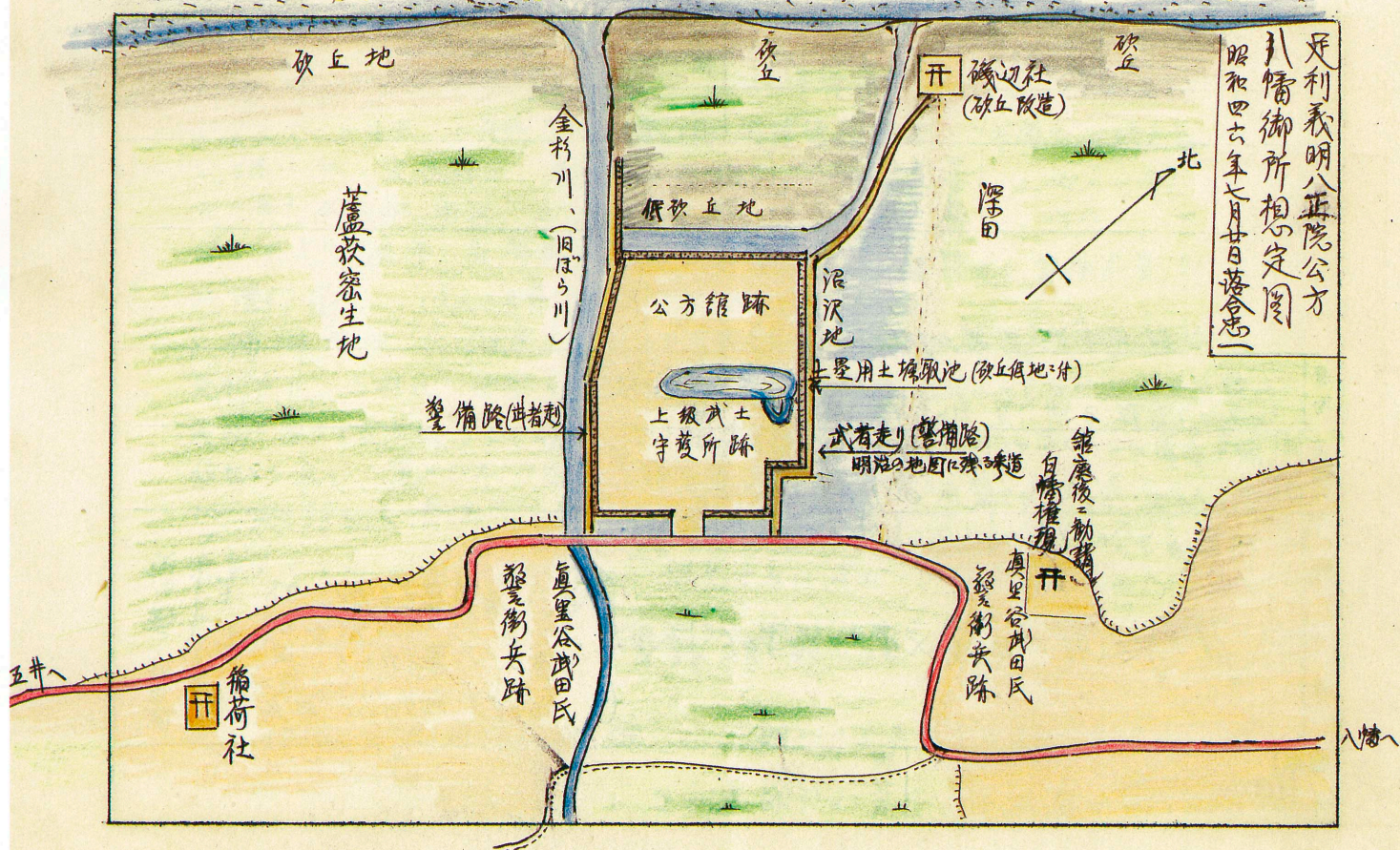
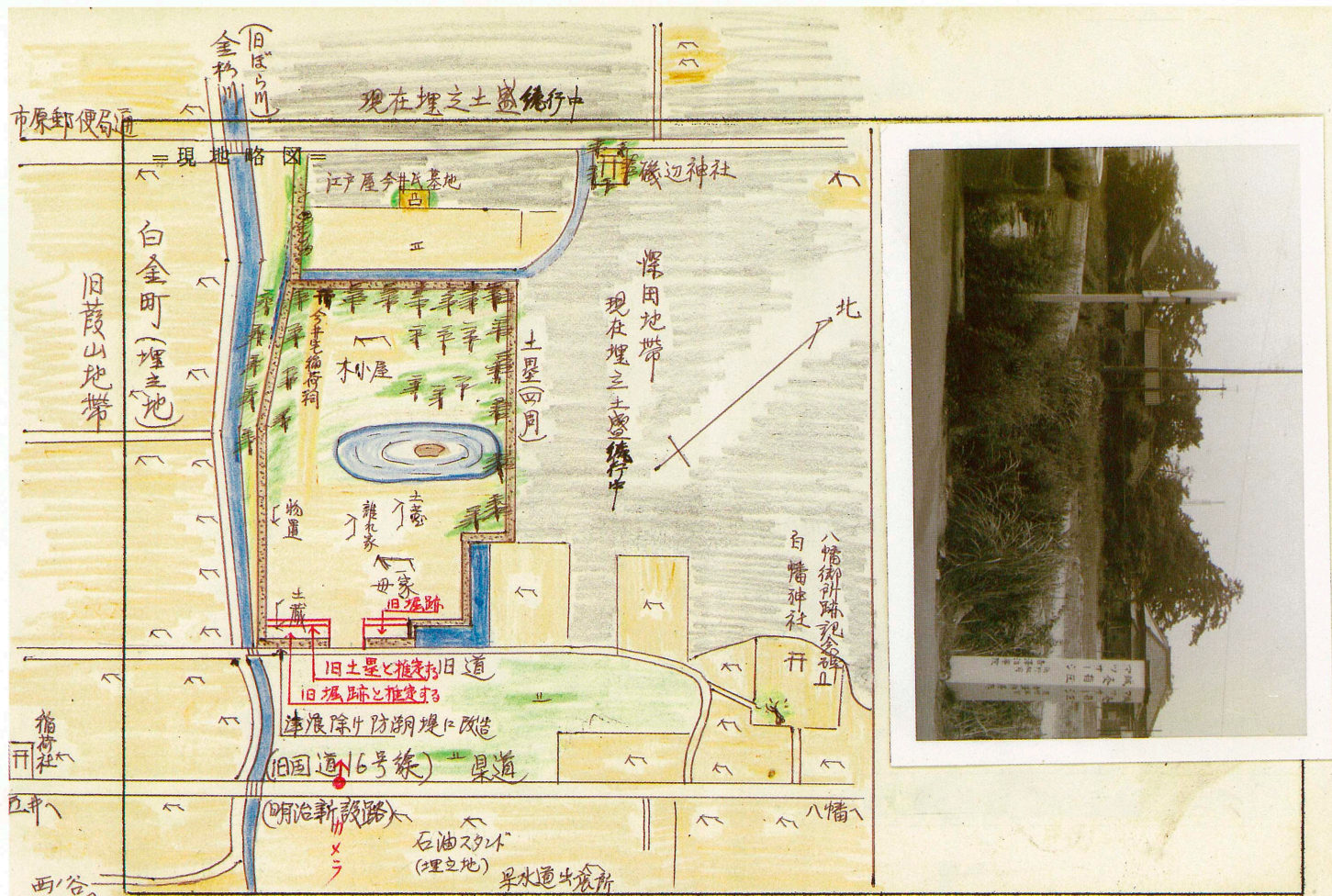
（註）

註1 落合忠一『八幡御所』1971

註2 橋口定志「中世居館の再検討」『東京考古5』P147～149 1987 東京考古談話会

註3 浅野勝樹「北関東における中世土器様相」『神奈川考古第21号』P179～180 1986 神奈川考古同人会

註4 註2と同じ。P154



第33図 現地略図 (昭和46年 落合忠一氏作図)

写 真 図 版

〈大厩辰巳ヶ原遺跡〉



調査前の遺跡東側の様子（辰巳ヶ原遺跡）



遺跡遠景 西側の谷より望む（遺跡は、正面の台地の上）



調査前の状況



トレンチ設定状況（南側）



トレンチ設定状況（北側）



本調査区域近景（西側より）



本調査区域近景（東側より）



1号炉穴群（南側より）



1号炉穴群（北側より）



2号炉穴群 全景



3号炉穴群 全景



1号土坑 全景



1号土坑遺物出土狀況



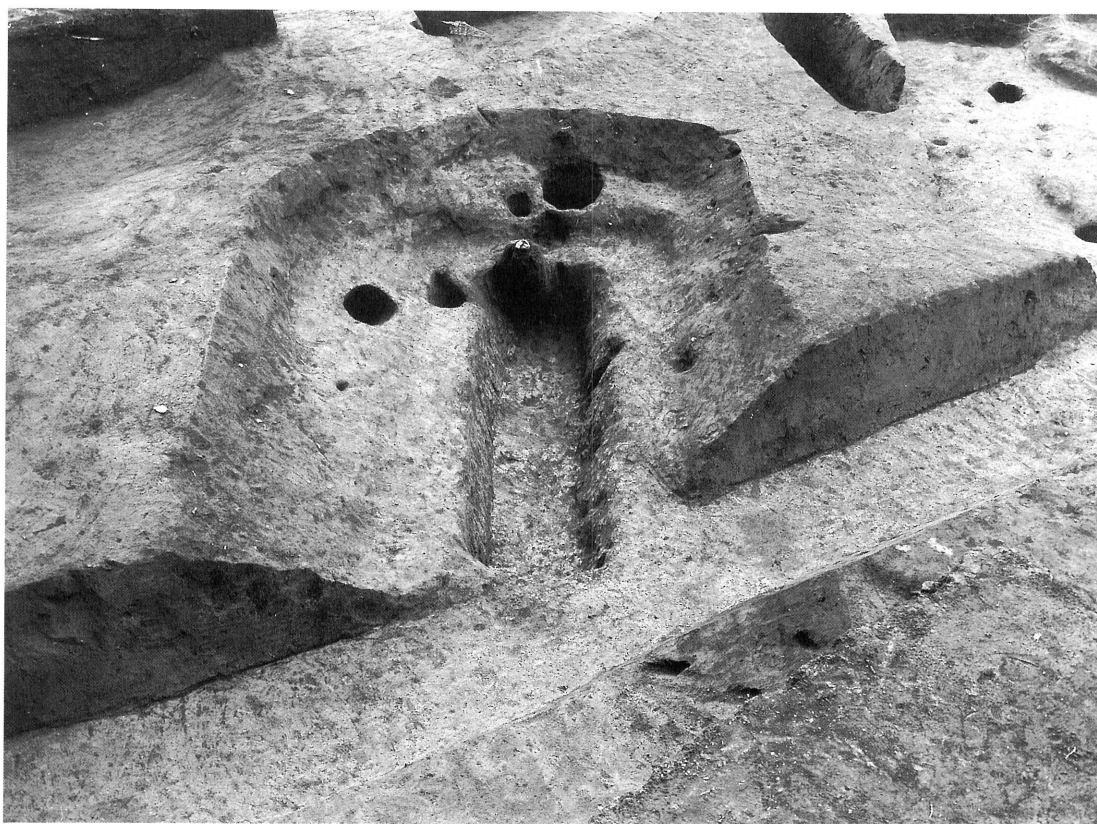
2号土坑 全景
(南東側より)



5号土坑 全景
(東側より)



3号土坑 全景



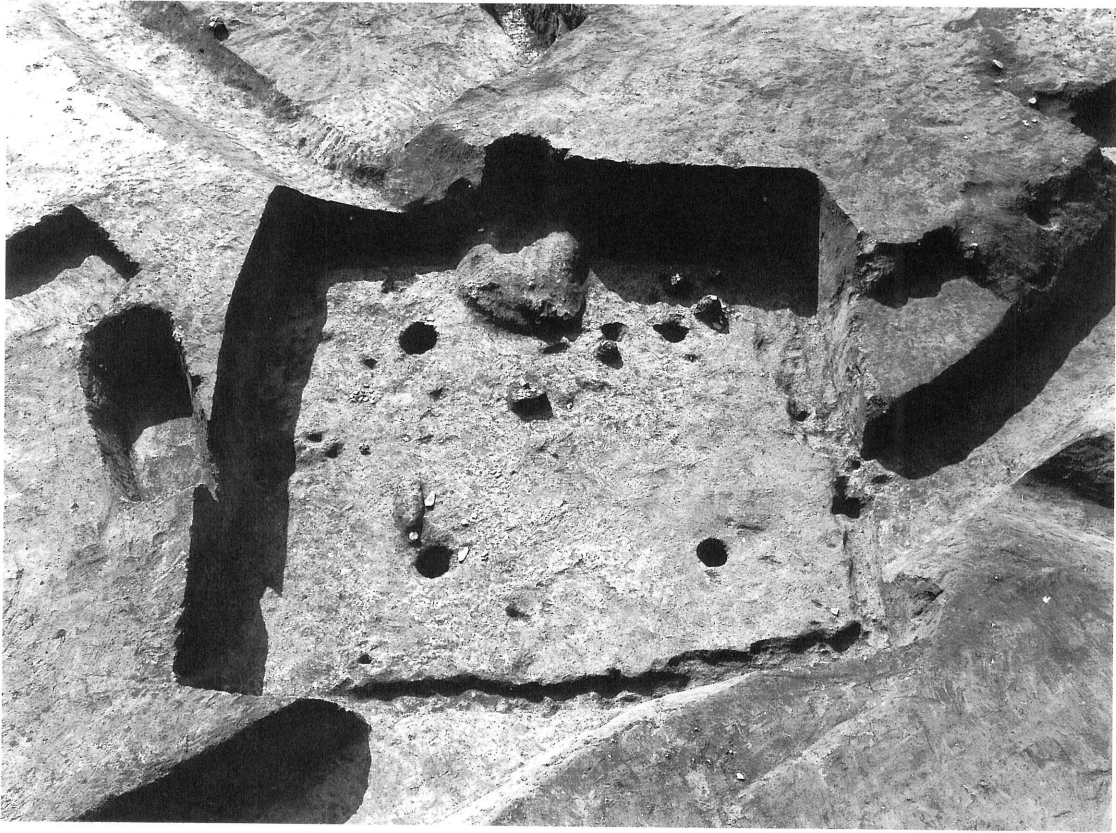
1号墓壙 全景（南東側より）



1-A・B号住居跡全景



1-B号住居跡 床面付近遺物出土状況



2号住居跡全景



2号住居跡 カマド周辺の状況



2号住居跡カマド検出状況



3号溝状遺構 南側より（手前の横方向の溝は2号溝状遺構）



1号溝状遺構 土層セクション（北側）



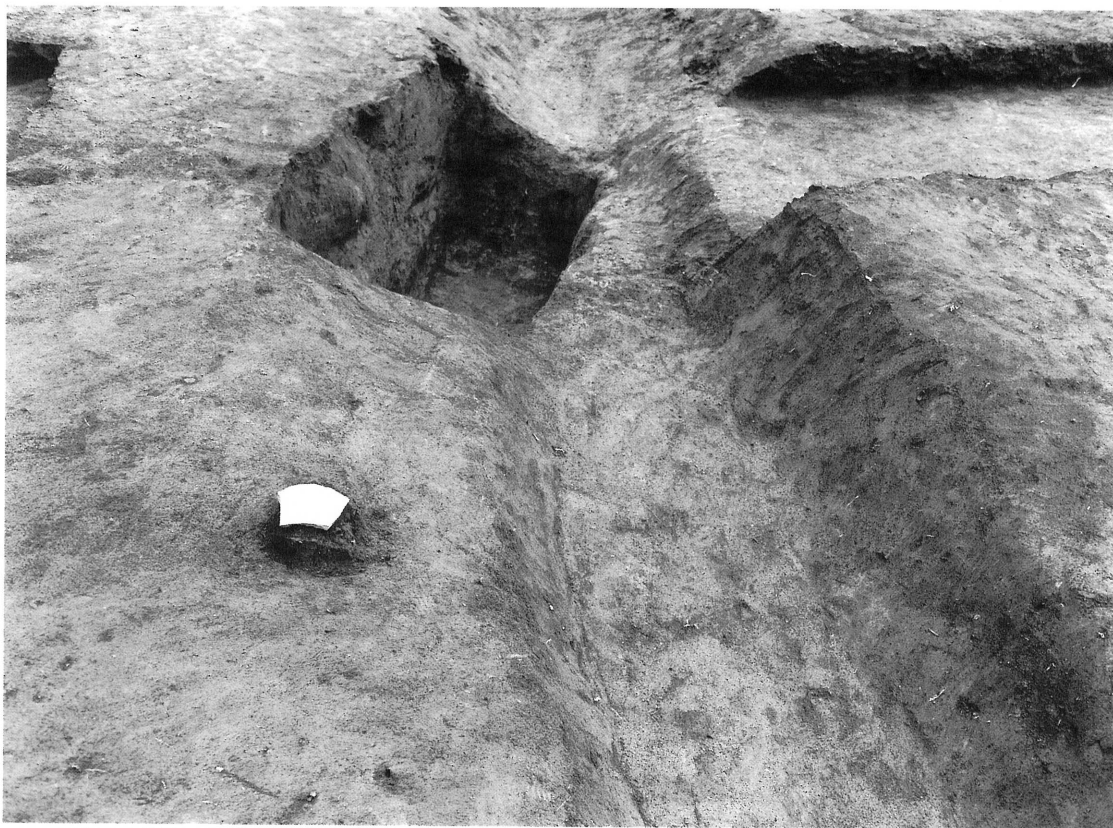
3号溝状遺構 土層セクション（E-4 付近）



1号溝状遺構（縦方向）と4号溝状遺構（横方向）の交差部分 北側より



1号溝状遺構（縦方向）と4号溝状遺構（横方向）の交差部分 南側より



4号溝状遺構と遺物出土状況



4号溝状遺構（縦方向）と1号溝状遺構（手前横方向）の交差付近 東側より



2号溝状遺構 西端部 遺物出土状況



2号溝状遺構 (東側より)

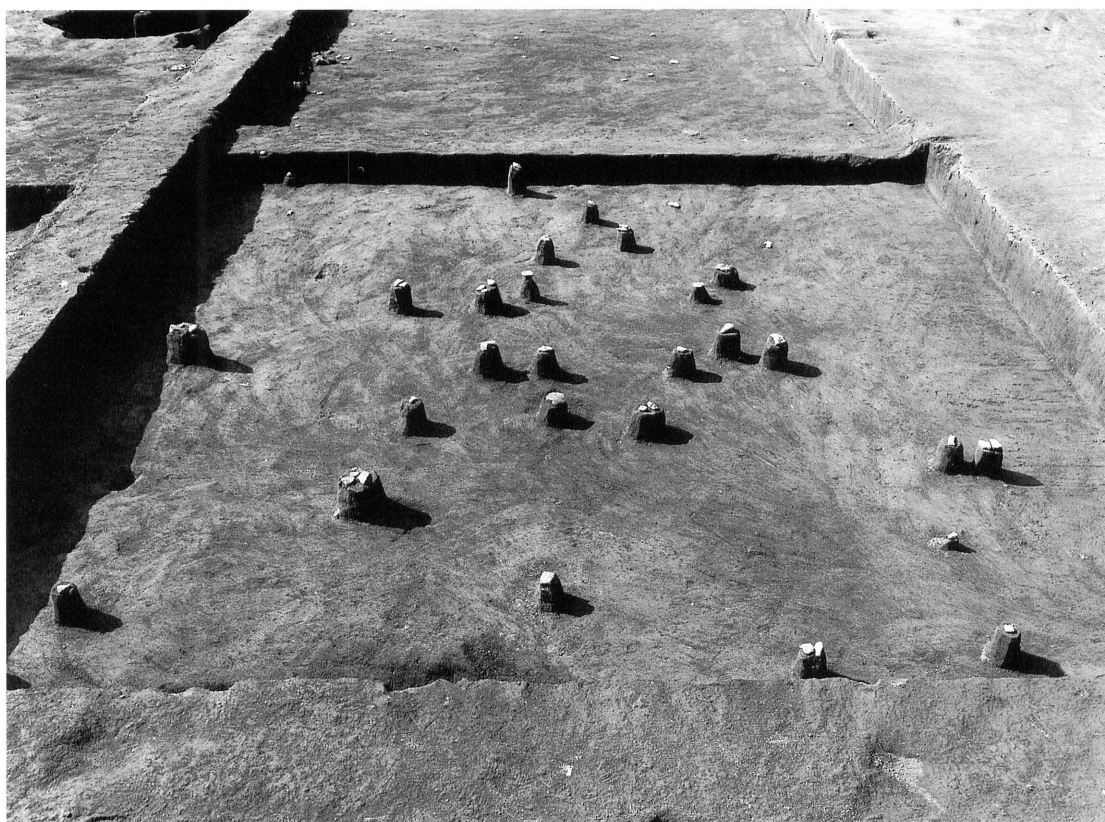
5号溝状遺構全景
南東側より
(手前の横方向の溝
は3号溝状遺構)



5号溝状遺構 (南側より)



本調査地区南西側調査状況



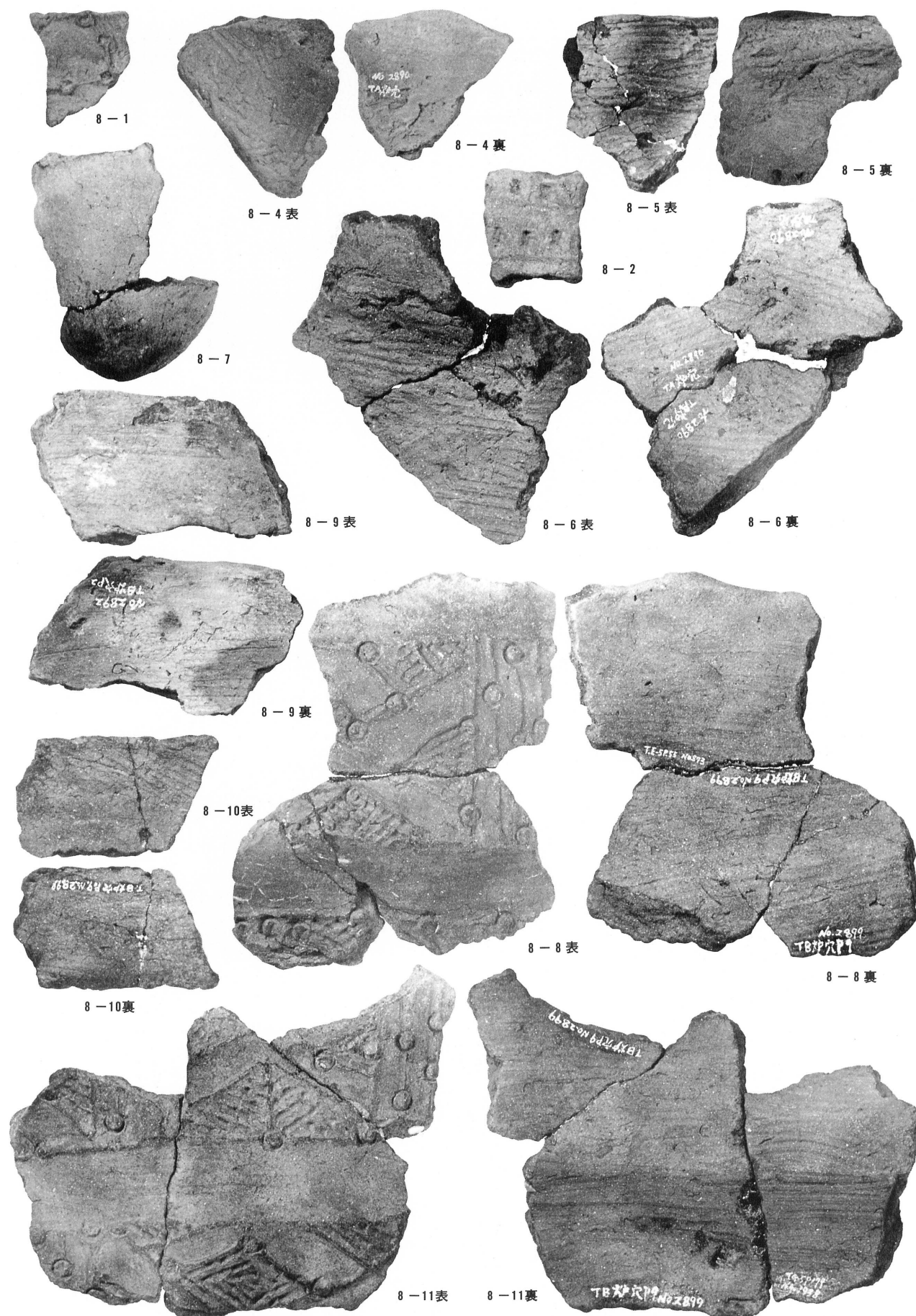
F-6区付近包含層遺物出土状況

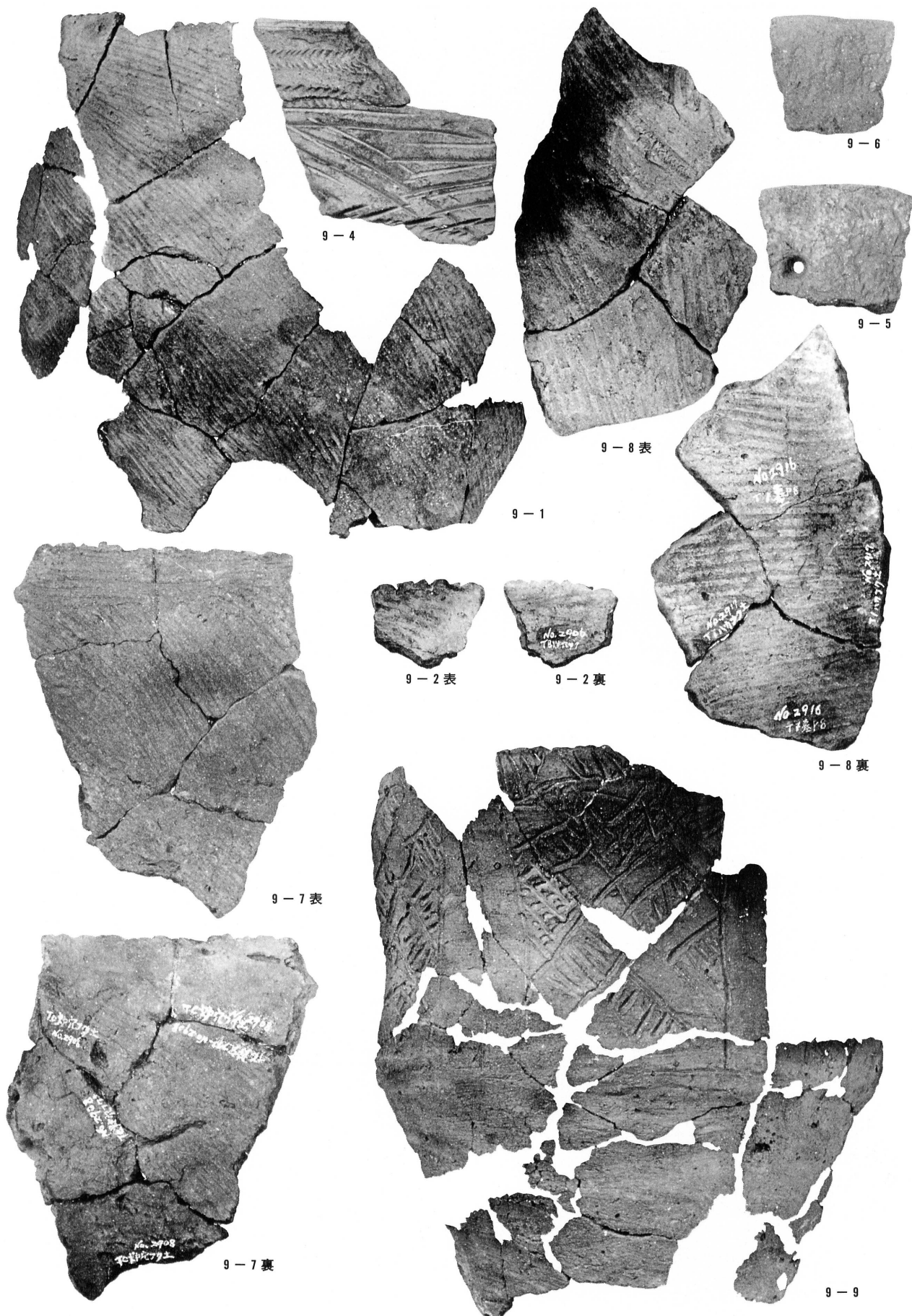


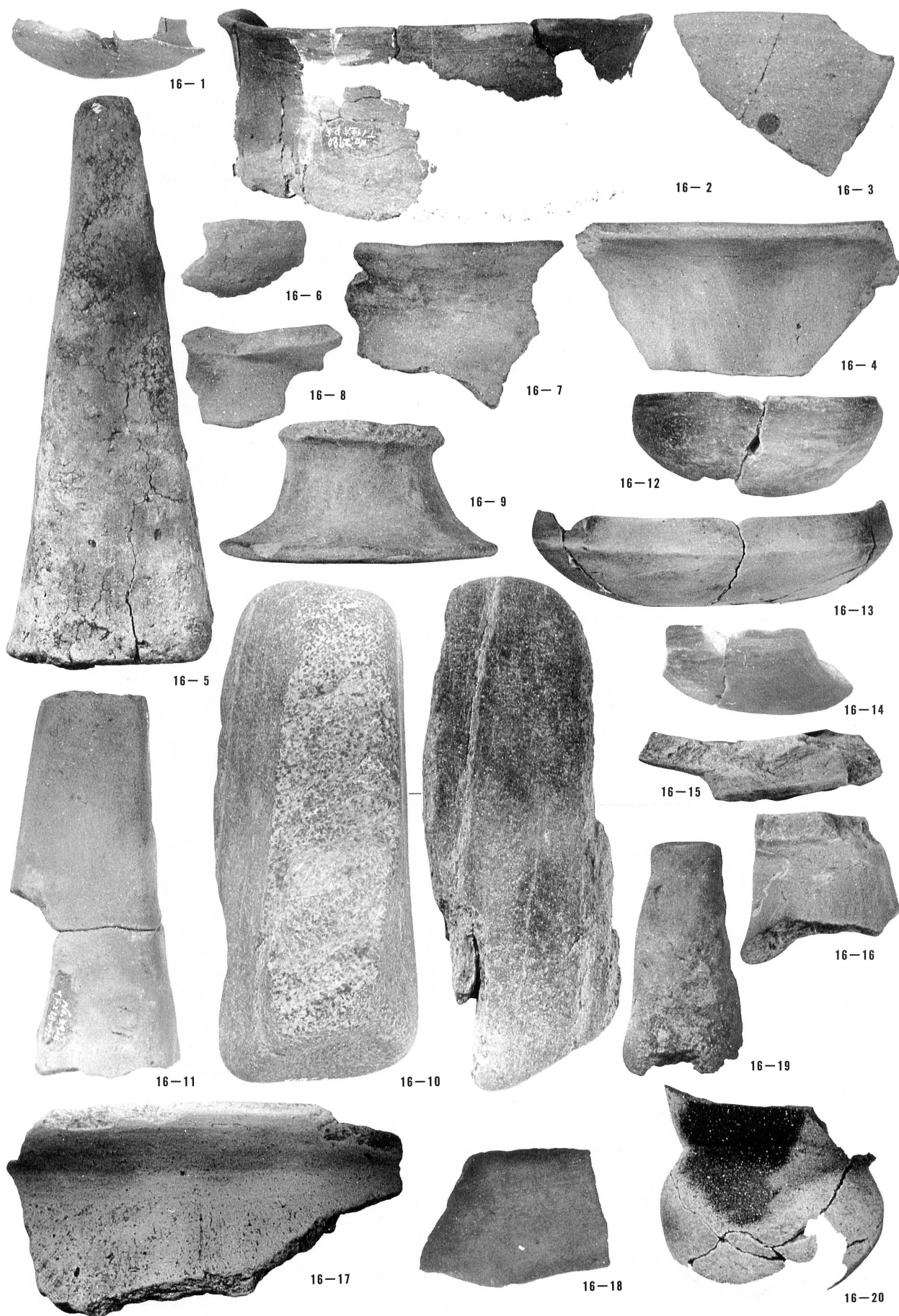
F-20トレンチ
6号溝状遺構
検出状況



主な現地調査参加者の皆さん 後列右端は藤野総務課長（日本石灰）
左端は秋葉氏（日本石灰）





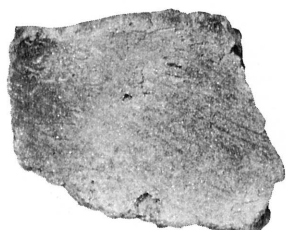




8-13表



8-13裏



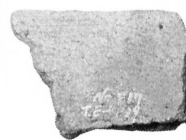
8-14表



8-14裏



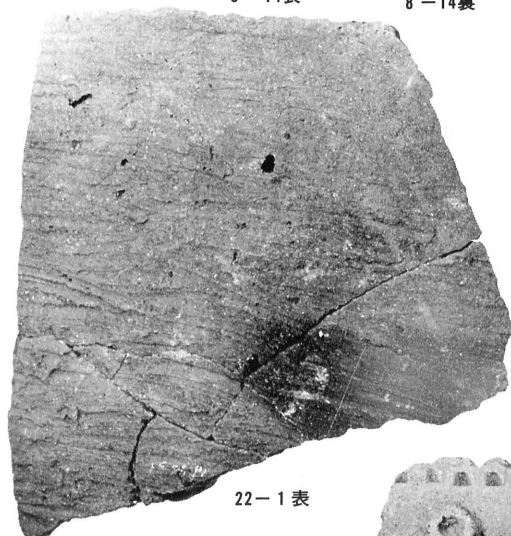
22-2表



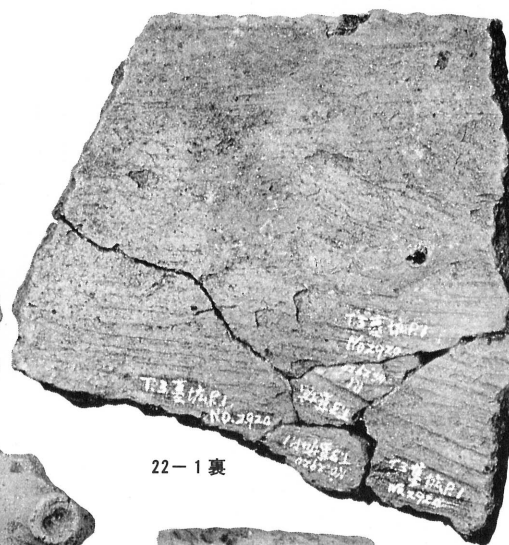
22-2裏



22-3



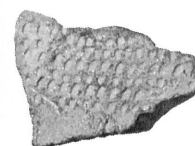
22-1表



22-1裏



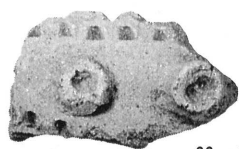
22-4



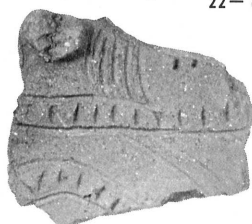
22-9



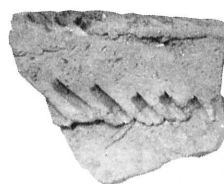
22-7



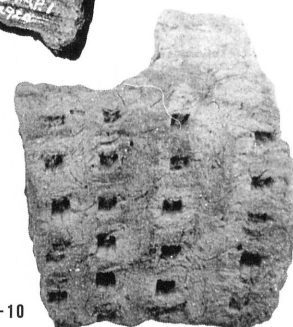
22-8



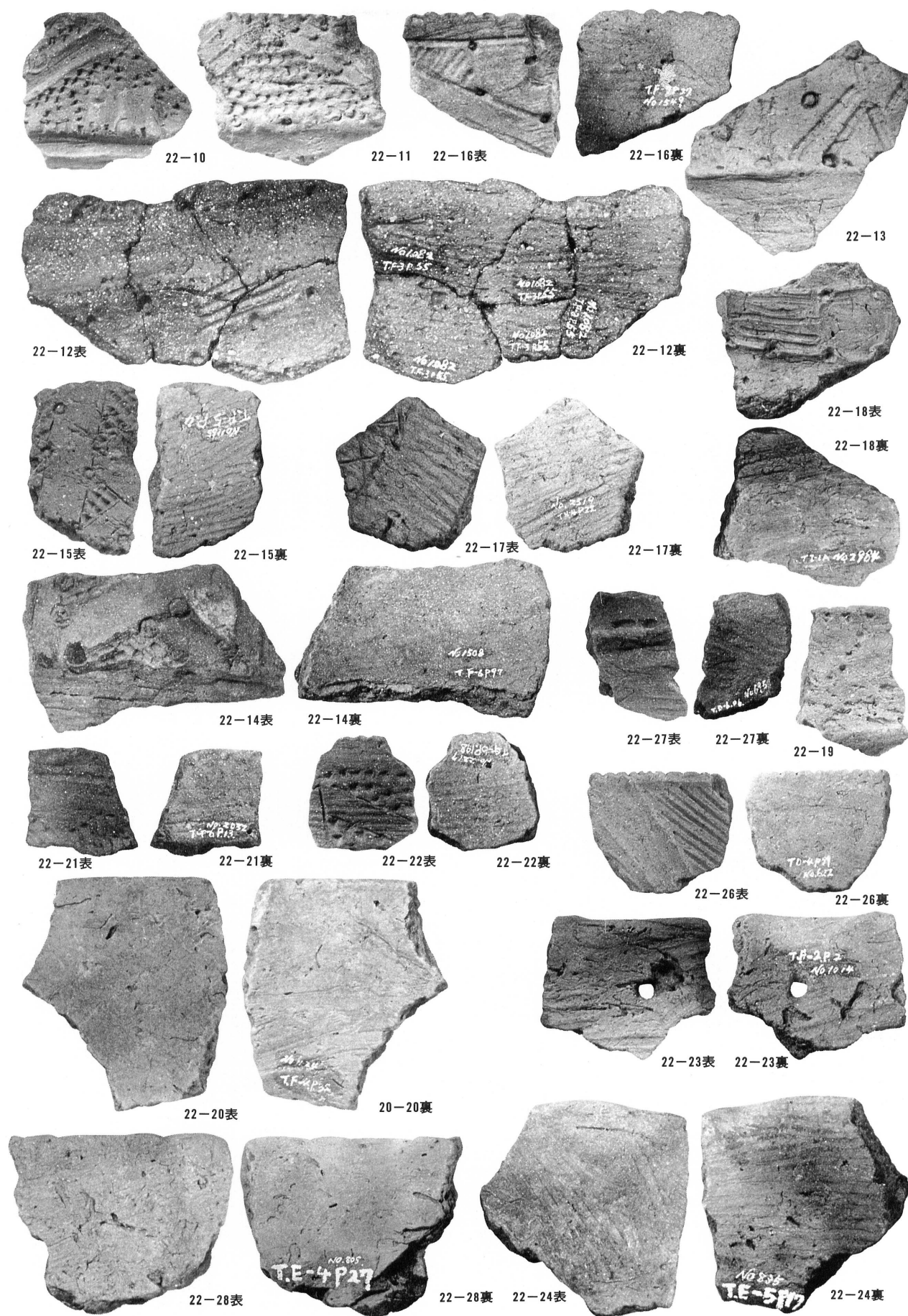
22-6

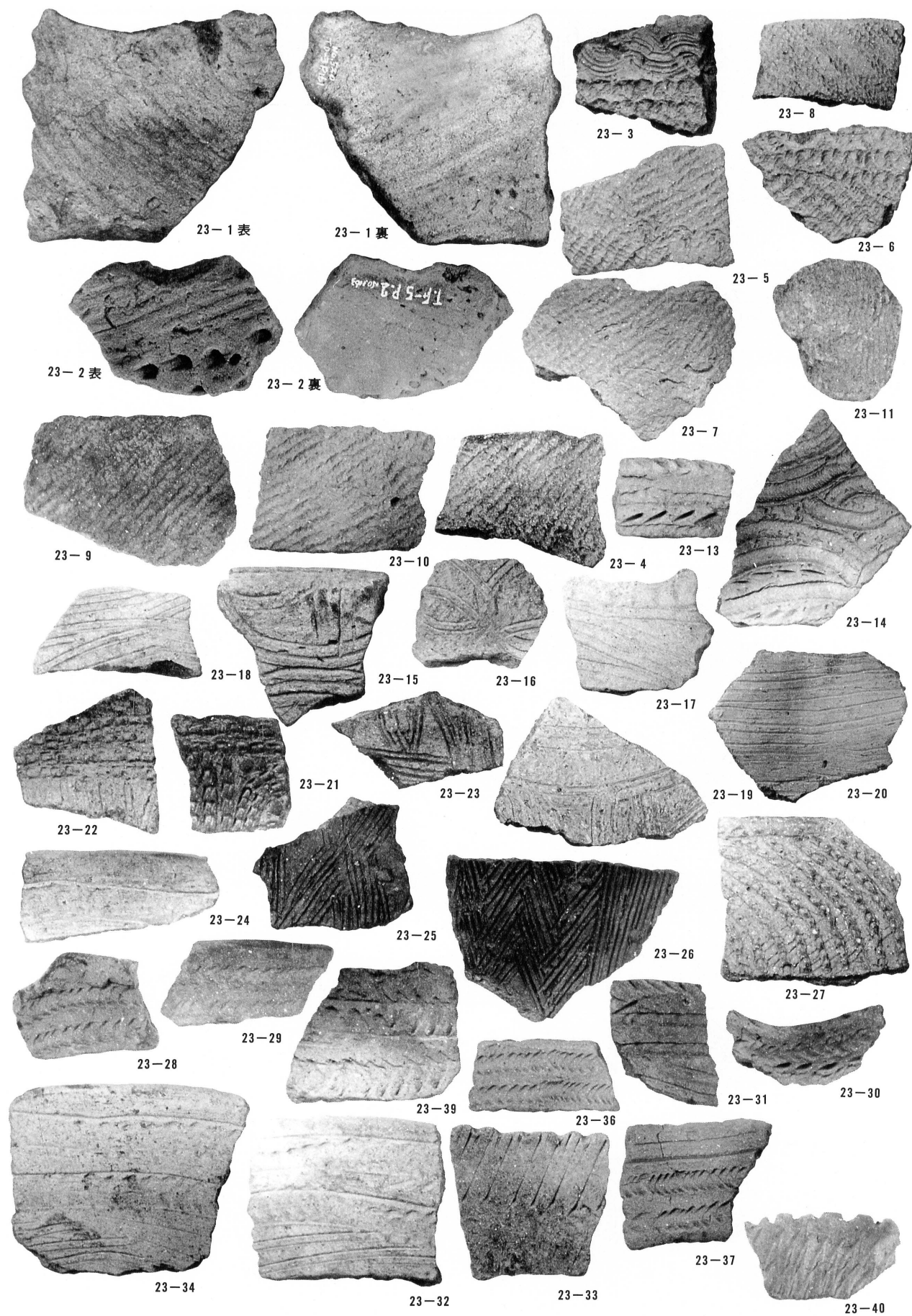


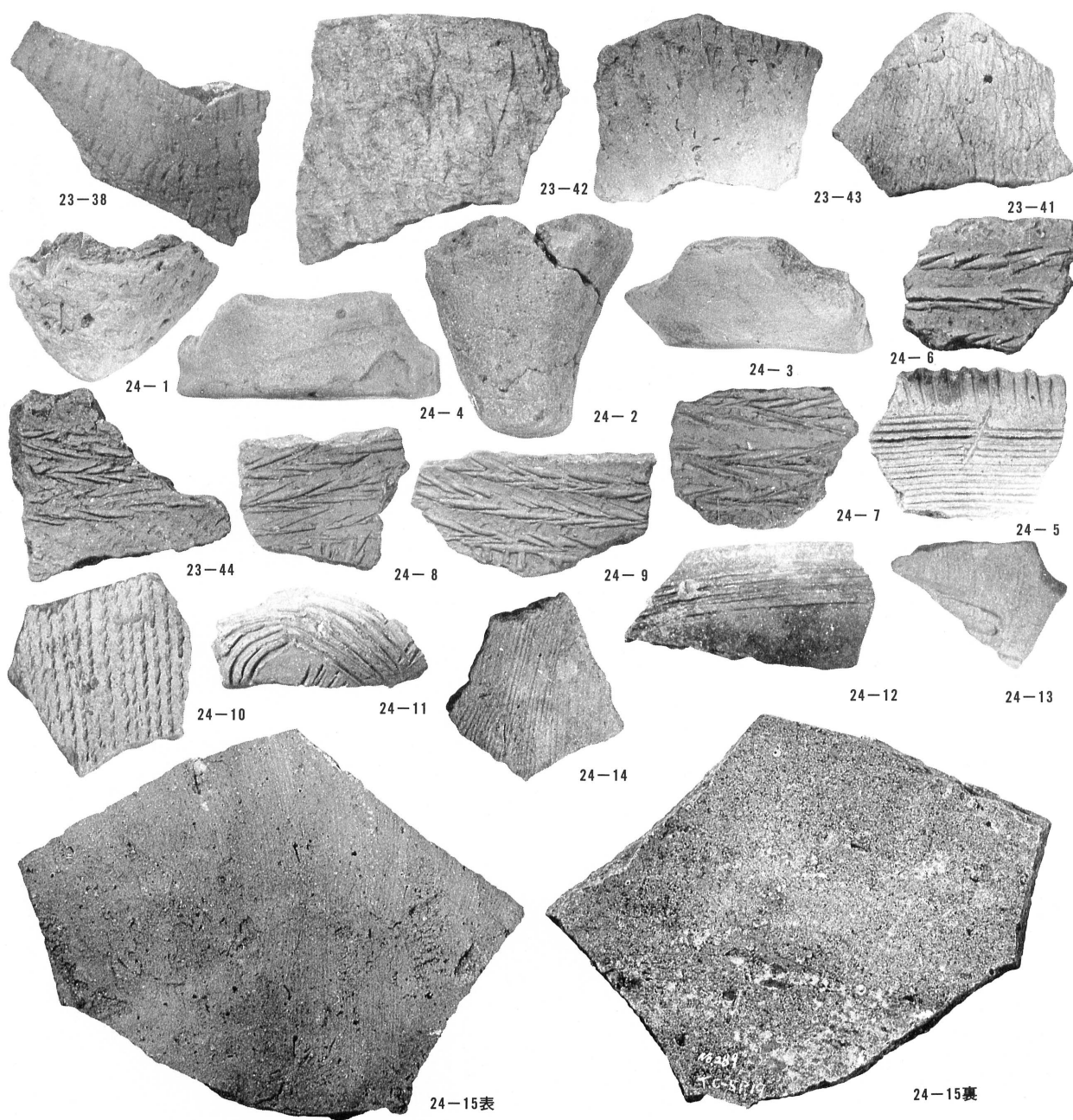
22-12



22-10







24-16



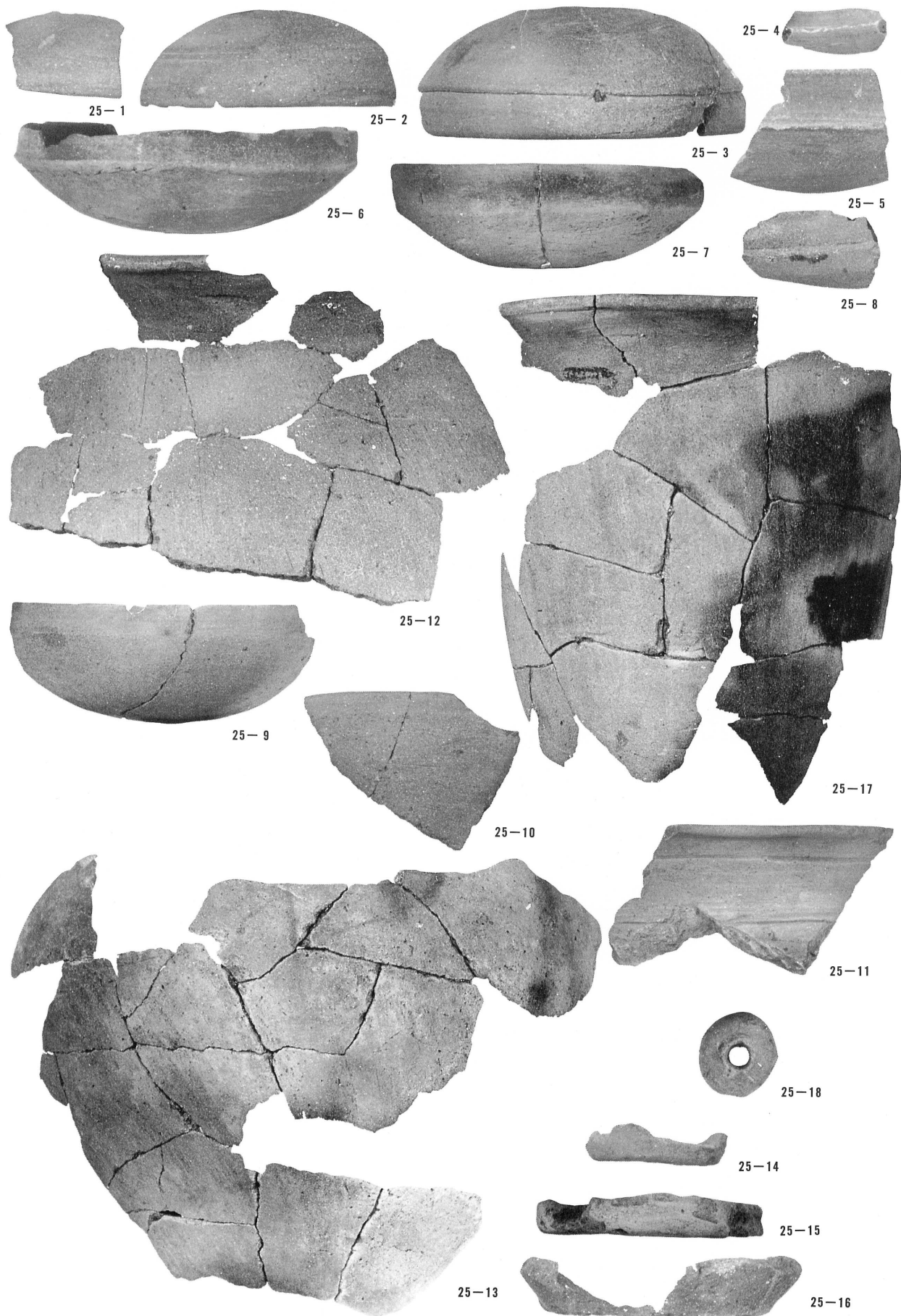
24-17



24-18



24-19



写真図版

〈八幡御所跡推定地〉



南側土塁（西より）



南側土塁（南より）



南側土塁遠景（南より）



土塁内部遠景（北より）



土塁北西部（北より）



西側土塁（南より）



1トレ・5トレ交差部



1トレ・5トレ交差部







報告書抄録

ふりがな	いちほらしおおまたつみがはらいせき・やわたごしょあとすいていち							
書名	市原市大厩辰巳ヶ原遺跡・八幡御所跡推定地							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第64集							
編著者名	栗田則久・田中清美							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290千葉県市原市能満1489番地 Tel0436-41-7300							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおまたつみがはらいせき 大厩辰巳ヶ原遺跡	千葉県市原市大厩 字辰巳ヶ原1792-1,2	12219	924	35° 33′ 41″	140° 05′ 54″	確認調査 19810413 ～0428 本調査 19810506 ～0612	確認調査 3130の 10%313 本調査 672	宅地等開 発事業に 伴う事前 調査
やわたごしょあとすいていち 八幡御所跡推定地	千葉県市原市五所 字神明1746他	12219	901	35° 33′ 26″	140° 06′ 39″	確認調査 19810610 ～0620 本調査 19810826 ～0829	確認調査 4600の 10%460 本調査 210	店舗用駐 車場等造 成に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大厩辰巳ヶ原遺跡	集落跡	縄文時代早期 古墳時代後期 中世（鎌倉時代）	炉穴群3群 竪穴住居跡3軒 溝1条	縄文土器 土師器・須恵器 常滑甕片		縄文時代早期末葉の 炉穴群と古墳時代後 期の集落など		
八幡御所跡推定地	館跡	中近世	土塁	特になし。		小弓公方、足利義明 の館跡と伝えられて いるが、今回の調査 では、確証を得られ ていない。		

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第66集

市原市大厩辰巳ヶ原遺跡・八幡御所跡推定地

平成11年 3 月25日 印刷

平成11年 3 月31日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 大厩辰巳ヶ原遺跡等調査会
財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市能満1489番地
T E L 0436 (41) 7300

印 刷 株式会社 弘 文 社
千葉県市川市市川南2-7-2
T E L 047 (324) 5977